
トリスアギオン とある勇気のストーリー

ふゆきつね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トリスアギオン とある勇気のストーリー

【Nコード】

N7562R

【作者名】

ふゆきつね

【あらすじ】

有人ロボットを駆使する国際救助隊「トリスアギオン」が存在する世界。

大火災を起こした病院へ救助のために突入することになった「わたし」がそこで見たものは……。

Mission 01:「再会」(前書き)

ずいぶん昔、「トリスアギオン」というアニメの企画がありました。「ロボットを使った人命救助もの」というキーワードに反応した私は、勝手に盛り上がって何話か小説を書いてしまい……ひっそりと公開したあと消してしまいました。

そしてこのあいだの地震……未曾有の惨事の中で、あきらめない人たちの姿を見て自分が以前に書いたお話を思い出し、引っ張り出してきてしまいました。

このお話を「必ずどこからか現れる無名のヒーロー」たちに献げます。

Mission01:「再会」

Mission01:「再会」

「あら、生きていたのね」

携帯電話から聞こえてきたその声は、ずいぶん懐かしいものだった。

「ああ。無事だった」わたしはそう答えながら足下のコンクリート塊を蹴飛ばした。それは水たまりの上を飛沫をあげながら転がり、すすけた壁にぶつかって止まる。

「スラックスがずぶ濡れで、ジャケットは焦げているがね。運良く18階にいたんだ。19階にいたら駄目だったかもしれない」

声が震えないようにするのはかなりの努力が必要だった。

「あいかわらず幸運な人」電話の向こうでくすくすと彼女は笑った。なにもかもが幸福で、なにもかもがうまくいっていたところを想い出させる笑い声だった。

「ああ、そのとおりだな。君はあのときどこにいた？」

必要以上の感情を込めずにわたしはたずねる。実のところ彼女がどこにしようが興味はなかった。それよりも早く話を切り上げたかった。もう二度と彼女とは会うまいと心に決めていたのだから。

「私？私はまだ35階よ」

わたしの体温は急速に下がっていた。無意識にこの「グレン・バード記念病院」の配置図を凝視している。

35階。最上階から5階下のフロア。なぜそんなところにいるのだ。

「はやく屋上へ行くんだ。ヘリが救援に来てくれる」

爆発が起こったのは20階。さつき消防士たちの会話を耳に挟んだが、炎は早くも27階に達し、いまだ衰える気配がないらしい。

「それが無理なのよ」

「怪我でもしたのか」

「いいえ。私は大丈夫。だけど、動かせない患者がいるの」

「誰だ？」

「河本センセイよ。あなたも知っているでしょ」彼女の口調はむしろ楽しそうだった。

そうだった。35階は彼が「借り切った」フロアだった。だが…。

「なぜだ？彼の症状はごく軽微なものだったぞ？入院の必要もないような」

彼の入院の理由は表向きには不整脈だったが、真相は贈収賄事件を追求するマスコミから逃れるために過ぎなかった。それは周知の事実だし、わたし自身もそれは確認していた。

「ええ、だけどもそれはそうじゃない。さっき冠不全の症状が出たわ。この火事はよほどこの国会議員の心臓にこたえたみたいよ」

たしかに危険である。このまま放置すると心筋虚血が続いて心筋細胞が壊死に至り、最後は心筋梗塞だ。

「どうしたの？わたしの見たところではさほど意外な症状じゃないわよ」

「だろうね。彼はあまり模範的な患者じゃなかった。たしか入院したときに一度だけしか医師に診察させなかった。それからもう、驚くほど素敵で不健康な休暇をすごしていたようだ」

美食、酒、煙草、そして美しい女性。あれではどんな健康な老人でも、いや、老人でなくてもあの世へまっしぐらだ。

「……でしょうね」

受話器からため息が漏れた。そこで電話はぷつりと切れた。回線が焼けてしまったらしい。

わたしは消防本部へと走り出した。

1階の警備室に設置された仮設消防本部で責任者をつかまえるのにさほど時間はかからなかった。

「35階。まだいたんですか？そのうえ動かせない病人とは」つばの広い帽子から水滴を滴らせている男はわたしから事情を聞いて顔をしかめた。部下に命じてモニターの画面を切り替えさせる。

「どの部屋分かかります？」

わたしは部屋の番号を教えた。実のところ、このフロアには10室しか病室はない。20階から上は医療サービスのついたホテルのようなものだからだ。

……いた。

ノイズ混じりの白黒画面に彼女が映っていた。電話は駄目でも映像回線はまだ生きているようだ。腕組みをして上半身を壁に預けている。少しいらだっていたとき、彼女はいつもこの格好をしていた。それから上目遣いでわたしをにらみ、辛辣な意見をぶつけたものだった。

「女医さんですか。電話をしてきたのは」

「正確には違います。彼女は科学捜査官。医師の資格は持っていますが」少し痩せただろうか。わたしは馬鹿なことを考えていた。

「それと患者がひとり。ほかには誰もいません」

「皆逃げたそうです」彼女から聞いたことをそのまま伝える。

「秘書も？取り巻きも？」

「はい」

「沈む船からネズミは逃げる。か」消防隊長は誰ともなくつぶやいた。

わたしはにやりとした。彼とはそのあたりの飲み屋で偶然隣り合わせても話が合うに違いない。

「森川。藤田。林」ひとつため息をついたあと、彼はてきぱきとした口調で三人の名を呼んだ。金属の杖を支えにしたり、テーブルに腰掛けていたすすだらけの男たちは滑るようになめらかに立ち上がる。みな若い。

「へりで最上階にあがって、35階まで降りる。女医さんと議員を連れだして、また上から脱出。15分だ」

若者たちはうなずく。まったく言葉を発しなかった。

「ちよつと待ってくれ」わたしは慌てて言った。「彼は、河本議員は動かせない。ちゃんとした措置をしないと運搬にも耐えられないだろう」

「自分は緊急医療士の資格を持っていますが」藤田という男が怒ったような口調で言った。

「いや、そんなレベルじゃない。ちゃんとした医者でないとだめだ。ひよつとするとバイパス手術の必要があるかもしれない」

「医者なら彼女がいるじゃありませんか」と隊長。

「無理です。麻子……彼女はあくまでも警官ですから」彼女は医師としての知識と能力を犯罪捜査にのみ生かしてきたのだ。おそらく実務経験は皆無のはずだ。

「なんでもって科学捜査官が彼の病室に……」

「避難中に偶然通りかかったとか」

いや、おそらく内偵だろう。わたしは推測した。女医の格好をしてむくつけき護衛の目をごまかそうと……いや、ひよつとすると議員を色仕掛けでどうにかしようとするつもりだったのかもしれない。麻子はそういうところでもないところがあった。

「じゃあ、どうすれば」

「そう難しいことじゃありません」朗らかな口調でわたしは言った。「道具を持った心臓外科医を連れていけばいいんです。うまくいけば投薬で症状は安定するかもしれませんが、最悪手術をするといつても胸部を切開して人工血管でバイパスしてやるだけです。応急処置ですから」

「分かりました。本部に連絡して区の病院から……」

「その必要はありません。ここに心臓外科医がいますよ。あなたがたの目の前に」

部屋中の人間が驚きの声を上げる。もつともその言葉に驚いたの

はほかならぬわたし自身だった。だが、今さらあとへは引けない。

「心臓外科医？あんたが？」消防隊長はひどく疑わしそうにわたしを見つめた。目の前の人物がとうていそのように見えないらしい。わたしは自分の肩書きと他人の認識が一致しないことには慣れきっていたので、ただ肩をすくめただけだった。

しばらく黙りこくつたあと、隊長はゆっくりと言った。

「キツイですよ。本当は訓練を受けていない人間を送っちゃいけないんだが」

「分かっています」わたしは本当に分かっているのだろうか？自分がないをやるうとしているのか本当に理解しているのだろうか？「一筆お願いします」しばらく考えてから彼は紙切れを取り出した。わたしは胸ポケットからボールペンを取り出すと乱暴に書き殴った。

「読めませんな」紙を受け取った隊長はなんども首を振った。

「なに、医者のカルテなんて、そんなものですよ」

「……林。装備を一式持ってきてくれ」

ヘリコプターがこんなに急上昇できる乗り物だと知ったのは今日が初めてだった。わたしは重い装備と加速度でなかば床に押しつけられていた。

3人のレスキュー隊員は冷然とわたしを見つめていた。

今度は突然体が浮き上がった。無言のまま3本の腕が伸びてきてわたしを押し上げる。ヘリが屋上に達して上昇を止めたのだ。さらに黒煙の中を無謀なまでの速度で横滑りする。目を凝らすと真下に白線で描かれた円があった。ヘリポートだ。

「いくぞ」森川が怒鳴った。わたしも立ち上がる。

「あんたはあと」ぐいとベルトが引かれて尻餅をつく。藤田だった。森川と林がハッチから身を乗り出し、するりと着地する。

「あんただ」怒鳴り声より先にわたしは押し出されていた。恐怖を感じる間もなく二人の男が腕を伸ばしてわたしを抱え降ろす。

救急箱を抱えて藤田も降りた。「よし。いいぞ」叫ぶと同時にホバリング状態のヘリは轟音を響かせてヘリポートから離れていった。「いいか。非常階段を使って35階まで降りる。火は30階まで来ているから、下へ行くほど煙はひどくなるはずだ」

林がプラスチックケースに挟まれた設計図をなぞりながら指示を出す。藤田と森川はうなずきもしない。

「処置にはどれくらいかかる？」

これが自分へ向けた質問であることに気がつくまで数秒かった。わずかながら思考の時間が必要だった。

「投薬のみなら5分。手術なら30分」

「そんなところだな」と藤田。少しほっとする。

「急ごう」森川が叫ぶ。

「屋上へ到達。いまから突入します」林が無線機に報告するとリズミカルな歩調で走り始めた。

即座に二人が、ワンテンポ遅れてわたしが続いた。

「ほかに取り残された人はいないのか？」

階段を駆け下りていく彼らを追いながらわたしは尋ねた。

「いない」

「こんなにすごい火事なのに？」

「凄すぎたんだ。20階と21階はきれいに吹き飛んじまって、生存者はまったくいなかった。それより上のフロアの人間は屋上からヘリで救出したし、それより下の人間は俺たちが助けた」息も切らさずに森川が説明する。

彼らは一段も階段を抜かすことなく、滑るような足取りで降りていた。

「いつたいなにが爆発したんだろう？」

「知らん。もともと病院は危険物が多い。酸素ボンベや可燃性ガスやら薬品やら……先生の方が詳しいんじゃないのか」

人が通らない通路にずらりとボンベが並べてあったことをわたし

は思い出す。ここの連中の安全管理の甘さ加減をわたしは呪いたくなかった。

「だが、18階以上に人があまりいなかったのは幸運だった」

「改築したばかりだね。20階より上はいわゆるVIP用の病室だ」都心の総合病院で利益を追求するとどうなるかという典型例がこれだ。

「なるほど。着いたぞ」

隊員たちは「35」と描かれた防火壁の前で立ち止まった。誰も呼吸を乱していない。わたしは少し誇らしくなった。それにしても屋上よりもこの方が温度が高いように感じるのは気のせいだろうか？

林はそつと防火壁に手を近づけ、それから手袋を外して手のひらを押しつける。そしてうなずいた。

「開けるぞ」林が宣言する。

またもやベルトが強引に引つ張られた。放り出されるように扉の陰に引つ張り込まれる。

「たとえ安全が確認されていても、」藤田の声は耳鳴りがするほどだった。「ドアの正面に立つちゃ駄目だ」

林がにやりと笑いながら扉を開けた。

かすかに聞こえる非常ベルと、どこからともなく漂ってくるきな臭さをのぞくと35階はいたって平穏だった。彼女がパニックに陥らずに電話をできたのはこのためだろう。隊員たちは無言のまま病室まで走り、扉をノックした。

「開いてます」聞き慣れた声は少し震えていた。

林はドアをひっpegがさんばかりの勢いで開けるとわたしを中へ押し込む。よろけたわたしが顔を上げると正面に彼女がいた。

田上麻子。優秀な医師で警官。数々の思い出を、よき思い出を共有する人物。以前はわたしの配偶者だった女性。

彼女は目を大きく見開いてわたしを見つめていた。一言も言葉を

発しなかった。

「やあ。久しぶり……でもないか。さっき電話をもらったし」
まだ彼女は黙っていた。なんども目をしばたかせていた。

「少し痩せたんじゃないか」

ゆつくりと麻子の唇がほころんだ。

「5年ぶりに会っていうことがそれなの？あなたらしいわね」
わたしは苦笑した。まったくもってそのとおりだ。

「先生」藤田がわたしに声をかけ、救急箱を手渡した。わたしはそれを受け取ると蓋を開ける。

「先生？あなたが？」

「いろいろ経験を積んだんだよ。頼むから冷徹なコメントでわたしのやる気をなくさせないでくれ」

もごもごとつぶやきながら、いまや本物の病人となった河本氏の手首を取る。聴診器を当てるまでもなかった。異常なまでに脈拍が多い。

何度か議員に呼びかけてみるがうなり声だけで明瞭な返事はない。

「胸が痛むとか言っていたか？」本人から話を聞くことをあきらめて麻子に問いかけた。

「ええ。たぶん狭心症だと思うわ」

窓の近くで無線機に向かって状況を報告していた林がこちらを振り向いた。

「どうですか？先生」

「ニトログリセリンの投与でなんとかかなりそうだ」過去の記憶を掘り起こしながらわたしは答えた。とりあえず移送中はなんとか持つだろう。扉を開けて森川と藤田がストレッチャーを押してくる。

「何ミリグラム？」手早くアンプルを取り出して麻子は尋ねる。

わたしは患者のベッド枠に取り付けられた液晶に手を触れた。電子音とともに数字が表示された。

127キログラム。

……いくら何でも多すぎる。たぶん二人分だろう。

わたしは今朝、VIP専用エレベーターから降りたつたモデル顔負けの女性のプロポーションを思い出した。127キロから40キロを引く。

「患者の体重がおよそ87キログラムだから……」わたしはちらりと彼女を見た。

「了解」麻子は即座に投与量を計算してアンプル内の薬剤を点滴バンドに移した。超小型のモニタリング装置と自動注射器が組み込まれたそれをあつという間に河本議員の左手に固定し、スイッチを押す。かすかなガス作動音が聞こえ、彼の静脈に針が打ち込まれる。全くの遅滞もなかった。意志の疎通は万全だった。わたしはまるで時間が巻き戻ったような感覚さえおぼえていた。議員の静脈にゆっくりと点滴液が流れ込んでいった。

こちらの作業が終わると同時に救急隊員は国会議員の肉体を持ち上げ、ストレッチャーに投げ出すように乗せる。

「行くぞ」叫び声をあげると彼らは廊下に飛び出した。

わたしは長い吐息をついた。

「ごくろうさま」麻子はおかしそうだった。

「よしてくれ」

「それにしても、どうして戻ってきたの？」

わたしは肩をすくめた。自分でも分からなかったのだ。

「先生たち！早く！」林が叫んだ。わたしと麻子も彼らを追って部屋を出た。

ヘリでビルに降り立つてから10分も経過していなかった。

だが、部屋を出て5メートルも進まないうちに奇妙な振動を感じた。皆も立ち止まる。

「なにかしら？」つぶやく麻子。

数秒後、立っていられないほどの衝撃が全員を襲った。廊下の端の防火壁が巨人の拳に殴られたようにひしゃげる。非常階段の下の方でなにかが爆発したのだ。

「伏せろ！」林が叫ぶ。わたしは麻子に覆い被さるように伏せた。

その直後、扉の隙間から吹き出した炎が猛烈な速度で天井と壁面を舐めてゆく。蛍光灯が軽やかな音を立てながら連続して爆発した。スプリングラーが悲鳴のような音を立てて水を放出する。

悲鳴があがった。

藤田が炎に包まれて転がっていた。林と森川が飛びかかって押さえつけ、銀色の毛布のようなものを覆い被せて炎を消し止める。悲鳴はやがて小さくなり、ぜいぜいとのを鳴らす音に変わった。ノーマックススーツのおかげで、見た目よりも被害は少ないらしい。だが、別のところから細い悲鳴が続いていた。わたしの頭上、ストレッチャー上から。

河本議員が意識を回復したらしい。

「助けてくれ。助けてくれ。何で俺がこんな目に遭わなくてはいけないんだ。どうしてなんだ」

のぞき込むと弱々しい口振りに反して怪我ひとつしていない。運のいい人物だ。

……弱音を吐きたいのはわたしの方だ。あんたが不摂生さえしてなければこんな所へのこのこやってくる必要はなかったのに。

よほどそう言っただけでよかったがなんとか我慢する。

なんといいても今のところ、彼はわたしの患者なのだ。患者の多少のわがままは目に見てやるべきなのだろう。

林は二、三度首を振ってからかすれた声でわたしたちに指示を出す。

「非常階段は駄目だ。別の道を探そう。森川、先生、ストレッチャーを押してください。女医さんは藤田を」

わたしと森川は中腰になってストレッチャーを引っ張り、麻子は救助隊員に肩を貸して立ち上がらせる。

「どこへ行くんです？」

「とりあえず反対側の階段へ」

どこかでまたなにかが爆発していた。

「駄目だ」防火扉に手をかざしていた森川が首を振った。「扉がかなり熱を持っています。向こうは火が回っていますね」

「ちよつと待ってください」林は無線機に耳を押し当てていた。「畜生。分かった」乱暴に送信ボタンから親指を離す。

「通常階段も、非常階段も両方とも炎が回り込んでいるそうだ。15階で消火活動をしていた連中も12階まで下がったらしい」

「じゃあ、ここで助けを待つしかないのか」

わたしの問いに林は首を振った。

「いや、それでは持たない。あと1時間ほどでこのフロアにも火が回る」

急に室温が上がったような気がした。

「ほかに通路がありましたっけ」

「それなんですが、」林はにやりと笑う。「VIP用のエレベーターがありましたよね。下の連中が調べたらあのシャフトにはまだ炎が入り込んでいないそうです。上からウインチで引っ張り上げてもらいます」

わたしはため息をもらした。ほかの人間も同様だった。

「さすがね」麻子がほえんでいた。

「なにがだ？」

「あなたがたぐいまれな強運の持ち主ってことよ」

まったく悪意のない笑みを、わたしに向かって彼女は浮かべていた。

いったい何年ぶりのことだろうか。

わたしは彼女にどう答えるべきか分からなかった。

応援がへりで到着したとの連絡があるまで10分。林と森川、それからわたしが力を合わせてエレベーターの扉をこじ開けるのに5分かった。開けたとたんに熱気が吹き出してくる。下の階ではかなり炎が激しいらしい。さらに最上階の救急隊員たちが機械室でエレベーターのブレーキをゆるめるのにさらに5分かかった。その間

にもフロアを漂う煙は徐々に濃度を増していった。

「気をつけて。カゴが降りてきます」

無線で話をしていた林が警告する。ごろごろと音を立てながら上の階に止まっていたエレベーターがゆっくりと下りていく。

「あれに乗ってそのまま降りてもよかったんじゃないかな？」

「そして燃えている階を蒸し焼きになりながら通過するのね。できるわけないでしょ？」

「ごもつとも」

彼女は変わっていないかった。辛辣な口調も、攻撃的な姿勢も。なぜかそれを喜ばしいこととわたしは考えていた。過去にはそれを憎んでいたにもかかわらず。

「それにしても、わたしに連絡したあと君は逃げてもよかったのに」その通りだ。そうすればヘリで乗り付けた我々と入れ替わりで脱出できたのだ。それがもつとも適切な判断だったはずなのに。

「いやよ」

「どうして」

「だって」麻子は薄く笑った。「あなたと結婚していたことで、ただでさえ評判が悪いのに、病人をおきざりにして逃げたんじゃあね。転職もできないほどの悪評が立つのは間違いないでしょうね」

「そ、そうかね」

「あなた方、結婚していたんですか？」ガーゼを顔中に貼り付けている藤田がくぐもった口調でたずねた。

「ええ。認めたくないけれど」

「なぜ別れたんです？」

「見りや分かるだろ」

「わたしを裏切ったのよ。この人」彼女はぴしゃりと言った。まったく容赦しないところも昔のままだった。

そう、最初はいわば「服従と支配のゲーム」だった。お互いにそれは理解していた。一種の休戦中とはいえわたしも彼女も相手を憎悪していた。少なくとも憎悪していたはずだった。

だがそれはいつしかひどく甘くて切ないものになった。

ついにある日、わたしは耐えきれなくなったのだ。まっすぐわたしを見る麻子の視線に。決して諦めることのない信念に。

だが、わたしはもはや変わることはできなかった。人生における一種の引き返し不能点を通り過ぎていたのかもしれない。

わたしがいなくなつた夜、彼女が子供のように泣いたことを知つたのはずいぶん経つてからのことだった。

「牽引具を下ろしてもらうまであとどれくらいですかね？」

突然森川が明るい口調で林に尋ねた。雰囲気を変えたかつたらしい。

「あと10分もかからないだろう。すぐだ」

そうですね。相づちをうちながら、ふとわたしは何の気なしに河本議員へ視線をやった。

彼は苦悶の表情を浮かべていた。胸を押さえて。

わたしは彼に飛びついていていた。

「河本さん、胸が苦しいんですか？痛いんですか？」

「くる、くるしい。おしつけられるようだ……」

二度目だ。それもこんな短時間に。思ったよりも症状は悪いらしい。自分の血が引く音が聞こえるようだった。

わたしは判断を迫られていた。

このままだと心筋梗塞になるのは間違いない。もう一度ニトログリセリンを投与するか。それともバイパス手術か。いや、手術をしている時間はない。

いや違う。手術を行うのは不可能なのだ。ぜったいに。

可能な限りすぐに引っぱり上げて病院へ運んだ方がはるかにいい。

「もう一度ニトログリセリンを投与する」宣言すると点滴液を取り出した。

「来た！」森川が叫んだ。フックのついたストラップが不安定に揺れていた。林と森川、さらに麻子がそれに飛びついて引き寄せた。わたしが安堵しつつ議員をストレッチャーから降ろそうとしたとき、

林が叫んだ。

「違う。あんたが先だ。上でこの病人を迎えてくれ」

「いや、ちょっと……」

「点滴静注はやっておくわ」

麻子の言葉で決心がついた。さつと林がそれを奪い取るとなれた手つきでわたしの身体にベルトを巻き付け、金具で固定した。何度か引つ張ってわたしが確実に牽引具に固定されていることを確かめると、なにも言わずにわたしをエレベーターシャフトに押し出した。乾いた熱気が全身を包む。

「上で待つてる」麻子をまつすぐ見て言った。

「すぐ行くわ」彼女はうなずいた。

「医者が一番手だ。上げてくれ！」林が無線機に呼びかける。不安を感じる間もなくわたしは上昇しはじめた。

「よし来たぞ。あと3メートル、2メートル、1メートル。ストップ！」

ウインチの音が唐突に止んだ。ひどくまぶしい。あちこちから手が伸びてわたしを乱暴にひつつかんだ。どさりとコンクリートに身体が投げ出される。思わずうめき声を上げた。あつという間にストラップがむしり取られた。

「いいぞ！降ろせ」

モーターが回転する音が聞こえてきた。身を起こすと誰かが肩をつかんで後ろへ引きずっていく。抗議の叫びを上げるがまったく無視された。ようやく目が慣れはじめる。

4人の男たちが汗みどろになりながらシャフトをのぞき込んでいた。仮設の消防本部にいた隊員たちだった。

1分ほどだっただろうか。無線機から林の声が聞こえる。救急隊員のひとりがスイッチを入れた。しばらくすると見知った顔が上がってきた。

「丁寧に扱ってくれ。病人だ」さっきのわたしのように放り出さ

れてはかなわない。願いは聞き届けられた。隊員たちは議員を可能な限りそつと担架へと移す。狭い機械室の中をわたしは這って進むと彼の胸に聴診器をあてた。呼吸を止めて耳をすます。

「大丈夫だ。移送してくれ」肩から力が抜けた。彼の症状は安定していた。二人の隊員が担架をそつと持ち上げるとヘリポートへ出る。わたしもそれに付き添った。そこではヘリコプターが待っていた。

「狭心症。ニトログリセリンを点滴静注済み。急いでくれ」患者が固定されている間、ヘリに同乗していた医師らしき人物に大声で状況を知らせる。

「あんたは乗らないのか？」医師が叫んだ。わたしは少しためらった。状況を分かっている医師のわたしが付き添うのは常識だろう。だが、まだ下には麻子たちが残っている。

わたしがここへ来たのは、この病人を救うことだけが目的ではないのだ。

「そうだな……」

わたしの返事は爆発音にかき消された。

振り返ったエレベーターの機械室の扉と窓が完全に吹き飛び、そこから煙が吹き出していた。

なんの躊躇もなくわたしは機械室に飛び込んでいた。

犬の遠吠えのような長い悲鳴が響いていた。部屋のあちこちではまだ炎がくすぶっている。二人の救急隊員が苦鳴を上げて倒れていた。シャフトの中を炎が駆け抜けたのだ。

「なにしてる。早く出る！」事故を免れた隊員がわたしの腕をつかむ。だが、わたしはそれを振り払ってシャフトをのぞき込む。暗黒のなかにオレンジ色の炎が踊っていた。背後では無事だった隊員が同僚を外へ引きずり出していた。

「誰かいるか」わたしは叫んだ。叫ばずにはおられなかった。

「そっちは大丈夫なの？」低いがはつきりした声が聞こえた。麻

子だった。

わたしは安堵のあまり座り込みそうになったが、氣力をふりしぼってほかの人間の無事を確かめる。

「二人ともひどい火傷よ」彼女は言った。「ワイヤーを引き寄せようと身を乗り出していたから」

わたしは目を凝らした。牽引具が35階付近でゆらゆらと揺れていた。手を伸ばしてロープを引っ張る。耐熱繊維らしいそれはまったく弱っていなかった。

「分かった。とにかくロープに身体を固定するんだ」

「駄目。彼らが先。動けるのはわたしだけなのよ」

彼女を説得するのは不可能なことを忘れていた。また、彼女がいとも正論を述べることも。わたしは麻子が牽引具を危なっかしく引き寄せるのを黙って見守るしかなかった。その間にも35階から漏れ出る煙は濃くなっていく。

ようやく傷ついた隊員がシャフトに押し出された。「いいわよ」麻子が叫んだ。

わたしはウインチのスタータースイッチを押した。動かない。

ウインチを動かすモーターは止まったままだった。もう一度押した。まったくうなりもしなかった。

「動かないのか」救急隊員が手を伸ばしてスイッチをなんども押した。結果は変わらない。

「予備のウインチを持ってきてくれ」

「だめだ。時間がかかりすぎる」

わたしは絶望的な気分にはじめた。

「とにかく、手で巻き上げよう」もうひとりがそう言った。

「できるのか？」

「ああ、ちよつと火にあぶられたくらいで動かなくなるヤワなシロモノだが、こういうものは人手でも動かせるようになってるもんだ」彼はウインチのギヤボックスのレバーを切り替え、ギヤボッ

クスにつながっているクランクハンドルを回しはじめた。カチカチと歯車の音を立て、ワイヤーに張力が加わりはじめた。

「手を貸してくれ。一緒に回してくれ」わたしは我に返ってクランクに手を沿えた。タイミングを合わせてそれを三人で回す。

猛烈な勢いで回しているのにもかかわらずロープはゆっくりとしか巻き上げられない。手のひらが汗でぬめりはじめた。じりじりするほどの時間が経過し、隊員の……おそらく森川だろう……の身体が手を触れられるほどの距離に近づいた。

「よく頑張ったぞ。あともう少しだ」隊員が叫んだ。もちろんクランクを回しているわたしにはない。意識を半ば失っている隊員に対してだ。彼の顔は医師のわたしが見てもぞつとするような火傷だった。

さらに十数秒が過ぎて彼は引つ張り上げられた。脇の下に手を入れて二人がかりで機械室の外へ引きずり出した。そして気がつく。へりはもはや飛び去ってしまったことを。周囲の視界がほとんどないほどに褐色の煙が屋上まで充満していることに。

われわれは完全に孤立していた。状況は絶望的だった。

だが、奇妙なことにわたしは恐れていなかった。どこか感情が麻痺していたのかもしれない。

どこで間違ったのだろうか？

なぜわたしはこんな所にいて、こんな絶望的な状況に陥ってしまったのだろうか。

彼女を救うため？

いや、それは本当の理由ではない。本当の理由はもっと単純なものだ。

わたしには理由は分かっていた。だが、それを認めなくなかった。それはあまりに単純すぎたのだ。あまりに単純すぎて認めることができないほどの理由だったのだ。

「しっかりしろ」切迫したその声にわたしは振り返った。

横たわっている森川の耳元で隊員が叫んでいた。「だいじょうぶ

だ。ぜったい助かる。あんたも。俺も。仲間も。下の女医さんも。信じる」ときおり咳き込むその声はどちらかというと悲鳴に近い。だが、その言葉を彼自身が信じているようにわたしには思えた。彼が嘘を言っているようには思えなかった。

なぜ彼らはここにいるのだろう。

少なくとも数学で答えが出るような理由ではなかった。刑事訴追を待つ老人を救うために6人もの人間が犠牲となるのはどう考えても帳尻が合わない。

にもかかわらず彼らはいる。彼らはなんの躊躇もなくここに来たに違いない。林や、森川たちのように。

それは職業上の義務感だろうか。それともお調子者のヒロイズムだろうか。それとも全く別のなにものかなのだろうか。

わたしは立ちつくしたまま、ただ彼らを眺めていた。

「急げ」機械室からもうひとりの救急隊員が顔を出す。「35階の煙がひどくなってきた」

「麻子！返事をしろ。大丈夫か？」わたしはマスクを外して35階に向かって怒鳴った。声を出すたびに煙が喉を刺し、涙がこみ上げる。

「煙にやられたのかもしれない」隊員がそっぴいながらシャフトをのぞき込んだ。「彼女はマスクを持っていないんだろう？」

ああ、わたしは曖昧に返事をした。煙の奥、はるか階下になにか光るものを見たような気がしたからだだった。

次の瞬間、わたしはそれがなにか理解した。

「火だ！逃げろ」

わめいたのと炎がこっちへ迫っていることを視覚が認識したのは同時だった。わたしは大型モーターの陰へ転がった。むき出しの頭部を両腕で覆う。

耳がきんと鳴った。炎が空気を圧縮しているのだ。同時に熱波が室内を満たす。わたしは絶叫していた。

しばらくしてわたしは意識を取り戻した。周囲を見回す。何分経っただろうか。

救急隊員は二人とも穴の縁に倒れていた。近づいて肩を揺すった。ひとりには昏睡状態で脈も弱っていたが、もうひとりはかすかなうめき声を漏らして目を開けた。気がついたようだ。

「ちくしょう。ちくしょう。ドジった。先生、あんたは大丈夫か？」わたしを認めた彼はひどく聞き取りにくい声でつぶやいた。

ああ。わたしは答えた。

彼は立ち上がるうとする。だが怪我がひどくてうまくいかない。何度ももがいたあと彼は泣き出した。

「すまない。先生。助けに来たのに、うまくいなくて、巻き込んでしまって、ほんとうにすまない」彼はとめどなく謝罪し続ける。

「ちくしょう。どうしてうまくいかなかったんだ。ごめん。ごめん……」

「うるさい」わたしは低い声で彼の言葉を遮った。わたしは猛烈に腹を立てていた。自分自身に怒り狂っていた。

「君が謝る必要はどこにもない。君たちはなにも悪くない。悪いのは……」

両足に力を込めて立ち上がる。疲労と酸素不足で目がくらんだ。置き去りになったボンベとマスクを取ると左肩に背負った。ついでにグローブをむしり取って自分の手にはめる。ウインチから垂れ下がったロープをたぐり寄せて右脇の下に通し、背中を回して左太股に巻く。

「それに、まだ終わっていない」

少なくとも、彼女が失われたことを確認するまでは。少なくとも、わたしが力つきるまでは。

わたしは後ろ向きにシャフトに身を躍らせた。ロープの摩擦力で壁づたいに35階まで降りるのに5分もかからなかった。

そこは暗黒に支配されていた。肩につけてあるフラッシュライトを点ける。姿勢を低くしてひとかたまりにうずくまる彼女と二人の隊員がいた。

「やっぱり来たのね」

くぐもった声がした。マスク越しに麻子がこつちを見ていた。

「もうじき酸素が切れるわ」マスクを外して林の顔に当てながら彼女は言った。

三人で二人分のボンベを共有したのだ。消耗が早いのは当然だった。わたしは左肩のボンベを外して彼女に渡す。

「無駄よ」

「そんなことはない」

「あきらめないのね」

「現実を認めるのがいやなだけだ」

「あんた……」藤田が驚いた表情でわたしを見上げていた。「ロープを使って降りてきたのか」

「以前にやったことがある」

「本当に医者か？あんた」藤田がくぐもった笑い声を上げた。麻子とわたしは顔を見合わせ、そして笑い出した。

「……どうして戻ってきたの？」笑いの発作がおさまったあと、彼女は表情を変えてたずねた。

「助けるためだ。わたしは完璧主義者なんだ」素晴らしいながら麻子に手を伸ばす。彼女はじつとわたしを見上げていた。わたしも今度は視線をそらさなかった。

彼女はわたしの手を取った。そして立ち上がる。

「いいわ。その賭にのってあげる」

残された時間がまったくないことは分かっていた。ロープをたぐり寄せてパイプに固定し、できるかぎりそれをぴんと張るように麻子に指示を出す。彼女は黙ってうなずいた。それから藤田へ振り返る。

「わたしが登り切ったらロープをほどいて牽引具に林を固定するんだ」

そう言つて足首にロープを絡めた。

「あんた、本当に医者なのか？」彼の再度の問いにわたしは苦笑で答えた。

「言つておくが、登りの方が下りよりも断然難しい。気をつけるんだぞ」

返事をする代わりに肩をすくめた。慎重にシャフトに身を乗り出して這い上がりはじめる。3メートル行かないうちに汗が噴き出してきた。太股がふるえているのが分かる。

だが、諦めるわけにはいかない。今朝、わたしは誰にもできないことをやってのけたのだ。今度もできるに決まっている。ほとんど意味のない信念だけがわたしの支えだった。

36階。ここまで15秒はかかっていた。

37階。1分以上かかっていた。

38階。3回滑り落ちた。パイプに足を引っかけて休憩する。あと9メートル弱。途方もない距離だった。

39階の途中で限界が来た。

腕が全く動かなくなつたのだ。なんども深呼吸をする。だが、筋力は回復しない。それどころか、落ちないように身体を支えることさえも難しいほどだった。

絶望がぎゅつと心臓をつかんだ。やはりだめだったのだろう。

しかし、わたしは自身が再び上昇していることを知った。

見上げると人影がひとつ足をふらつかせながらウインチを巻き上げていた。さっきの隊員だ。ハンドルを一回転させることに彼が膨大な体力を消耗していることは明白だった。

なぜ、彼がなぜそこまでして誰かを助けようとしているのかわたしには理解できなかった。なにが彼を突き動かしているのかわたしには分からなかった。

やめてくれ。わたしは叫んだ。君が落ちてしまふぞ。私は大丈夫

だから、少し休めば回復するから。

彼はやめなかった。悲鳴のような声を上げながらハンドルを回していた。

やがてついにそのときが来た。

彼はよろけ、シャフトの中へ倒れ込む。わたしは目をつぶった。落下した彼はわたしと衝突するだろう。その衝撃にわたしは耐えられるはずがない。

衝撃は起きなかった。すぐ横を通り過ぎる突風もなかった。

わたしは目を開けた。落下しかけた彼を機械の腕が支えていた。

「今行きます。あともう少しだけ辛抱してください」

ほとんど少女といってよい声だった。

猛烈な炎と煙を背景に金属の四肢を持つ無骨な巨人が身を乗り出して静止しており、その建設機器を思わせるコクピットから操縦者がこちらを見ていた。すると細いマジックハンドがこつちへ伸び、わたしのベルトを器用につかんだ。そのままぐいと引き上げられる。

ロボットには文字が描かれていた。

「TRISAGION」と読めた。

そして、わたしは失神した。

「やばいところだった。でも、まにあった。全くとってあなたは運がいい」消防隊長がわたしを見下ろしながら言った。わたしは黙ったままただうなずいて、地面に座り込んでいた。

「怪我をした連中は？」

「命は取り留めるだろう」

「そうか」

ほかに何も言うことはなかった。

「先生」隊長が改まった口調でしゃべりはじめる。「あんたに会いたい人がいるそうだ」

わたしは戸口を見た。こんな季節にもかかわらずコートを着た長身の男が立っていた。その後ろには麻子もいた。わたしはすぐに男の正体が分かった。

「やあ」わたしはつとめて明るく挨拶した。男はしばらくわたしを見つめてから、ゆつくりと口を動かした。

「本宮健夫。君をく破壊活動防止法＞およびく組織犯罪対策法＞の容疑で逮捕する」

言葉を失っている消防隊長に男は説明した。

「彼はテロリストだ。この病院を吹っ飛ばしたのも彼だ」

「な、なぜだ……」

「そっくり消えてなくなったこの病院のフロアには某独裁国の大統領兼最高軍事指揮官どのが入院していた」

「『元』だよ」わたしは穏やかに指摘した。「彼は2年前に失脚したよ。いまやその国は彼が刑務所に押し込んでいた無実のひとたちが運営している。もっとも彼はもう一度大統領の座に無理矢理返り咲くつもりだったみたいだけど」

「彼は凄腕のテロリストで、」じろりと男はわたしを見た。「目的をし損じたことがない。そのやり口でこいつは『脳外科医』と呼ばれている」

隊長は男の言葉を理解できないようだった。わたしは助け船を出した。

「脳外科医つてのは患部だけを摘出するんだ。少なくともわたしをニックネームで呼ぶ連中はそう思っている」

そう、わたしはいままで「作戦」で無関係の第三者を巻き込んだことはなかった。今度の作戦においても上下のフロアの人間がいなくなる瞬間を狙ったし、ご丁寧に警備の警官たちをよそへ誘い出すということまでやってのけたのだ。

それが思いもかけぬ大爆発で何もかもがご破算になった。大迷惑もいところだ。

「あんたが、あんたがテロリストだなんて」

彼はまだ信じられないようだった。

そうだろう。

わたしは自分の肩書きと他人の認識が一致しない人間なのだ。それにわたしは慣れきっている。

「同行願います」麻子が硬い表情でわたしの腕を取った。

「ひとつ聞きたいことがある」消防本部をですぐに男はたずねた。「君がこの建物のなかに戻った理由だ」

「簡単だよ。わたしは自分の評判を守りたかったんだ。第三者を巻き込んだことがないという。それでも完璧主義者でね」

彼は何度も首を振った。彼のような男がわたしを理解できるはずはなかった。

「そうか」彼が言ったのはそれだけだった。それから麻子に向かって、

「すぐ戻る。それまで彼を頼む」そう言い捨てると足早に去っていく。

「ずいぶん緩やかな警備体制じゃないか」

麻子は寂しげに笑った。「もう、あなたには行くところがないからよ」

そうだろう。わたしは組織にも見放されたのだ。それは麻子がわたしに電話をしてきた瞬間に理解できたことだった。「使い捨て」にする携帯電話の番号を当事者以外の人間が知っているわけがなかった。

「たぶん、わたしの過剰なロマンチズムが鼻についたのだろう」

「かもね。でも、ありがとう。戻ってきてくれて」

見上げる彼女にわたしは苦笑する。なにも言うことができなかった。

「あなたは立派だったわ。理由は何であれ」

「わたしは自分の犯した罪の最小限の尻拭いをしようとしたにすぎない」

「そうね」

わたしたちはしばらくの間沈黙していた。立ちこめていた煙がようやく収まった現場には、さっきのロボットたちが驚くほど器用に歩き回っていた。

薄くなつた煙が急速に吹き払われた。駐車場ほどのスペースに立っているロボットの頭上にツインローターの輸送ヘリが降下してきたのだ。ロボットのハッチが開くと華奢な体格をしたパイロットが飛び出してヘリから延びたワイヤーを機体に接続した。

それから両手をぐるぐると回す。ヘリはターボファンの音を響かせながら急上昇してロボットともに去っていく。

「もう分かつているでしょ」彼女は不意に言った。「あなたのような種類の人間よりも、さっきあなたと一緒にビルに飛び込んだ人たちが、あのロボットの、TRISAGIONの人たちの方が世界を変える可能性が高いことを」

「彼らは愚か者だ」なにか言いたげな麻子を右手で制した。

「連中はひどくロマンチックな愚か者で、とても勇気のある馬鹿者だ。そして、そんな連中は必ずどこからか現れるのだ。なにかあったときに、誰かが泣いているときに」

爆弾も、銃弾も、事態の解決に役だったことは一度もなかった。ただ別の混乱と悲劇を引き起こしただけだった。それは当事者のわたしが知っていた。

事態を収束させるのは、いつもわたしと異なる種類の勇気を持った人物だった。

それを知りながらわたしは無意味に荒野を歩き続けていたのだ。

「あなたは罪を償えるわ」ゆつくりと彼女は言った。

「償えるとは思えない。この国には死刑はないんだ」

「何年かかっても、償いなさい」彼女は泣いていた。「わたしは、わたしは……待っているから」

そこにはあのとときの彼女がいた。ようやく手に入れた自由にとまどいながら青春を謳歌していたころの彼女が、刑務所を出てどこに

も行くあてのないわたしを受け入れたころの彼女が。

わたしの両腕がそつと麻子の背にまわった。

【END】

Mission02:「鉄血街道」(前書き)

アクションを書いてみたかったです。

そして「戦場での二足歩行兵器」についていろいろと書いてみたくて。

Mission02:「鉄血街道」

Mission02:「鉄血街道」

あと5分早く店を出るべきだった。

いや、5分遅くてもよかった。

とにかく、いま店を出たのはすぐまずかった。

だが、とにかく手遅れだった。

「ヤドラ！あんたいったいなに考えてるの？」

腕組みをしたまま小首を傾げた姿勢で彼女はさっきの質問を繰り返していた。

ヤドラと呼ばれた青年はうしろを振り返った。漆喰塗りの古ぼけた建物にひどくけばけらしいネオンサイン。ところどころが消灯しているそれは英語で”Love & Eros”と読めた。

「えっと、なにが？」

「どういふつもりでこんなところに入ったかってこと」

「えへん」ヤドラは咳払いをして、「ちよつと食事と商談を」

「ここで？」彼女は薄緑色のワンピースの腰に手を当てた。

「うん」

彼女のワンピース、ずいぶん古いデザインだけど……きっと彼女の母親のお下がりでだろうけど……意外と似合っているな。彼は妙なところに感心していた。

「この町一番のいかわしい店で？」

「『いかわしい』なんて……州都にある西側資本のやつに比べたら、こんなのかわいいくらいだぜ。ソフィア」

「あんた行ったことあるの？州都のそんな店に」

「……いや、ないけど」実のところ、彼が州都に行ったのは3年も前のことだった。彼を取り巻く世界がまだ平和で、輝きに満ちて

いたところで、そのときの彼はまだ少年と呼んでもいい年齢だった。

「だったら黙ってなさい」ぴしやりとソフィアは言った。「だいたいね。あんたムスリムなんですよ。イスラム教徒がお酒飲んでいなんて、コーランのどこに書いてあるのよ！」

「お、俺は飲んでないぞ」

「嘘おつしやい」ソフィアは一步ヤドラに近づいて、くんくんと臭いをかいだ。

「……酒臭い」

「そ、そ、それは気のせいだ。きつと商談相手の飲んだやつの臭いが……。おい、この女、営業妨害してるぞ。なんとかしたらどうなんだ」

せつば詰まったヤドラはそのクラブの入り口に突っ立っている用心棒に叫ぶ。しかし白ロシア系の巨人は苦笑したままそっぽを向いた。

「だいたいね」ソフィアの口調を彼はまねる。「異教徒の君にそんなこと言われたくないよ」

ソフィアはぷつと頬を膨らませた。その表情はゆるく後ろに編んだ黒髪とあいまって彼女を少女のようにみせた。

「その異教徒に戒律守れて言われてるんじゃないわよ。知らないよ。原理主義者に捕まっても」

「大丈夫。あいつらはこんな所までやってこない」

「見つからなければいいってもんじゃないでしょ。この不信心もの」

胸を張るヤドラにソフィアはため息をついた。そこで彼女は用事を思い出す。

「で、あたしに用ってなに？探してたんでしょ？」

「そうそう。そうだった」ぱつと表情を切り替えてヤドラはショルダーバックを探り、青い封筒を取り出した。

「ほら。これ。《旧政府》の支配地にあるトボルって村の近くに行ったときに預かったんだ」

「あんな所まで行ってるの？《旧政府》とムスリム勢力って交戦状態でしょ。いくら運び屋が商売だからって……危ないわよ」

つぶやきながら宛先を見る。ソフィアに笑顔が浮かんだ。

「カラチチ叔母さんだわ！」

「誰？それ」

「ほんとのこと言うと、叔母さんじゃなくって母の従姉妹。女医さんの。ドイツの連邦病院を退職したって聞いてたけど、赤十字の仮設病院で医療ボランティアをやってたんだ。ね、どんな感じだった？」

元気そうだったよ。忙しそうだったけど。ヤドラは慎重に言葉を選んで答えた。決して医薬品が絶望的に不足しているとか、《旧政府》の分遣隊が敗残兵狩りと称して村の中を我が物顔に蹂躪しているとかは言わなかった。

「ね、家においでよ。カラチチ叔母さんのことをみんなにも教えてあげて」

「え、えっと」

「大丈夫よ」躊躇するヤドラに少し声を低くして彼女は言った。

「ここはまだムスリムに友好的よ。《自由キリスト十字軍》の徴募に応じる人だってほとんどいないし。叔母さんだってあなたを歓迎するわ」

「うん。でも」

「行つてやれよ」不意に野太い声が響いた。さっきの用心棒だった。

「せっかく招待されてるんだ。野暮なことはするんじゃない。それに……」男は不器用に唇をゆがめた。笑顔のつもりだった。

「ここにいられちゃ商売の邪魔だ」

食卓はソフィアの叔母の独壇場となった。だが、ひとの良さそうな笑みを浮かべしゃべり続ける彼女にヤドラは親近感を抱く。ジャ

ガイモのスープも悪くなかった。豚は一切れも入っていないかった。感謝の祈りのあと、彼が一口それを飲んでからうなずくと食堂にはほっとした雰囲気 flowed 流れた。

「車はどこに止めてあるんだ」ソフィアの叔母が話し続けている間、じつと黙ってパンを小さくちぎっては口に入れていたソフィアの叔父がたずねた。

「トラックですか。森の中に隠してあります」ソフィアの叔母と彼の3人の息子たち、そしてソフィアは真剣な表情でそのやりとりを聞いていた。

「兵隊に襲われたりしないのか」どの陣営の、とは彼は言わなかった。テリトリーを出た旅人にとっては、三つ巴で勢力争いを続けているどの陣営の兵士も恐怖の対象となるのだった。もちろん、自陣営の兵士に撃たれないようにマークをつけてもいいのだが、それではほかの二つに対して的を提供しているようなものであった。

「ありますよ」ヤドラの口調は落ち着いていた。「だけど、武器を運んでいなければ命までは取られません。荷物を置いて逃げたらパトロールのやつらは追ってきませんから。ただし、狙撃兵は別です。彼らは見境なしに撃ってきます」

「そうか。大変だな」

「それはもう。積み荷を残して逃げたら大損害ですからね。保険は効かないし」

叔父は笑い出した。彼の冗談が気に入ったらしい。

「ここは比較的平和になった。国連軍が入ってきたから」旧政府も、ムスリム勢力も……」叔父は一瞬だまり、ヤドラが静かにスーパを口に運んでいるのを見て言葉を続けた。「町の周囲に狙撃兵を配置するのをやめたからな」

「アメリカ軍は出ていったりしないのかしら。そうしたら……また」叔母が口を挟む。

「国連軍は出て行かんよ。ここには西側の資本の入ったプラチナ鉱山があるんだから。鉱脈が尽きるまではなんとかなるだろう」

「でも、プラチナが出なくなったら……」心配そうな叔母にナプキンで最年少の従兄弟の口を拭っていたソフィアは微笑んでみせる。「大丈夫よ。ここの埋蔵量は世界で5番目だそうよ。それに内戦だつていつまでも続かないわ」

「そうね……そうよねえ。昔はみんな隣近所でうまくやっていたんだから……」

ソフィアはうなずいた。

「そうよ。いつまでも続くわけじゃない。こんなことが」その様子をヤドラは黙って見つめていた。

「おいしかった。ありがとう」

扉の前でヤドラはソフィアに礼を言った。

「叔母さんに直接言つてよ。あたしが作つたんじゃないのよ」彼は肩をすくめた。

「今度はなにか持つてくるよ」

「気にしないで。こっちには品物はあるから」

「ムスリム勢力は国際的な悪役になっちゃったからな」ヤドラは苦笑した。「必要最低限の物資しか搬入を許されない。それも妨害で滞りがちだ」

「また食べ物を積んで帰るの？」

「うん、深夜に物資を受け取つてそのまま支配地域へ飛び込むんだ。日の出直前は境界線の警戒も薄いからね」

「……もし、持つて帰れなければどうなるの？」

「購入費がそっくりドライバーの負債になる。物資を調達する国外の連中は……簡単に言うとかギャングだから……結構リスクの大きい商売なんだよ」

そんな。彼女は息をのんだ。あんだ、ギャングの資金稼ぎの手伝いをやってるようなものじゃないの。

「その通りかもしれない。だけどムスリムの支配地域が経済封鎖されて以来、あっちは慢性的に食糧不足だね。ギャングが関わって

いようが、異教徒の手を借りようがとにかくなんでもやらなくちゃ」

「こんな間違ってるわ」

「みんな分かってる……はずだよ。だけど今は……」

「そうね」ソフィアはヤドラの腕に軽く右手を触れた。

「気をつけなさい。慎重にやるのよ」

「うん」

彼女は青年を見つめながら右手に力を加えた。

「あんたにご加護がありますように」

どの神の加護なのか彼女はあえて口にしなかった。

一体こんな状況のまま何日待機しなければならぬのだろう。トリスアギオン韓国支部のキムはいらいらと仮設指揮所の中を歩き回っていた。

この中近東とヨーロッパ、そしてスラブの文化の会合点で、キリスト教系武装組織とムスリム勢力、さらに旧政府の共産主義者たち、連中は三つ巴で勢力争いを、いや、足の引っ張り合いをやっている。このずいぶんおどろおどろしい吸血鬼伝説のある国で、奴等は本当にお互いの生き血をすり合っているのだ。

キムは幼いころ吸血鬼は日本に住んでいると信じていたことを思い出して内心苦笑した。いくら祖父がやつらを憎んでいて、彼が孫に語って聞かせた昔話に創作部分が多いとはいえ、いくら何でもあれはむちゃくちゃだった。

そう言えば隣国の軍事独裁政権への恐怖だけが彼らの結束力だったということも馬鹿な話だ。隣国が脅威だったころはお互い仲良くしていたくせに、隣がめでたく民主化されたたん、今度は血みどろの内戦を始めてしまったのだ。

先日入院先の日本の病院で焼死した独裁者は、ある意味この国も支配していたのかもしれない。

「キム！」ドアを開けて男がひとり入ってくるなり大声でどなっ

た。「今日もまた境界線破りがあつたらしい。そのあおりで《自由キリスト十字軍》と《ムスリム独立軍》が30分ほど銃撃戦をやつて、《自由キリスト十字軍》が攻撃ヘリを飛ばしたところで国連の……」

そこまで言つて男は手元のルーズリーフに綴じ込まれたFAXを眺めた。

「……国連の《平和執行部隊》がトーネードIIを飛ばしてやめさせたらしい」

「そうか」キムは静かにうなずいた。

「ところで《平和執行部隊》ってなんだ？国連の組織なのか？」さつき部屋へ入ってきた男は黒縁の眼鏡をずり上げてたずねる。

「それはだね。タカハシ」キムはひとつため息をついてから祖父が憎んでいた者の孫へ解説しはじめた。

「この国には国連のお墨付きのある軍事組織が3つある。ひとつはデンバルで展開している《国連保護軍》。みなが国連軍と普通呼ぶのがこれだ。つぎはアメリカ軍を中心とする《緊急対応部隊》、最後が社会主義系旧政府の支配地域に展開する《国連予防展開軍》」ここで区切つてキムはタカハシを眺めた。180センチを越える童顔の日本人はきよとした顔でこつちを見ていた。もう一つため息をつく。

「この《国連予防展開軍》の実働部隊が《平和執行部隊》だ。中核はNATOだな」

「どうしてそんなにややこしいことになっているんです？」

「なんでこんな基本的なことから教えてやらずにちやいかんのだ。」

日本トリスアギオン支部は状況教育をやらないのか？

「それはだな。この内戦の状況があまりにも混沌としていて、国連内部でも利益の調整がなくなつちまつたからだ。本当はインシアチブを取らなきゃいけない《国連保護軍》は司令官が馬鹿者で部隊展開したとたんにすべての陣営を敵に回してしまったし、難民を出されちゃ困るNATOは国境封鎖を続けているかぎり旧政府を

支援するつもりで、アメリカに至っては西側企業が商売できるかぎり状況を放置しておきたいらしい」

キムは口を閉じて自分の言葉がタカハシの頭脳にしみこむまで待った。

「だから、だ。この国じゃまともなPKO（国連平和維持活動）が機能すると思っちゃいけない。ここではNGO（非政府組織）だけが頼りだ。分かったか？」

頼りなさげに日本人はうなずいた。

……まあいいか。キムは納得する。知識がないのは別に罪ではない。

「ところで、予備の《プラエファティオ》は届いたか？」

キムは偵察・監視・救助を主目的とする軽量有人ロボットの状況をたずねた。タカハシはルーズリーフを忙しくめくる。

「昨夜届きました。今朝から充電とモーションデータの移植をやっています。10時過ぎにはテスト運転して、それから防弾パネルを増設します」

「おいおい」キムはうなった。「本部は”ホット”な機体を送ってくれなかったのか？」

「はい。でも即時起動可能な機体を送ってもらっても、この状況に最適化したモーションデータを移すのと防弾パネルの取り付けに手間がかかるのは変わりませんから」

「厄介だな」

「そうですね。けれどやっておかないとひどい目に遭いますよ。なにしろ我々があれを使うとしたら……」

タカハシはファイルに視線を落とす。そこには大口径ライフル弾で無惨に破壊された《プラエファティオ》の写真があった。

「低い姿勢でダッシュしたり、遮蔽物沿いに自動歩行する軍用ロボットに近い動きをさせなきゃいけません。いつものように突っ立ってトコトコ歩いてたら全滅ですよ」

「畜生」キムは首を振った。

この日本人のしゃべることはいちいちもつともなのだが、どうしてこんなに癪に障るのだろうか。

男は疑問に思った。理由は分からないでもない。こいつは常に他人の先回りをするのだ。そのくせ態度はのりくらりとしている。要するに、そりが合わないのだ。彼は結論づけた。

交代要員の準備ができたなら日本人たちには引き上げてもらおう。それが一番問題がない。

ただ、それがいつになるかだが……。

そのとき電話が鳴った。反射的に受話器を取り上げた。

「《緊急対応部隊》のリーマン大佐だ」相手は米軍の指揮官だった。年の頃は40過ぎ。有能だが本国からフォードの4WD車、それもチューンナップしたものを持ち込むほどのスピード狂。

キムは即座にそこまで思い出した。

相手はきびきびとした口調で会話を続けている。「《旧政府》の中にある難民キャンプで問題が発生しているらしい」

「どこですか？」

「サイトC-2」

そこは正確には難民キャンプではなかった。

国連の「各勢力の分離・支配地域の分割決議」に従わなかったキリスト教系住民が居続けている村だった。《旧政府》はそこを封鎖し、人も物資もなにひとつ流入しないようにしていたのだ。強制的に追い立てるわけにはいかなかったので住人たちが耐えきれなくなつて出て行くようにし向けているのだ。どちらにせよ厄介な場所であることに変わりはない。

「状況は？」

「伝染病だ。対応を協議したい」

「……すぐうかがいます」キムが答えた。声がかすれていた。キムは受話器を下ろすと、怪訝そうに突っ立っているタカハシをどやしつける。

なぜか腹が立って仕方がなかった。

いつものように”Love & amp; Eros”にヤドラは入っていく。

やばかったけどうまくいった。この調子で行けばあと5回ほどで国外へ出るだけの資金がたまるだろう。問題は難民認定してくれるかだ。

カウンターにもたれて物思いに耽っているヤドラにバーテンはなにも言わずにメモを渡した。ちらりとそれを見る。彼が輸送を請け負っているブローカーからのものではなかった。それはソフィアからのものだった。

「カラチチ叔母さんから手紙があつたの」ソフィアはヤドラの顔を見るなりうつむいて話しはじめた。ソフィアの家にはその叔母夫婦、それから見たこともない男たちが数人テーブルについていた。

「難民キャンプで発疹チフスが大発生しているらしいわ。病院に収容しきれないくらいの患者が出てるって」

「それって……どんな病気なの？」

「高熱と頭痛、それに発疹が……紅いつぶつぶが全身に出て、体力がなければ死ぬわ。シラミを媒介にして伝染するの。不衛生なところでは大発生する病気ね」

「治るんだろ？」

「もちろんよ。抗生物質さえあればよほど体力を消耗していないかぎりだね」

「で、どうして俺がいるんだ？」一通りの説明を受けたヤドラはソフィアにたずねる。

「抗生物質はあるんだ。ただ、輸送手段がない」彼の知らない男が静かな口調で説明する。

「米軍は動かないし、トリスアギオンも途中で引き返してきた」「トリスアギオン？」

「国際救助隊よ」ソフィアが補足した。

「キャンプまで行くには、」男が説明を再開した。「ムスリムの支配地域を抜け、それから《旧政府》の封鎖を抜けなきゃいけない。ところがムスリム勢力とキリスト教勢力の関係が悪化していて素直に通してくれない」

「そのうえ《旧政府》もがっちり封鎖している」とヤドラ。

「そうだ。二重の包囲を抜けなかりキャンプへたどり着けない。トリスアギオンはムスリムの封鎖は抜けたが《旧政府》で攻撃されて撤退した」

室内を沈黙が満ちた。ヤドラは黙って地図を見ていた。

「たしかにまともに行けそうなコースはそれしかないな」

「やってくれるのか？」男の表情に喜色が浮かぶ。

「まだ返事をしたわけではない」ヤドラは肩をすくめた。
しばらくたつてから髭面の男が言った。

「国連和平協議委員会が発行する難民認定のリストに君を載せよう。悪い取引ではないはずだ」

確かに、アメリカを敵に回してしまったムスリム勢力出身者にとつて、それは非常に魅力的な取引だった。ほとんどのムスリムは難民として認定されないまま、国連が決めた境界内へ送り返されていた。

「いいだろう。保証はあるのだろうか」青年は室内の全員を見回した。その表情はソフィアが今まで見たことがないものだった。

髭面が言った。「わたしはここを支配している勢力の地区委員長だ。嘘は言わない」

ヤドラはうなずいた。そして次の瞬間には地図に没頭していた。

「もう一つコースがあるにあるな」かなりの時間をかけて地図を眺めていたヤドラが不意につぶやいた。男たちが地図に群がった。

「いや、だめだ」彼は首を振った。「『鉄血街道』が含まれていない」

鉄血街道。誰かがつぶやいた。できるわけがない。あんな所を通れるはずがないじゃないか。

「俺もそう思う。あそこは3つの勢力が道沿いに狙撃兵を配置している。たしかに目的地まで一直線だが、装甲車でも抜けるのはむずかしいだろう」

500馬力越のラリー競技車でもあれば話は別だが、そんなものが手に入るわけがない。ヤドラは鉛筆でコースをなぞって結論した。「となると最初のコースだが、ともに検問を抜けるのは無理だろう。途中でコースを変えて抜け道からはいるしかないな。誰か詳しい人間はいるかい？」

「テレビッチならどうか？」

しばらく考えたあと老人がぼつりと提案する。みな顔がぼつと明るくなり、一斉に同意のつぶやきを漏らす。

「どんな人？テレビッチって」小声でソフィアに確かめるヤドラに答えたのはさっきの老人だった。

「ラリーストだ。ラリーストって言葉、知つとるだろ？」

「ラリーストって言葉は知ってる。だけど、テレビッチっていうラリーストは知らないぜ」

「……まあ、たしかに有名じゃなかったからな」誰かがぼやいた。

「……この国で国際ラリーがあるときだけ雇われてたらしいし」

「一度レース中に誤誘導して車ごと崖から転げ落ちたらしいぞ」男たちは沈黙した。

「と、とにかく、道に詳しくれば何でもいいですよ。運転するのは俺だから」取りなすようにヤドラは言った。

「とにかく、彼を呼んでください」

また男たちは明るくなった。

「武器はあるかね」男たちの誰かがたずねた。

「冗談じゃない。戦争するわけじゃない。ただそつと入って荷物を渡す。それだけだ」

「結構」老人が笑う。

「で、車は？」

「それは任せておいてくれ」男のひとりがヤドラに保証した。

「ごめんなさい」食堂にひとり残って地図を眺めているヤドラにソフィアはそつと言った。

「気にするな」

「報酬で釣るようなまねをしたのに？」

「タダでやるよりはずっといいじゃないか」

くすりとソフィアは笑う。だがすぐその表情は真剣なものになった。

「でも、あんたはムスリムなのよ。それがキリスト教徒を救うなんて……」

「俺は別におかしなことはないが」

「……そう……だよ。それが普通だよ」ソフィアの声はわずかに震えていた。

「昔は、みんなおなじ町に住んでいたんだよね。学校だっておんなじだったし。お互いの家に遊びに行ったりもしたっけ」

「大人たちも仲がよかった。異教徒のお祭りを見物することもあった」ヤドラが言い足した。

「それなのに、こんなになるなんて……」彼女がため息をつく。

ヤドラは地図から彼女へ視線を移した。しばらく考える。どう答えたらいいか分からなかった。

「とにかく、お前が不景気な顔してるのが我慢できなかっただけだ」そう言うなりヤドラは地図の上に顔を伏せた。赤くなっているのを彼女に見られなくなかった。

「……ありがとう」彼女はそつと扉を閉めた。

「そう腹を立てないでほしいな。キム隊長」お気に入りのフォード・エクスプローラーを猛烈な速度で運転しながら《緊急対応部隊

『のリーマン大佐は助手席のキムをなだめている。

「われわれの行動には制約が多い。それは厳正な事実だ。だが、それには正当な理由があるのだ」

「分かっていますよ。大佐。貴殿の議会は紛争に巻き込まれることを恐れているんです。最新鋭の機甲騎兵連隊が最初の1ヶ月で定数の一割を失ってはね。深入りを恐れるのは当然です」

キムの指摘は当てこすりでもなんでもない。戦闘ヘリと重戦車、軽装甲車両、さらに戦闘用ロボットと歩兵で編成された2000余、一個連隊の機甲騎兵たちは米人保護のためにいくつかの都市を制圧・確保した。だがそれは都市部を押さえていたムスリム勢力の大反発を招き、本格戦闘まで発展した。

結果は誰も予想しないものとなった。戦闘ロボット部隊が途方もない損害をだしたのだ。

戦闘ロボットは確かに都市部ではほぼ無敵だった。その運動性能と大火力で戦車ですら圧倒できた。だが、国土の大部分を占める高原や山岳では、平均的な移動速度は装甲車両に劣り、歩兵よりもはるかに発見されやすく、装甲はコクピット周りしか期待できないロボットは標的にされた。

20ミリの機関砲弾を4000メートル以上の射程距離から送り出す対装甲ライフルを装備した歩兵にロボットたちは次々と破壊されたのだ。最初の2週間で戦闘ロボット部隊は定数の4割を喪い、作戦不能に陥った。

同時にそれは連隊そのものの作戦行動の停止を意味した。

合衆国陸軍機甲騎兵連隊はキリスト教徒支配地域まで後退し、指揮官は更迭された。リーマンはその後任であった。

「とは言え、」キムは続けた。「トリスアギオンは困っている人間を救うためにあるのです。ところが実際は……」彼は助手席で大きく手を広げた。リーマンはそれをさっとかわす。

「銃を突きつけられてすこすこと引き上げています。やりきれませんね」

「では、武装して突破するかね？」

「まさか。そんなことをしたら貴官の前任者の二の舞ですよ。突破はできても報復を必ず招きます」

「確かにやりきれん話だ」リーマンがつぶやいた。

「しかし、どうして《旧政府》は医薬品の搬入すら拒むのだろう。いまやこれは人道問題に発展しているというのに」

それはだな、若い。キムの言葉にリーマンは声に出さずにつぶやいた。《旧政府》はいわゆる「最終的解決」を目指しているからだ。たとえ発疹チフスでもまともな医薬品がなければ死に至る。ただ包囲しているだけで彼らはキリスト教徒を追い出せるわけだ。

もつともそんな状況に陥ったら西側は黙っていないのだが、《旧政府》は何かもくろみでもあるのだろうか？

やがて機甲騎兵の駐屯地のはずれに位置しているトリスアギオンの司令所にエクスプローラーはたどり着く。

礼を言つてオフロード車を降り立ったキムはタカハシが血相を変えて走ってくることに気がついた。

「やられました」息を荒くしたまま彼は報告した。

「何者かが基地内へ進入してトラックを一台乗り逃げしました」キムとリーマンは顔を見合わせる。

「そのトラックには何が載せてあった？」キムがたずねた。

「抗生物質とワクチンです。発疹チフスの」

「キリスト教徒だ」二人は叫ぶ。

「まずい。やつらなら封鎖を強行突破しかねないですよ」キムがリーマンに怒鳴るよりも早く大佐は後部座席の通信機を取り上げていた。

「司令部。私だ。《国連保護軍》の事務総長を呼びだしてくれ。武装集団同士が衝突する可能性がある。大至急だ。それからヘリの飛行許可を出してくれ。ああ、戦闘目的じゃない。連絡が目的だ」通信が終わるとリーマンはキムへ振り返った。彼の褐色の顔は青黒く変色していた。

「われわれは衝突を避けるために後退したのだぞ！それなのに、なんたるざまだ」

「後を追いましょう」タカハシがキムに提案した。

「ヘリが飛べるのなら追いつけますよ」

「分かつてる」キムは怒鳴った。「とつとと準備しろ！」タカハシは吹っ飛ばされるように走っていった。

自分のドジで盗まれておいて……一体どういつもりだ。キムはほとんど理不尽な怒りをタカハシに感じていた。

ほんのわずかなコントラストと、路上に倒れ込む影だけが頼りだった。ほんのわずかな光しか通さないようにテーピングされたヘッドライトから得られる光量は暗闇よりもわずかにまし、といったものだった。

「ずいぶん暗いね。大丈夫かい？」

助手席のトリビッチがひどくのんびりした口調でたずねた。

「ええ、見えてます。それよりも、コースは大丈夫ですね？」ヤドラは歯を食いしばって答えた。迂闊に口を動かすと振動で舌を噛みそうだった。

「あんたがワシの指示通りに運転しているのなら問題ないね」彼は一瞬だけペンライトで膝上のボードを照らした。

「今の速度は？」

「時速70キロ」トリスアギオンと書かれたトラックは未舗装道路を気違いじみた速度で飛ばしていた。

「じゃ、あと3分で右手に折れてくれ」

「了解。ねえ、トリビッチさん」

「『さん』はいらんよ。何だね？」

「ラリーストだったって本当？」

「ああ、一応ね。ナビゲーターだけど」

「すごい！誰のナビゲーターをやったの？」

「ドイツや日本のワークスをやったな」

「すごい、メルクリンガーやツカハラのナビを？」

トリビッチはにやりと笑った。

「それが違うんだな。ワークスってのは本戦の前にコースの詳細な資料を作るんだ。ここのカーブは地図とは違うとか、道路が滑りやすいとか、路面が荒れているとか。俺がやったのはそれだ。本戦前に俺の戦いは終わってるんだ」

なるほど、彼はうなずいた。

「君はどうなんだ。草レーサーかなにかを？」

こんどはヤドラがにやりと笑う番だった。

「『デンバル・イアンソナリー』って知ってますよね。この国唯一の国際公認。その最速SSで、練習中のワークスレーサーをカモってたんです」

トリビッチは笑い声を上げた。

「いるいる。プロレーサーに必ずからむ地元の若いやつって。中途半端なプロはやられちまうんだ。それがお前か」

「そうです。速かったんですよ」

「そうか」男はまだ笑っていた。「ところでその最速SSってどこだったわけ？」

ヤドラは唇を少しゆがめた。

「今、『鉄血街道』と呼ばれているところです」

トリビッチは沈黙する。

数分後、不意にヤドラは速度を落とした。急ブレーキを踏む。トリビッチはかすかな悲鳴を上げた。

そのままエンジンを切ってヤドラは窓から首を突き出した。

「どうした？」

「静かに」ヤドラは耳を澄ませつつけた。10秒後、彼はエンジンをかけるとトラックを林に乗り込ませた。シートを広げて運転台を隠す。

それから1分ほど過ぎた。今度はトリビッチにも分かった。デイ

「ゼルエンジンとキャタピラの音が響いてきたのだ。
さらに1分後。

ヘッドライトから光の束を投げかけながら2両の戦車と3両の兵員輸送車はスピードを緩めずに林に身を潜める二人の前を走り去った。

「T-72とBTR。両方ともロシア製です」走り去っていく車両を見ながら彼が説明した。

「使ってるのはムスリム勢力？」

「そうです。たぶん定期巡回の連中ですね」

トリビッチはため息をつく。ヤドラが笑った。

それから1時間はなにも起きなかった。ただ、緊張した時間が経過しただけだった。

「もうそろそろ脇道へはいるぞ」トリビッチが地図と磁石、さらに時計を見ながら言った。

「いいですよ。ただ、ちょっと気になることが」

「なにが？」

「いやね。地雷がないのは幹線道路だけなんですよ。人が通ったことがない道はそれだけ危険ってことです」

「なんだって！」トリビッチが叫んだ。

「ですから、完全な抜け道は避けて誘導してくださいね。誰かが通ったことのある道を選んだ方がいいですよ」

ヤドラは横目でトリビッチをうかがった。夜目にも分かるほど青ざめていた。慌てる青年。

「あつ、でも、もしこのあたりに地雷があるとすればそれは大砲でばらまく対人地雷です。トラックが触れても車輪が吹き飛ぶくらい威力しかありません。あまり心配する必要はない……かも」

「ウソだ！それでも一大事じゃないか。ここは……俺が住んでいたところとはまるで別世界じゃないか」

ヤドラは吹き出した。そして悲しくなった。

そう、ここは別世界になってしまった。たった10年弱で。

どうしてこんなことになってしまったのだろう？誰が悪いのだろう？

青年は二、三度首を振ってその考えを追い払った。

今はそれを考えているときではない。

「とにかく」なだめるようにヤドラは言った。「腹をくくりましよう。発見されても振り切りますから安心して」

「そ、そうだな」トリビッチはもう一度地図を確認しはじめた。

「あと山をひとつ越えたら《旧政府》の支配地域に入る」車を降りて地形を確認していたトリビッチが緊張した顔つきで言った。

「よし。あともう少しだ」道路の真ん中で伸びをするヤドラ。

「入ってからが大変なんじゃないのか？」

「大丈夫。どこも入るのは難しいけど、中に入っちゃえば大したことにはなかったし、出るのもっと簡単でしたよ」

「ふむ、そんなものか」トリビッチはトラックに乗り込むとシートに身体を投げ出した。かなり緊張していたようだ。

そんな彼を見ていたヤドラの笑みが次第に消えていった。首を傾げる。

かすかに風を切る音が聞こえていた。それには一定のリズムがあった。

「どうした？また戦車か？」

「いや、ヘリのローターみたいな音が……」

だが、ヘリなら当然聞こえるはずのターボシャフトエンジンの音は聞こえなかった。首を傾げながらヤドラは車に乗ってキーを回した。

突然彼らの視界が白色に染まった。同時にヘリがスロットルを開く轟音が聞こえた。二重反転ローターの回転がいつそう増した。

「《旧政府》の攻撃ヘリだ」叫ぶトリビッチ。

なぜこのホーカムに見つかったのかヤドラには分からなかった。

それよりもここまで接近されていてなぜエンジン音がしなかったのか彼には理解できなかった。

「止まれ！両手を上げて車から降りろ！」

上空の拡声器から声が響いた。二人は顔を見合わせた。

「早くしろ」ヘリの声は全く容赦しない。

「もう少し、あがいてみますよ。いいですね？」

トリビッチはうなずいた。同時にヤドラの手足が舞うように動く。3トン近い車体がくるとターンした。一瞬後、チェーングンが牛の声のような発射音をたてる。木々がなぎ倒された。

だが、トラックは被弾しなかった。15度以上ある斜面を滑り落ちるように下り、林道に入り込んだ。攻撃ヘリは高度を上げてそれを追う。

再びホーカムのサーチライトがトラックを捉えた。車体を左右に振って逃れようとするが、道路幅が狭いのでうまくいかない。ついにロケットが発射された。

外れようがなかった。レーザー誘導式のそれはトラックの前輪をうち砕いた。ひどく緩慢に車体は横転する。

悲鳴を上げるヤドラ。トリビッチが運転台から放り出されるのを視界の端に捉えたのは、彼が意識を失う直前だった。

「発射準備」

「よし」

「IFF（敵味方識別装置）オン」

「反応ネガティブ」

「発射」

前部座席の射手がつぶやくと同時に30ミリ機関砲が曳光弾を吐き出し、500メートル向こうのKa-50・ホーカムの前方をかすめ飛んだ。横転したトラックの確認に気を取られていたロシア製攻撃ヘリは泡を食って上昇する。

「こちらは《国連緊急対応部隊》アメリカ第二機甲騎兵連隊所属機。諸君は飛行禁止空域で作戦行動を行っている。速やかに帰投せよ。帰投しない場合、または敵対行為を取った場合、実力を行使する」

ホーカムを追ってアパッチを滑らかに機動させながら、パイロットは英語と現地語で2度警告を繰り返す。

ホーカムがジグザグに降下する。だが、アパッチの暗視装置は全く惑わされずにそれを追尾した。

「警告射撃。2回目」

「イエッサー」即座にチェーングンが吠えた。今度はローターのすぐそばを曳光弾が尾を引いて流れた。

ホーカムはそのまま飛び去った。アパッチの乗員は小さくため息をついた。

「ローハイド1から牧場主へ」パイロットが司令部に報告する。

「コヨーテは去った。子牛は無事。回収されたし」

トラックから誰かがもがきながら這い出していた。

「どういっつもりだ。お前は戦争を引き起こすところだったんだぞ」キムが怒鳴りつけた青年は黙って椅子に腰掛けていた。額の包帯が痛々しい。

「なにか言ったらどうなんだ！」平手で机をひっぱたく。タカハシは目を丸くしてその様子を見ていた。

青年はたどたどしい英語でしゃべりはじめた。

「自分は、悪いことをしたとは思えない。トラックを盗んだことは悪かった」

「そ、それだけか！」激高するキムをタカハシはなだめようと手を伸ばす。だがそれはキムの怒りを増しただけだった。

「うるさい。さわるな。だいたいお前が間抜けだからこんなことになるんだ」

「キム隊長！」タカハシが初めて大声を出した。

「……言ってみろ」

「我々は彼を責められません。彼は我々のやるべきことを代行しようとしただけです」

「最悪のやり方だな。国連の分割決議を無視しての越境や《旧政府》を刺激したことはどう解釈する？」

「それは我々もやっていることです。違いますか。トリスアギオンは連中のご機嫌を取りに来たのではないのです」

「それに、」タカハシは続けた。「国連の分割決議自身にも問題があります。この国の人間のほとんどは農業で生きているんですよ。分割決議に従って移住するということは、すべての経済基盤を投げ捨てることを意味するのです」

キムは突如として多弁になった同僚を啞然として眺めていた。

基地から出てきたヤドラにソフィアが駆け寄った。腰に手を回す。ヤドラはその手をふりほどいた。そして叫ぶ。

「ちくしょう。ちくしょう」彼は泣いていた。

「あなたはできることをやったのよ。自分を責めないで」

「何もできてないじゃないか。途中で捕まって、トリスアギオンに助けられて、トリビツチさんは重傷で……」

そつとソフィアがヤドラの頭を抱いた。今度は彼も逆らわなかった。

「誰もあなたを責めたりしないわ。もうやめて。もし、あんたに何かがあつたら……お願い。もうやめようよ」

「いやだ」彼は静かに言った。「ドライバーってのは、ゴールについてなんぼの存在なんだ。たどり着けなきゃ意味がないんだ」

濡れた茶色い瞳でソフィアを見つめる。彼女の瞳も涙があふれていた。

「民族とか教義とかを都合よく持ち出して、みんなの絆をスタズタにしちまったあんな連中に負けるのはいやだ。俺がここで諦めた

ら。俺はあいつらに負けてしまっただよ。屈服してしまっただよ」
ソフィアはようやく理解した。

彼はムスリムのために戦っていたのでも、キリスト教徒のために戦っていたのでもなかったのだ。彼は理不尽な理屈を振り回す権力者すべてに戦いを挑んでいたのだった。

「でも、でも」

だからといって、行かせるわけにはいかない。なんのサポートもなしに行かせれば彼は二度と帰ってこれない。もしそんなことになったなら……。

「あの、ちよつといいかな？」

二人は振り返った。

タカハシと呼ばれていたトリスアギオン隊員が不思議な笑みを浮かべながら通訳と一緒に立っていた。

「本当に行くのか」

倉庫前で黙々とトラックの準備を進めているトリスアギオン隊員の中からキムを見つけるとリーマン大佐は大声を上げながら近づいた。

「ああ、一刻の猶予もない」物資の積み込みを監督していたキムも大声で叫んだ。

「また銃を向けられたらどうするんだ。撃ち返すのか？」

「まさか」キムは笑った。

「じゃあどうするんだ。一応警告しておく、私の政府は君たちに損害が出た時点でわれわれを介入させるつもりだ。君たちはスケープゴートだぞ」

「貴官の議会の考えは分かっている。トリスアギオンは生け贄になるつもりはないよ。ちゃんと策はある」

大型トレーラーが倉庫前に入ってきた。ホーンが鳴り響く。「準備完了」誰かが叫ぶ。「では、行って来る」キムはトラックに飛

び乗った。

「成功を」そう怒鳴るとリーマンは敬礼した。

「とてもうまくいくとは思えない」リーマンは副官と言葉を交わしながら基地内を大股に歩いていた。

「しかし、猶予がないのも事実です。急がないとキャンプは壊滅するでしょう」

「だからといって、無謀な行為であることには変わらない」

「その通りです」

「くそっ」不意にリーマンがつぶやいた。驚く副官に大佐は釈明する。

「トリスアギオンのことで頭がいっぱいになっていたらしい。駐車場を間違えたようだ」

確かにその士官用駐車場には大佐お気に入りの深紅のエクスポローラーの姿は見えなかった。

「くそ。トリスアギオンどもめ」もう一言つぶやくと男はもう一つの駐車場めがけて歩き始めた。

分離境界線では、先日と同じやりとりが繰り返されていた。

機関砲を構える戦闘ロボットと装甲車両で道路を封鎖している《旧政府軍》、そこをなんとか通すように交渉するトリスアギオン。

「貴官の行為は人道にもとるものだ。このようなことをしていると国際社会を敵に回すことになるぞ」キムが激しい口調で弾劾するのも先日と同じで、検問所の指揮官がまったく取り合う様子がないのも同じだった。ただ「誰も通すなと命令されている」の一点張りであるところも変わりなかった。

「そうか。貴官はそういうつもりか」キムはうなだれる。だが、その口元が笑みの形になっていることに気がついた《旧政府軍》の兵士はいなかった。

「ゴー」

うつむいていたキムが突然叫ぶ。発煙筒が一斉に投げ出された。みるみるうちに煙が充満しはじめ。同時にトレーラーから獰猛なエンジン音とともに何かが飛び出した。

「扉を閉める」泡を食いながらスイッチを押す《旧政府軍》の軍曹。だが、それが閉まりきる前に深紅のフォード・エクスプローラーが砂利をまき散らしながら駆け抜けた。

「突破された。撃てっ！」ようやく我に返った指揮官が叫ぶ。《プラエファティオ》の軍用モデルである《ベーオウルフ》が慌ててエクスプローラーに向き直ると右手に装着された機関砲を構えようとする。

だが、その腕は途中で止まった。

煙幕の中から不意に現れた《プラエファティオ》がその腕をつかんでいたのだった。

その機体には「TRISAGION」と描かれていた。仰天するパイロット。

すかさず敵を振りほどこうとする《ベーオウルフ》。ところが《プラエファティオ》は巧みな重心移動で踏ん張ると逆に足払いをかけた。

一トンを超える機体が軽々と宙を舞い、そして地面にたたきつけられた。もちろん倒れているのは《ベーオウルフ》だった。

それだけではない。装甲車も煙幕の中から幽鬼さながらに現れたロボットたちに蹂躪されていたのだった。驚くほど低い姿勢と巧みなステップで30ミリ機関砲の掃射をかわすと《プラエファティオ》2機が装甲車にとりつき、それをあつという間に転覆させた。機関砲の砲身が飴のようにひん曲がった。

兵士たちがロボットめがけて銃を乱射していた。パイロットはコクピットを左腕でかばうと、右手を伸ばして狙いをつけた。バスッ。

いささか間の抜けた音がすると同時に数人の兵士が昏倒していた。高圧の消火液の直撃を食らったのだった。

検問所の周辺では素手の巨人たちの奇妙な戦いが展開されていた。

もともとはリーマン大佐の所有物であったはずのエクスプローラ―に乗っていたのはヤドラとトリスアギオン所属の医師、そしてソフィアだった。その4WDには対立する3つの陣営すべてのマークがいささか乱暴なタッチで描かれていた。

4リッターのチューンされたV6エンジンが発揮する300馬力強の排気音と四輪が巻き上げる土煙は1キロ以上離れていてもその存在が分かるほどだった。

ヤドラたちは正面突破を選択したのだ。

敵対する武装勢力がお互いの補給を絶つために狙撃兵を潜ませる恐怖の道、あらゆるところに破壊された車両が転がり、3000人を越える命が失われた死の道、通称「鉄血街道」を駆け抜けることを選んだのだ。

「あと3キロでムスリム勢力の監視ポストよ。もうじき視界にはいるわ」ソフィアがトリビッチが作ったノートを見ながら叫んだ。ヤドラは返事の代わりにギヤを1速落とす。エンジンがさっきより1オクターブ高い叫び声を上げた。

なにか異様な存在が接近しつつあることはムスリムの兵士たちも理解していた。

いつもなら的確に状況を伝えるはずの無線がただ、「侵入者あり」としか言ってこないのだ。

よき過去の思い出についての会話を即座に打ち切り、対装甲ライフルを構えて配置についた狙撃兵たちは不安を感じ始めていた。

彼らを不安に陥れたその音はさらに接近していた。ひどく甲高いその音は戦闘車両のエンジン音とも、攻撃ヘリのローターの音とも異なっていた。

無意識のうちに安全装置を外す。初弾はチャンバーに装填されて

いた。スコープを顔に押しつける。

「来たぞ！」危険を承知で監視塔に上がっていた見張りからの声がレシーバーに届く。

「何が接近しているんだ？」

「まだ分からん。土煙がひどい。数がひとつなのは間違いないが」指揮官は双眼鏡をのぞき込む。揺れる12倍の視野にはまだなにも飛び込んでこない。

「なんだ！あれは！」突然見張りが間の抜けた声を発した。

「どうした」いらだちを押さえきれない口調で指揮官が監視塔を見上げた。

「く、車です」

「なんだと？」

「速いんです！」

次の瞬間スコープをのぞき込んでいた者すべてがそれを視界に捉え、すぐさま失った。だが、誰もが標的が何か理解した。

「……車だ」

「そのうえ速い」

確かにそれは速かった。おそらく時速100キロは越えていた。その速度で攔坐している車両やロボットをかわしつつ走行していたのだった。

それは深紅のエクスプローラーだった。

「何してる！撃て！」我に返った指揮官が叫んだ。

揺れる視界に苦勞しながらターゲットを捉え、狙撃兵たちは射撃を開始した。

どこからともなく飛んでくる銃弾に女医もソフィアも驚いている暇はなかった。振りまわされる体を支えるので精一杯だった。

だいたい、弾丸よりも障害物の方がはるかに危険なように彼女には思えた。カーブへ曲がる、というより横滑りして車が進入するたびに、目前に障害物が迫ってくるのだった。

もう悲鳴も出なかった。左右の感覚はもちろん、上下の感覚も喪失はじめていた。

突然彼女は気がついた。

いまだに一発の弾丸も車をかすめていないことに。

さらにソフィアはもう一つの事実に気がつく。

……こいつ。笑ってる。

ヤドラは運転を楽しんでいた。今にも歌い出しそうなほどだった。

「目標8。ロック」

カチッ。

操縦者の視線を追った《プラエファティオ》の操縦システムは左前方20メートルの物体の輪郭線を抽出、操縦桿のボタンが押されると同時にそれを「目標」と認識した。

システムはそれをメモリー内部の仮想空間上に配置し、自分との相対位置、高度差、今までにメモリーした7つの「目標」との関連性を演算する。

「目標8へ接近」ちらと操縦者は横転している装甲車へ視線をやつてから、自分に背中を向けている戦闘ロボットへ向けて操縦桿を倒し、スロットルを押し込んだ。

システムは操縦桿の倒れる方向とスロットルへの力の掛かり具合、そして直前に操縦者が「静止目標2」に視線をやったことを勘案して最適な経路を計算。同時に各軸のサーボモーターを駆動させた。

《プラエファティオ》は前のめりに倒れるような姿勢のまま装甲車の陰に回り込み、それから《ワールフ》へ接近する。

「よし行け！」タカハシが叫ぶ。ぐい、と操縦桿を押した。

システムはそれを攻撃合図と認識し、いまだにまともな対応をとれない目標の突起部……すなわち腕をマニピレーターでつかむと振り回した。

バランスを失って倒れる戦闘ロボット。

「よし、そろそろ撤退する」キムがどなった。
トリスアギオンの6体のロボットたちは相互に支援しながら再び
煙幕の中へ走りはじめた。

兵士たちにとって、それは悪夢だった。

深紅の車体に三勢力のマークをつけたエクスプローラーは猛烈な
射撃にもかかわらず、巧みなコーナリングで突っ走っているのだ
った。

車との距離が近づくにつれて、射撃はいっそう困難になった。高
倍率のスコープが仇になつてまともに照準できないのだ。

「アッラーよ！」射手の誰かがあえいだ。「あれは悪魔だ」

「いや違う」誰かが言った。「あれはラリー車だ。俺は以前に見
たことがある。連中は化け物みたいに速かった」

「どつちにせよ。半端じゃねえよ」

「やかましい。撃つんだ。とにかく撃つんだ」指揮官の声は悲鳴
に近かった。

さらに数十発の二〇ミリ機関砲弾が発射された。

車はスピードを落とさなかった。むしろ速度は上がっていた。

突然彼らの目の前を砂塵が吹き抜けた。甲高いエンジン音がドッ
プラー効果で間延びする。

エクスプローラーが彼らの目の前を通り抜けたのだ。

全くの無傷で。

指揮官の手から双眼鏡が滑り落ちた。

狙撃兵のひとり銃を膝の上に置いたままで呆けていた。あるも
のは馬鹿笑いをしていた。

そして何人かは「ゴー！ゴー！ゴー！」と叫び続けていた。
涙を流していた。

なぜ泣いているのかは彼らにも分からなかった。

だが、少なくとも砂塵のせいではないことは確かだった。

「キム、まずいことになった。増援が来たようだ」タカハシのせつぱ詰まった声がレシーバーから聞こえてきた。

「ああ」キムもそれを見つけていた。太陽を横切って現れた大型の輸送ヘリには2機の重武装ロボット……トリスアギオンが使用する重作業用ロボット《アニウス・デイ》の軍用バージョンがぶら下がっていたのだった。

地上3メートルまで降下したヘリは爆破ボルトでロックを解除し、重武装ロボット《ガーゴイル》は地上へ降り立った。

「煙幕を張れ。なんとかして振り切るぞ。タカハシ。牽制してくれ」

「了解」

しかし、2機のロボットはさっきのものとはまるで異なる滑らかな動きでタカハシの《プラエファティオ》の進路をふさぎ、機関砲を発射した。

《プラエファティオ》の装甲板に大人の拳ほどの穴があいた。がつくりと軽ロボットは膝を折る。

あちこちで悲鳴が聞こえはじめていた。

それがトリスアギオン隊員たちのものであることを、一瞬麻痺状態に陥ったキムの頭脳はなかなか理解できないでいた。

頭上を何かが通り過ぎたことをヤドラは知った。とっさにブレーキを踏む。車は横滑りして止まった。

20メートルほど離れたところに《プラエファティオ》に似たロボットが降ってきた。《ワーウルフ》だった。ただし、ヤドラたちは単にそれを《獵犬》と呼んでいた。

空挺作戦用にカスタマイズされたそれは輸送ヘリによって運ばれ、降下してきたのだった。

反射的にヤドラはシフトをリバースに入れた。後ろも見ずにアクセルを踏む。

目の前に土埃が巻き起こった。腰に装着されたM - 61Aミニガンが休みなく吠えていた。ソフィアが悲鳴を上げた。

ヤドラはバツクのまま森へ走り込む。

銃弾はしつこく彼らを追っていた。

「両手を頭の後ろに組んで膝をつけ」その声と同時に軍靴が背中を蹴飛ばした。

キムはうなり声を上げて膝をついた。

「さんざんこけにしてくれたな」不気味なほど静かな口調で、《旧政府軍》の封鎖指揮官がキムの前に立って言った。ホルスターから銃を抜く。

「お前たちはなにも分かっていない」銃をぶらぶらと降りながら男は言った。「いかなるものでも我々に干渉する権利などないことを。国土を不当に占拠する犯罪者を処理するのは文明国家の義務なのだ」

「正気の沙汰ではない」キムは吐き捨てた。

「我々は人道をかたつて我が国を支配しようとする帝国主義者に教訓を与えねばならない」男は拳銃の安全装置を外した。

「馬鹿なまねはよせ。そんなことをして国際社会が黙って……ぐっ」タカハシの警告は軍靴で蹴飛ばされて中断された。

キムの後頭部に銃口が押しつけられた。

自衛すべきだったかもしれない。キムは考える。武器があれば勝てた。こんな連中を制圧するのは簡単だったろう。

そうすれば少なくとも16人の集団処刑というようなことは起こらなかったはずだ。

いや、だめだ。なにも変わらない。この16人は助かつても別のトリスアギオン隊員が報復を受けて命を落とすだけだ。

「我々も多くの同胞を失っている。これ以上同胞を死なせないためには、他国の干渉を防がねばならない。これは我々の義務なのだ」

キムは男を仰ぎ見た。彼の瞳は真剣そのものだった。自分が正しいと信じていた。

……なんと幸せな人間だろう。彼の住んでいる世界はおそらく私の住んでいるそれよりもはるかに単純にできているに違いない。彼はため息をついた。

男が人差し指に力を加える気配がした。

キムは目をつぶった。

銃弾はまだヤドラを追ってきていた。エクスプローラーがまだ走ることができるのは奇跡といってよかった。銃弾は車体のあちこちに命中していたが、走行駆動系には達していなかった。

「あいつ、弾切れしないのかしら」とソフィア。

「無駄ね。3000発以上も持つてるはずよ」女医が静かに指摘した。

「打つ手がないな」そうばやいているあいだにも、車のすぐ近くに土煙が上がった。

「すまないけど、ここで降りてくれ。合図をしたら飛び降りてくれ」ヤドラが叫んだ。何かを決意した表情だった。

「いや」即座にソフィアが答えた。

「あたしもいやよ」と女医。「女性をドライブに誘っておいて、途中で降りろ」はないでしょ？」

「勝手にしろ」

ヤドラは突然ブレーキを踏み込んだ。ぐるとエクスプローラーはスピンして、ロボットと真正面から向かい合う格好で静止する。

両者の距離は300メートルほど。

「そろそろ決着をつけようか」

クラッチをつなぐにヤドラはエンジンを空吹かしした。獣の雄叫びのようなエンジン音が車内を満たす。

ロボットもそれに応ずるかのように歩行を止めて身構えた。

……決闘だわ。まるで。ソフィアは両手を握りしめた。

「大尉」

今にも東洋人の頭を撃ち抜こうとしていた《旧政府軍》の大尉は、部下の声に振り返らざるを得なかった。その声には尋常でない響きがあった。

振り返る。部下は大尉の身体を指さしていた。目を見開いていた。部下の視線を追って自分の身体に目をやった。

なにも変化はなかった。ただ、小さな赤い光点がひとつ、ゆっくりと動いているだけだった。

いや、それはひとつではなくなった。

二つ、三つ、四つ。それは次々と増え始めた。

さらにそれは、自分の身体だけを這い回っているのではなかった。すべての部下の身体のどこかにその輝きは存在した。

赤い点。輝き、スポット……。

彼はそれが何かを理解した。だが、なぜこんなことになったか分からなかった。

急に木々が揺れた。突然ローター音が聞こえた。兵員輸送ヘリがふわりと舞い上がり、その姿を現したのだ。

「サイレンサー」だ。もっと早く気がつくべきだった。警戒しておくべきだった。大尉はほぞを噛む。しかし、すべてが手遅れだった。

超伝導バッテリーと可変ピッチローターの組み合わせにより、最新の新のヘリコプターは限られた時間内ならほぼ無音で飛行することが可能なのだ。我々もそのように改造された《ホーカム》を持っているのに。

兵員ハッチが全開にされた3機の《ペイブロー》にはライフルを構えた兵士が鈴なりになっていた。

そのライフルにはレーザー照準機がマウントされていた。

照準機から放たれたビームは《旧政府軍》兵士たちに死の光点を

投げかけていた。彼らは死刑宣告を受けたも同然だった。

「《旧政府軍》の諸君に告ぐ」スピーカーががなりはじめた。キムはその声に聞き覚えがあった。

「ただちに戦闘行為を停止し、非武装地帯まで後退せよ」

数分後、キムとタカハシの前に現れたリーマンは赤黒い顔で二人をにらみつけた。

「武力でしか物事を解決できないと考えている人間には、結局武力がものを言うのだ」

「あんたは正しいボタンを押したようだ」タカハシがまだ青ざめたまま言った。

「お前たちが追いつめたのだ。武器を前にしてもまったくひるまないような人間は、あの男を恐怖させるには十分なのだ」

「誉めてもらったと思っていいいのかな？」とキム。

リーマンの顔がさらに赤黒くなった。タカハシがキムをつついた。大佐は深く深呼吸し、そして吠える。

「やかましい。お前たち、俺のエクスプローラーをどこへやった！」と。

「いくぞ」ヤドラが低い声でつぶやいた。

爆発的に加速するエクスプローラー。ロボットはまだ銃を発射しなかった。

あと200メートル。《ワーウルフ》の腰のバルカン砲が回転しはじめる。きらきらと光る銃身が非現実的なまでに美しかった。

あと150メートル、そして100メートル。

ヤドラの手がサイドブレーキに伸びた。ハンドルを軽く切る。

銃声より先に、路面が沸騰した。機関砲弾でズタズタにされたのだった。

しかし、標的となるはずの車はそこにはいなかった。わずかな姿勢の変化は、スピードに乗ったエクスプローラーを思いも寄らぬほ

ど俊敏に路上を駆けめぐらせたのだ。

スピンしたオフロード車は森の中へ走り込もうとする。とっさにそれを追う戦闘ロボット。

だが、逃げようとしていたはずの車が、一瞬のうちにまたターンしてこっちへ向かってきていることにロボットのパイロットも、自律制御システムも理解できなかった。

パイロットが叫び声を上げたとき、彼我の距離は15メートルもなかった。

2トン弱の車体がロボットにのしかかる。
もう一度パイロットは絶叫した。

「ずいぶんひどいわねえ」

ヤドラの顔を見るなりソフィアは言った。

「そんなにひどいかい？」

「うん。キムとタカハシを合わせたよりすごいわ。少なくともあの二人、青あざは1コしかなかったわよ」

「まあ、しかたないさ」ももごとくヤドラはつぶやいた。口を開けるたびに顔中に痛みが走るのだった。リーマンのパンチはそれほどまでに強烈だった。

「輸送はうまくいったんだ。それを考えれば安いものさ」

「そうね。『街道』の封鎖も解かれるらしいし。それを考えれば5万ドルの車の1台や2台……」ソフィアは濡れタオルを青年の頬に当てた。

「痛い痛い」顔をしかめて逃げようとする相手に彼女はむつとする。

「なによ。手当してあげてるのに」

「とにかく、触れると痛いんだ。ほつといてくれ」

「どこが痛いよ」

「とにかく、顔中が。特に痛いのが、頬とか、唇とかで……」

「ふうん。そうなの」

ひよいとソフィアが伸び上がった。

「わあ。ちよっ……」 青年の言葉は途中でとぎれる。

「唇……まだ痛む？」

20秒ほどたってからソフィアはたずねた。少し呼吸が荒かった。

青年は苦勞しながら微笑んだ。

「……我慢できそうだ。でもね」

「なによ？」

「まだ……頬が痛むんだけど」

【END】

Mission 02:「鉄血街道」(後書き)

これのモチーフとなったコソボ紛争は、一応の終結をみました。

しかし、戦後明らかになった事実は単純な善悪を越え、人がどこまで残酷で、そして無力なもののかを知らしめるものでした。だから作者は抵抗します。

フィクションの中で、ハッピーエンドなお話の中で。

それは自己満足なのでしょうか？

Mission03:「孤独」(前書き)

「許容できる犠牲」というテーマを扱ってみたくて書いてみました。

Mission03:「孤独」

Mission03:「孤独」

悲鳴は聞こえなかった。

ただ、圧倒的な熱量が通り過ぎたことは靴底越しに感じられた。警告はそのあとにやってきた。

「プラズマ漏洩。第3デッキ、第4デッキ及び機関部を閉鎖。各部で火災発生。自動消火装置作動中……鎮火。消火装置停止」

けたたましい英語の合成音声と同時に、ディスプレイにはキリル文字が猛烈にスクロールする。レイチエルはリセットボタンを殴りつけて警報を止めた。ボタンの表記は日本語だった。

ガイガーカウンターが不気味な音を立てて鳴っている。

落ち着きなさい。落ち着いて。まだ、自然放射線の20倍程度しかないわ。

呼吸が荒くなるのを精神力でなんとか押さえ込んだ。

そのとき、ようやく通信機がなり立てていることに彼女は気づく。ふるえる手でマイクをつかみ、数秒の躊躇のあと母船へ報告する。

「こちらレイチエル。重大事故発生。機関のプラズマ維持系に損傷発生。機関室からプラズマが放出……」

忙しくスイッチをいじって監視モニターを切り替える。20画面に分割されたモニター映像はほとんど息絶えていたが、奇跡的にまだひとつがノイズだらけの映像を表示していた。

彼女はそれを拡大し、息をのむ。

緊急閉鎖された隔壁内にはもと人間だったものがころがっていた。腕をまっすぐ目の前に伸ばし、高熱にあぶられて皮膚がピンクにめくり上がったどれも似たような姿で、ここそこに死体は転がってい

た。400度を越える熱風にさらされたのだ。おそらく苦しむ暇もなかっただろう。

「……閉鎖隔壁内に生存者はいません。繰り返します。生存者はブリッジ内の私、そして」

彼女は周囲を見渡した。床には男たちが呆けたように座り込んでいた。

「クルーが6名だけです」

「指揮官と、オペレーション・マネージャーは？」

母艦からその問いが発せられたのは数秒の沈黙のあとだった。

「死亡しました」

簡潔に答え、ようやく我に返った船長とともに緊急浮上の操作を行う。

だが、2万トンの潜水輸送船は浮上しようとしなかった。むしろ、沈降しつづあった。

なぜだ。なぜだ。なぜブローしないのだ。ベテランの船長は絶句していた。目を血走らせながら計器をにらみつけているだけだった。

「レイチエル・オドネルから《信州丸》へ」彼女はあえて正式な言葉遣いをした。「緊急浮上不能。船を捨てて脱出します」

「《信州丸》了解。現在潜水輸送船は1ノット（時速1・8キロ）、深度40メートルで北西へ進行中。また、毎分30センチで沈下中」

レイチエルは額の汗を拭って船長に指示を出す。

「船を捨てます。ブリッジを切り離してください」

《ブライト・スター》をはじめとするカラ級潜水輸送船の船橋部は非常時には独立した潜水カプセルとして切り離すことができるのだった。

「し、しかし、ほかにも生存者が……」

「いません。急いでください」

レイチエルはこの潜水輸送船の非常脱出装置が水深50メートル以上ではまともに作動しないと聞いていた。

船長はうなずき、首にかけた鍵を取り出すと計器盤に差し込んで回す。

「警告、警告。退船命令が発せられました。乗組員は大至急船橋へ集合してください。警告、警告。退船命令が発せられました。・・」再び鳴り響く合成音に負けないように船長は怒鳴った。

「ショックに気をつける」

差し込んだキーをさらに90度回す。あちこちで隔壁の閉じられる音が聞こえてきた。

「脱出」

宣言して船長はキーを「切り離し」の位置へ回した。なにも起こらなかった。

電源切り替えも、ジョイントの切り離しもなかった。ただ、警報だけが鳴り響いていた。

みな呼吸が荒くなった。

船長が汗をしたたらせながらもう一度キーを回す。

やはり駄目だった。

「《信州丸》へ。脱出不可能。救援を乞う」

レイチェルの声はかすれていた。彼女の隣では、船長がまだキースイッチと格闘していた。

通信機から聞こえる返事には急激にノイズが増え、もはや聞き取るのも難しい。

「《信州丸》了解。可能な限り急ぐ。もう少しだけ辛抱して……」そこで音声は切れた。母船と《ブライト・スター》を結んでいた通信線が切れたのだ。

最悪だ。

彼女は拳を壁にたたきつけた。

パリが輝いているのは、本当に短い期間だけね。
カフェテラスでコーヒークップを傾けてエマは嘆息した。

しばらく腰を据えていると、いろんなところが見えてくる。

たとえばありとあらゆる所に転がっている犬のフン。これに気がついたときは外でコーヒーを飲むなんて正気じゃないと思ったけれど、なぜかそれにも慣れてしまった。

たとえばちよつと目を凝らすと遠くに見える核分裂発電所。フランスの電力のほとんどがこれに依存していることは知識としては知っていたけれど、ちよつと郊外に出ると白煙を吐き出す巨大な放熱塔が並んでいる光景はあまりに非現実的だ。

そして、ベンチに座り続けている老人たち。彼らがふるえる手で抱えるカップの中身がジンであることを知ると、目の前の景色がさほどのどこには見えなくなった。

でも、また休暇は2週間ある。イタリアやドイツへのドライブは飽きたし、イギリスで寒さに震えながら博物館に通うのもばからしい。

もう一度ため息をもらし、いまひとつ内容を理解できない雑誌をながめた。9月も半ばを過ぎると3時頃には太陽は西へ傾きはじめている。

電話が鳴っていた。

最初は控えめに、徐々に大胆に。

鳴り止まない電子音に周囲の非難の視線を感じながら、ポーチから衛星携帯電話を取り出す。

「はい」なるべく不機嫌な声にならないように努力したけれど、やっぱり無駄だった。「わたした」冷徹な声が受話器から聞こえてきた。「アジアで厄介ことが起きた」

「それで？」エマは自制をやめた。ひどくうんざりした声になっている。

「最寄りのトリスアギオン基地へ急いでくれ。そこから最優先でオキナワへ送る。メンバーの集合地点はそこだ」

「何があつたんです？」

「潜水輸送船の暴走事故だ。危険物を満載したままトウキョウ・

ベイへ突き進んでいる」

「爆破しちゃえばいいのに」

「まだ中に人がいる」

「人道主義でいらっしやるのね」

「トリスアギオンとはそういうものだ」

まあすてき。エマは胸の中でつぶやいた。このオペレーション・マネージャー（任務管理官）がこんなことを言う人だったなんて。感動ものね。

「メンバーはいつもの通りですか？OM」彼女も相手も、この略称が気に入っていた。「ああ。ラリー、ジョナサン、ドーソン、そしてエマ、君だ」

彼女は席を立った。紙幣をソーサーに挟む。

「了解。急ぎます。では」

エマは大腿でタクシーに向かって歩き始める。

船内は静かだった。ごくわずかに船殻がきしむ音がする以外は。

ただときおり男たちがつぶやく声が船橋の中で響いていた。

無言のままでレイチェルは男たちを観察している。

……いまはまだ事態をつかんでいない。ただ怯えているだけ。けれど、やがて彼らは事態を認識するだろう。そのあと恐怖にとりつかれるにちがいない。

そのとき彼らは、私が救うべき人たちは、恐るべき存在になるだろう。

私は、そのときどうしたらいいのだろうか。

「状況を説明する」

シャルル・ドゴール空港で離陸待機中のSSTO（水平離陸式軌道往還機）の鼻先にトリスアギオンのヘリで降り立って3時間後、

エマはほかのチームメンバーとともに沖縄で状況説明を受けていた。半透明のホログラフ画像を指さしながら淡々と説明しているのはメンバー最年長のラリーだった。

「6時間前にロシア船籍のタンカー『ブライト・スター』の機関部に故障が発生した。この船は北極海航路用の潜水タンカーで、融合炉で電力を取り出し、超伝導コイル式のウォータージェットで推進している」

彼の指先から少しずれたところで、ナマズのような形態の潜水船の立体映像がくると回転していた。エマはそつと手を伸ばし、ラリーの指先を潜水船の方へずらしてやる。

かすかにラリーはエマにうなずくと説明を続けた。

「不具合が発生したのは融合炉の冷却関係だ。オーバーヒートを起こして炉が停止し、修理している最中に浮力を失って沈みはじめた」

「なぜ沈んだ？浮力タンクをいじってたのか？」ドーンが素っ頓狂な声でたずねた。彼は深海作業のエキスパートだった。

「よく分かんが、冷却水の外部取り込み口から大浸水したらしい」

ラリーを除く3人はあきれかえってお互いの顔を見合わせる。ラリーは彼らの様子が気がつかないかのように話を続けた。

「まず、事故発生の連絡が遅れに遅れ、海上保安庁が駆けつけたときにはもはや手に負えるものじゃなかった。そこで彼らはトリスアギオンの日本支部へ救援要請を出し、深海作業ロボットを扱えるチームが派遣された。連中は沈んでいる船に接触して浸水を止め、なんとか浮上させようとしたのだが……」

彼は何度も首を振った。口元には皮肉な笑みが浮かんでいる。

「今度は主機関がぶっこわれた。プラズマ漏れた。トリスアギオン12名は1名を除いて死亡。クルーは20名が死亡したと思われる。船の損害は浸水・火災。および駆動用超伝導コイルの半数が破損」

今度はさすがにエマたちも言葉を失っていた。ごく微量でも5千万度から1億度の気体が密閉された船内に漏れたせば、そこは焦熱地獄と化すだろう。

「なぜだか知らんが、本来後方にいるべきオペレーション・マネージャー自身も現場にいて事故に巻き込まれた。おかげで増援要請さえ遅れるほどに現場は混乱している。無能なものが無謀な行為で実績を示そうとするからだ」

エマもラリーの不遜な言葉をとがめる気はしなかった。任務管理官の仕事は実働要員が出動した時点で本来終わっているものだからだ。もちろん、ほかの二人も口を挟まなかった。ラリーは説明を続ける。

「やっかいなことに、炉は停止しているが船はまだ動いている。生き残っている超伝導コイルに蓄えられた電力がゆっくりとだが船を前進させているんだ。さらに制御システムも現在暴走状態で操縦不能」

「脱出はできなかったの？」今度はエマが尋ねた。

「脱出装置が……この型の船はブリッジごと脱出装置になるのだが……機能しなかった。おそらく破損したコイルから漏れている磁力線のせいで誤動作しているのだろう」

「事情は飲み込んだ」ダイバーのジョナサンがぐもった声で言った。

「やっかいだぞ」ぐると全員を見回しながらラリーは言う。彼の行為になんの意味もないことに全員が気づいていた。だが誰もなにも言わなかった。

「おそらく、有人にせよ無人にせよロボットが船に接近することそのものが難しいだろう。1ノット近くで動いているし、それに近づけば近づくほど強磁界でロボットが「発狂する」可能性がある」

「方針はあるの？」とエマ。

「ある。まず生き残っているコイルを無人口ボットをなんとか接近させて破壊する。体当たりでも何でもしてね。そのあとクルーを

脱出させ、無人の船をどうにかする」

「積み荷は何かしら？」

「こいつもやっかいだぞ」ラリーは口元をゆがめた。「契約書によると積み残しているのは5000キロリットルの硝酸アンモニウムだ。肥料の原料だが強力な酸化作用を持つ。つまり爆薬だな」

「5000キロか。そんなものがいつぺんに爆発したら戦術核なみの破壊力だぜ」とドーソン。

「いまその船は、深度200前後をふらふらしながらまっすぐ東京湾に向かっていて。絶対に湾内に入れるなどのお達しだ」

がたがたと4人の足元が揺れた。彼らとロボットを輸送する大型飛行艇が高度を下げたのだ。

ラリーは腕時計に手をやって時刻を知る。手元の資料を音を立ててテーブルにおいた。

「あと1時間だ。それまでにこの資料に目を通してくれ。『ブライト・スター』の構造、周波数チャンネル。そして生き残りの名前」
言われるままに資料を手にし、エマはそれをめくった。そしてあるページに釘付けになる。

「どうした？」ジョナサンが声をかけた。

「たいしたことはないわ」エマは奇妙な表情を浮かべていた。「生き残りのトリスアギオン隊員が知り合ってたのよ」

ジョナサンも資料を見た。「ああ、レイチェル・オドネルね。……」

……オドネル？おい、エマ。君の姓は……」

「オドネルよ。レイチェルは双子の妹。二卵性だけど」

絶句するジョナサンにエマは艶然と微笑んだ。

「大丈夫。彼女だからといって見殺しになんてしないから」

今度は男性3人すべてが言葉を失った。彼女は首を傾げる。

「あれ？話さなかったっけ？あたしと彼女、犬猿の仲よ」さらに微笑んで彼女は言った。

「だって彼女、私の夫を奪ったんですもの」

「これはなにかの陰謀だ」船長の言葉があまりに断言的だったの
で、レイチエルは何と答えていいか分からなかった。

「これは陰謀だ。そうとしか考えられない」彼は繰り返した。驚
いたことに、ほかにも同意見のクルーもいるようだった。

だが、異なる意見を持つものもいた。

「いや、呪いかもしれません」脂の浮いた顔でのろのろと船医が
言った。レイチエルは思わず酸素濃度を確かめる。正常だった。二
酸化炭素は6000ppm。やや問題ありだが中毒を起こすほどで
はない。室温は29度。蒸し暑い。確かに理性を失いかねない環境
かもしれない。

笑い事じゃないわ。彼女はジャケットの脇腹をそつとなでた。
船医が不意に立ち上がって演説をはじめた。

「呪いです。これは我々が悪魔の物質を運んでいることに対して
の警告なのです。今朝、私は夢を見ました。夢の中に現れたのは…

…」

言ってることが支離滅裂ね。まだ「お笑い」の段階だけどちよ
つとやばいかも。だけど、硝酸アンモニウムが悪魔の物質って大げさ
すぎやしないかしら？

「馬鹿を言え。呪いなんてあるものか」誰かが言った。

そうそう。まだ大丈夫じゃないの。

「どこかのスパイの仕業だ」

この人たち、まともに議論をしているつもりなのかしら。彼女は
ため息をつくと計器盤へ向き直り言うことをきかない非常脱出装置
の回路を確認しはじめる。

……思った通りだわ。指令信号はきちんと送り出されているけれ
ど、受信確認の信号を送ってくる線にノイズが乗っているから、次
のシークエンスに進まないのね。それならば、受信信号をこっちで
出してコンピューターをだましてやればいいのよ。

コンピューターのエラー履歴から問題点を見つけだし、回路に細工を施している彼女の背後では理解不能な会話がまだ続いていた。やがて船員たちは漏れだしたプラズマが積み荷にダメージを与えたのではないかと怯えはじめる。レイチエルは我慢できなくなった。

「もし、プラズマがタンクにダメージを与えたなら私たちはとうに死んでいます。硝酸アンモニウムの沸点は200度ないんですよ。熱遮蔽もまだ大丈夫です。心配しないで」

「タンクが爆発なんてするものか」船長が吐き捨てた。「あの中に入っているのは水だ」

相手の言葉を理解するまでにしばらくかかった。

「なんですって」レイチエルは船長に詰め寄る。声が1オクターブ下がっているのが自分でも分かる。彼らの会話の内容が腑に落ちなかった理由を彼女はようやく理解した。

「あなたたち、この船で何を運んでいたの？少なくとも、硝酸アンモニウムじゃないわね」

「あと10分です」パイロットからの呼びかけでエマはマニュアルから顔を上げた。彼らの操るロボットは深度100メートルまで行動可能なタイプだった。耐圧殻に護られずんぐりしたそのボディはオペレーターに飛沫ひとつかけることなく深海での救助活動を可能にする。

さらにこのロボットは無人潜水ロボット《ロー・ボーイ》を3機までコントロールすることができた。オペレーターは《ロー・ボーイ》を文字通り手足のように用いて搜索を行い、必要ならその強大なマシンアームで作業を行うのだ。

いま、彼女が再確認しているのは《ロー・ボーイ》の手動操作方法だった。通常なら慣性航法装置と常に母船からアップデートされるモデルデータに従って、まるで独自の意志を持ったように動くこのロボットだが、今回はそれが通用しないかもしれないと感じてい

た。

理由は《ブライト・スター》から漏れ出す磁力線だった。

どういうわけかいまだに超伝導状態を維持している駆動コイルから発生する磁力線は接近する電子装置に悪影響を及ぼさないはずはない。もちろんこのロボットには強固なシールドと多重のエラー補正機能が付加されている。しかし《ブライト・スター》の非常脱出装置でさえ影響を受けるような状況ではその備えもはかないものと感じてしまうのだった。

そのためエマはメンテナンスのとき以外滅多に見ない手動操作のページをめくっていたのだった。

彼女は少し伸びをしてからマニュアルを閉じ、思い思いの姿勢で室内にたたずんでいる残りのメンバーを眺める。

イルカの生まれ変わりを自認し、素潜りで60メートル近く潜ってぴんぴんしている怪人のジョナサンはヘッドホンから聞こえるゴスペルに没頭していた。

彼女と同じく深海作業機械操作のエキスパートであるドーソンは手垢で汚れた本を眺めている。なんの本を読んでいるのかエマは会うたびに尋ねているが、彼はなぜか答えようとしない。

そして、ラリー。

もとシールズ（海軍特殊部隊）の軍曹だったという彼の両目は堅く閉じられていた。ときどき拳がぎゅっと握られ、それから時間をかけて緩んでいた。

男の顔には無数の傷跡があった。その傷は閉じられた瞼の上までかかっていた。

ラリーは両目の視力を失っていた。シールズ在籍中に起こった事故のためだった。

だが、彼はこのチームに君臨していた。目が見えないことはなんのハンディにもならなかった。彼に扱えるようにロボットは改造されていたし、センサーと機外カメラ以外に頼るものがない深海では目が見えることはさほど意味はなかった。

彼がセンサーからの情報と経験をもとに下す判断に誰も口を挟まなかった。ただひとり、ラリーをトリスアギオンに引き入れたあの《O・M》を除いては。

……彼は夢を見るのだろうか。

かすかに何かつぶやいているラリーを見ながら、エマはふと思うのだった。

「2キロ入りのコンテナ15個分のプルトニウムだ」

船長の声は冷静だった。むしろ平坦と言ってよかった。一方、レイチエルの声はひび割れていた。

「なぜ？何のためにそんなものを？」

「ロシアに廃船となった原子力潜水艦が何隻あると思う？何発腐りかけの弾頭があると思う？膨大な量だぞ。それらから生成される大量のプルトニウムをすべて処理できるだけの施設が我が国にあると思うかね？」

「捨ててるのね。こっそりと」事態を把握した彼女は絶句した。

「やむをえんだ」

「プルトニウムの毒性がどれだけのものか知っててそんなことをしているわけ？道ばたに空き缶を捨てるのとはわけが違うのよ」ようやく我に返った彼女は猛然と相手にくっつかかった。

「それについては一応の配慮はしている。遺棄地点はトンガ海溝で、カプセルの耐久期限より先にプレートともにマントル層へ沈み込むだろう」

「だから最初の事故のとき通報が遅れたのね。この積み荷のことを他国に知られたくなかったんだわ。救いようのないアホよ。あなたたちは」

そう吐き捨てつつレイチエルは思考を巡らせた。

……この船にプルトニウムが積み上げられていることを上の人間は知らない。いや、ほぼ確実に硝酸アンモニウムが、危険な爆発物が積ま

れていると確信しているにちがいない。

そうだとしたら、最悪の場合彼らはこの船を沈めるだろう。大量の爆発物を満載した船を東京湾内に入れるわけにはいかないからだ。だが、この船に積まれているのは冥府の王の名を持つ毒物。ごく微量でも数万人の命を奪える本来地上には存在しない元素、プルトニウム。

彼らが船を沈めれば……漏れだしたプルトニウムで西太平洋は汚染され、死の海となるだろう。もし沈めずに自沈・着底させたとしても、そのときのショックにコンテナが耐えられる保証はどこにもない。

「知らせなきゃ」いつのまにか言葉が彼女の唇から漏れだしていた。

「リリース5分前」

ナトリウムランプで照らされた輸送機の格納庫にアナウンスが響く。着水後水中にスタビライザーを展開している超大型飛行艇は穏やかなピッチで揺れていた。

エマは身にまとったドライスーツとそのうえに装着したホットスーツをもう一度確認する。それから、シートの後ろに手を伸ばし、ヘルメットとフィンが収まっているかどうかを確かめた。

「エマ、ケツが痛くないか？」

ジョナサンが白い歯をむき出して笑いながらコクピットに巨体を押し込む。彼の乗る機はエマの乗るそれと同様に、耐圧殻とセンサー類で不格好なまでに膨れ上がったボディと背中から左右に突き出している多目的ラックが特徴の深海作業専用機だった。

いまその機体は輸送機内のハンガーに吊り下げられ、出発の時を待っていた。

「ええ。痛いわ。ホットスーツの熱水パイプってどうしてこんなに固いのかしら」

「水圧に耐えるためだ」

作業員の手を借りてエマたちのロボットよりふたまわり大きく、どちらかというと手足がついたバチスカーフのような機体の後部座席に乗り込んだラリーがそっけなく指摘する。エマは肩をすくめた。「ラリー。最終的にはエマとジョナサンに泳いでもらうことになるのか」

ラリーの前席でドーソンが計器から顔も上げずに尋ねた。

「ああ、そうなる予感がする。二人とも《ジオヘキサン》は持ったか？」

「あるわ」

「投与量シートは？」

「最新のやつをもらった」

ジョナサンがそう答え、胸ポケットを指さした。

体圧調整剤か。できれば使いたくないな。

エマはため息をついた。いくら自分の体重にあった投与量が厳密に計算されているとはいえ、肉体を化学的な与圧装置にしてしまうこの薬が基本的に毒物であることにかわりはなかった。

だいたい私は注射が嫌いなものよ。

もう一度ため息をつく。

「ハッチを閉じます」最終チェックを終えた作業員が彼女に微笑みながら宣言した。エマもうなずく。

圧搾空気の音を立てながら二重ハッチが閉鎖される。ロックボルトを回すモーターのくぐもった音とハッチの隙間を埋めるシーリングに圧力がかかる音がかすかに聞こえていた。

彼女は即座に機器の最終確認を開始する。自己診断プログラムは400項目を越える診断を行い、3秒後には何の異常もないことを彼女に知らせた。

エマは外部モニターのスイッチを入れた。広角気味のややひずんだ映像が焦点を結ぶ。その映像は視野が広いことと、ロボットの背中から突き出したラックに取り付けられたカメラからのものである

ことで彼女にいつも違和感を抱かせるのだった。

「キルロイ・リーダーから各機へ」ラリーがいつもの口調で呼びかけてきた。「準備できたか」

「キルロイ1完了」ジヨナサンが間髪を入れずに答える。

「2も完了」エマは唇をしめらせてから答えた。

「了解。いくぞ」

格納庫内の警告灯が明滅し、整備員が引き上げてゆく。

やがて彼女の足元がスライドし、黒く泡立つ海面が現れた。

「リリース」

ロボットを支持していたクレーンが動き始め、がくんと機体が揺れた。

「神は我らに裁きを下されたのだ」

船医が両手を掲げながら宣言する。

だとしたら神様つてずいぶん意地が悪くないかしら。天罰を下すのなら、悪い奴等だけに影響があるようにしてほしいものだわ。

部屋の隅のできるだけ高い場所に位置を占め、レイチエルは冷静にクルーの様子を観察していた。船長が自閉状態に陥ったのに対して、船医はますます元気だった。

彼が医者だとはとても信じられない。彼女は思う。

いえ、そうでもないか。考え直した。確か「白鯨」でも船医が最初に駄目になったはずだし……。

医師はますますテンションを高め、早口のロシア語で演説をぶちはじめた。もはや彼女のロシア語力では対応できないほどだった。だが、そのトーンが危険なものであることはレイチエルにも理解できた。それを見つめるクルーの瞳には狂気が宿りはじめていることも彼女には分かった。

さらに、船医が何かを叫ぶたびにクルーたちが自分と、船医と最年少のボーイをちらちらと見ていることが彼女をいらだたせた。ク

ルーたちは追いつめられ、怯え、ついにその表情には純粋な生存本能だけが見てとれた。

この表情を彼女は何度も見たことがあった。自分自身も浮かべたことがあった。

再び彼女はジャケットの脇腹をなでる。

ひどく孤独だった。

「キルロイ・リーダーから《信州丸》へ」通信ブイを経由してラリーが母船へ呼びかけている。

「《信州丸》からキルロイ・リーダーへ。感度よし。《ブライト・スター》は君たちの下95メートル。1ノットでなおも進行中。あと15分で交差する。どんぴしゃなタイミングだな」

潜水輸送船の進路を先回りしてダイブしていた彼らに、母船のオペレーターは呼びかける。

「状況を教えてくれ」相手の言葉になんの反応も示さずにラリーは尋ねた。

「変わらない。深度200メートル前後をふらふらしながらゆっくり進んでいる。海流に影響されているが、さほど進路は変わらないだろう。まあ、この深さなら東京湾に突っ込む前に三浦岬あたりで座礁するだろうな」

詳しくはデータリンクを調べてくれ。明るくオペレーターは言った。ああそうだ。東京湾に避難命令が出た。それから自衛艦が出勤している。あとおよそ10時間後、野島崎の20キロ沖で「作戦」を行うらしい。頼むからそれまでにかたをつけてくれよ。

タカハシと名乗っていたトリスアギオン隊員は心配そうな口調で彼らに呼びかける。ラリーはそれをあっさり無視して部下へ指示を出す。

「あと50メートル潜る。《ロー・ボーイ》はそれから出す」
ロボット同士をつないでいる光ケーブル越しにラリーは指示を出

した。ドーソンがぼやく。

「おい、ラリー。こいつの設計深度は100メートルだぜ」

「相手が速いから近づかないと《ロー・ボーイ》が追いつけない。こいつの強度には余裕がある。つべこべ言わずに潜るんだ。《ブライト・スター》に置いていかれるぞ」

「了解。みんな行くぜ」ドーソンがエマとジョナサンに呼びかけた。

その言葉と同時にエマは深度計と連動した浮力調整装置に数値を打ち込みはじめた。

《ブライト・スター》の非常脱出装置の修理はようやく終わった。しかし、いまこれを用いるわけにはいかないことをレイチエルは知っていた。むしろ、さつきこれが故障していたことに感謝したい気分だった。

突然船殻が甲高い悲鳴を上げた。潜水深度40メートルで設計されているはずのこの船には想像を絶する圧力がかかっていた。

3秒ほどでその音は消えた。彼女は止めていた息をはく。デイスプレイ上のエラーメッセージが消えていることを確認するとそつと脱出装置のキーを通常位置まで戻す。

悲鳴が聞こえたのはそのときだった。

振り向いた彼女の目にひとかたまりになっている男たちの姿が映った。男たちの下から細っこい手首が突き出して暴れていた。

「贖罪するのだ。神に子羊を捧げるのだ」踊るようにステップを踏みながら船医が叫んでいた。いや、叫んでいるのは船医だけではなかった。押さえつけられているボーイも、それを押さえる男たちも意味不明の言葉をはき散らしていた。ただ、うずくまっている船長だけが口を閉じていた。

「彼の血を。彼の心臓を。贖罪するのだ。捧げるのだ」声を限りに船医は叫ぶ。いつのまにか暴徒たちもその言葉を唱和していた。

銃声が響いた。

みな動きが止まった。虚脱しきった船長でさえ頭を上げた。レイチエルの右手には硝煙をなびかせる22口径の拳銃があった。ジャケット脇腹の隠しポケットが開いていた。

「酸素の無駄遣いしちゃった」レイチエルはぎくしゃくと微笑んだ。誰も言葉を発しなかった。

「それにしても」彼女は続ける。続けずにはいらなかった。そうしないと自分も叫び出しそうだった。「こういうときのイケニエって普通はか弱い女性のはずんだけど……あんたたちが倒錯しているのかしら。それともあたし、そんなに魅力がないのかな」

もう一度彼女は笑う。

「船内でそんなものを……」しゃがれ声の船長。ショックで自覚を取り戻したらしい。彼女はそれを無視することに決めた。

「さあさあ。みんな一列に壁に並んで。そこのか弱いボーイ君も含めて。あと少しの辛抱なんだから、みんなで仲良くやりましょう」青ざめながら早口で命令する。銃口は船医へ向いていた。クルーたちはのろろと立ち上がり、壁ぎわへ歩いていく。レイチエルの肩から少し力が抜けた。

もはや猶予はないわ。あとどれだけ、押さえていられるのかしら。

ぎしぎしとあらゆる箇所からきしみが聞こえていた。

警報装置はとうに切ってあった。そうしなければ会話も不可能なほどの騒々しさだった。

「なあ」ジョナサンがエマに呼びかけてきた。

「お前と妹の間で何があったんだ」

「さつきも言ったでしょ。旦那を寝取られたの。それだけ」

「それだけって……だから、そうなった理由を……」

「ラリー、止めないの？」

「俺も興味があるな」

「あんたたちって最低」エマは苦笑した。「ごくありふれた話よ。夫が妻の妹に魅力を感じて、浮気して、あげくに彼女のもとに走っちゃって……離婚調停中に交通事故死しちゃったの。本人にとっては全然ありふれてないけどね」

「……すまん。エマ」

「謝るのなら最初から聞かないことよ」冷やかにジョナサンへ切り返す。

もし彼が死んでいなければ、ここまで彼女を憎むことはなかっただろう。祝福はできないにせよ、事実を認めることはできただろう。だが彼の死が二人の関係を決定的なものにしてしまった。お互いに彼の死を相手のせいにした。

そうでもしなければ耐えられなかった。それはエマにも分かっていた。だから、許すことができなかったのだ。

「OMはこのことを知ってたのかな」ドーンがつぶやいた。

「知っているわ。彼がわたしたちについて知らないことなんてないわ」

「すごい人だな。OMは。全然不安を感じなかったんだろうか」

「感じるものか」ラリーが暗い笑い声をあげた。「彼は我々がどう動くかなどお見通しだ」

「まるで神様だな」

「今さら気づいたんじゃないだろうな。まぎれもなく彼は神だ。我々を手札にしてゲームをする神だ」

「手札ね。そうかもしれない。プレイヤーは手札の考えてることなんて気にしないもんね」ドーンは納得したようだった。「誰とゲームをしているか知らないけれど」

「おいおい。決まってるじゃないか」ラリーが心底楽しそうな声を出した。

「彼がゲームをする相手は『運命』だよ」

誰もが答えを失ったそのとき、母船から通信が届いた。

「《信州丸》からキルロイ・リーダーへ」

「キルロイ・リーダー受信」

「さきほど、聴音マイクが《ブライト・スター》から銃の発射音らしきものを検出した」

「何発だ？」

「一発だけ」

「ならば、脅しだろう。彼女だ」ラリーは即座に結論づけた。それからエマに呼びかけた。

「エマ。君の持っている《ロー・ボーイ》を一機目標に接近させてくれ。接触して音声のやりとりができるようになればなおい」
「いいの？相手が速いから、接触すると同時くらいでバッテリーが切れるわよ」

「かまわない。やってくれ」

エマはコンソールを叩いてからスイッチを入れた。ラックに固定されていた小型のロボット潜水艇が切り離され、まっしぐらに潜っていく。

10分後。

《ロー・ボーイ》の監視モニターが3回目のバッテリー切れ警報を出したところ、そのソナーは目標を捉えた。

ソナーからの反射データを基に作り上げたワイヤーフレーム像はそれが《ブライト・スター》であることを示していた。

「よし。行きなさい」彼女はそのワイヤーフレームのブリッジ付近を指でつついた。

4度目のバッテリー切れ警報の後、それは目標へ接近する。近接センサーが輸送船の外殻を捉えると、小型潜水口ロボットはアームを蜘蛛のように広げてそれにとりついた。

「がちゃん。という音が《ロー・ボーイ》の水中マイクからエマに届いた。」

「接触しました」

エマは報告した。

その音はあまりにも小さかった。だが、船殻がひずむ音とは全く異なっていたので、レイチエルはそれに気がついた。

やがて、ほかの人間もそれに気がついた。

「なんだ。音が聞こえないか？」

「いや、音楽だ。クラシックだ」

「そうよ」怯えるクルーにレイチエルは微笑んだ。「『フィガロの結婚』よ。救助が来たのよ」

それはトリスアギオンの救助機が船殻に押し当てたスピーカーで鳴らしている音楽だった。もっとも、なぜ増援チームがモーツアルトの曲を使っているのかは理解できなかった。

あまりいい趣味じゃないわね。でも、許してあげてもいいわ。

レイチエルは肩の力を抜いた。

緊張が解けているのは彼女だけではなかった。みるみるうちにクルーの表情からも固さがとれていく。だが、歓声は起きなかった。あまりに疲れ切っているのだった。

疲れ切っているのは彼女も同様だった。しかし彼女は銃をクルーに向けたまま壁沿いに進み、水中電話を手にとった。

「こちらトリスアギオン日本支部のレイチエル・オドネル。応答願います」

耳を澄ました。じっと待つ。クラシックのボリュームが下がってきていることが不安だった。

ぱたりとクラシックの演奏が止んだ。代わりに何か聞こえてきた。人間の声のようだった。だがひどくこもっていて内容まで聞き取ることはできない。

「レイチエル・オドネルから救援チームへ。そちらの声が聞き取れません。ボリュームを上げてください。どうぞ」

再び何か聞こえてきた。こちらの言っていることは伝わっているらしい。だが、向こうの言っていることが分からないのは相変わらずだった。

もう一度耳を澄ます。

どこか聞き覚えのある話し声だった。しかし、やはりだめだった。内容まで聞き取ることはできなかった。レイチエルは舌打ちをする
と声を張り上げる。

「だめです。聞こえません。ですからまず、最重要事項から伝えます」

彼女は銃を構えなおして息を吸った。

「この船を爆破してはだめです。沈めてもいけません。この船に積まれているのは硝酸アンモニアではありません。積まれているのはプルトニウムです。どうぞ」

レイチエルは耳を澄ました。

なにも聞こえなかった。さっきまで聞こえていたこもった声さえも聞こえてこない。

……接触が途絶えた。

無意識のうちに電話を握りしめていた。

クルーを見た。

彼らは再び仮面のような表情に、恐怖も不安も欠落した表情に変化していた。

落ち着きなさい。彼らはトリスアギオンよ。メッセージはきつと伝わってるし、またやってくる。諦めてはだめ。

「探索機はロストしたみたいだけど、もうじき本隊が来るわ」

クルーは黙り込んでいた。まるで彼女が存在しないかのように彼らの視線はあちこちをさまよっていた。

彼女は切望する。

……泣きたい。誰かにしがみついて泣きじゃくりたい。そつと髪をなでて欲しい。もう心配ないって言ってほしい。

それができないことは明白だった。彼女の義務は終わっていないのだった。

レイチエルは肘でぐいと顔をこすった。

「最悪だ」

エマはラリーが絶句するのを初めて聞いた。もちろん喜ぶ気にはなれない。彼女自身レイチエルの言葉を聞いたときには背筋が凍ったのだ。

「キルロイ・リーダーから《信州丸》へ。支部経由で日本政府にこの船を沈めないよう要請してくれ。なんとかいいやり方を考える」そう言ってからラリーはしばらく沈黙する。彼の言葉が再び聞こえてきたのは数分経ってからだった。ラリーの言葉はひどくゆっくりとしていて、まるで思考しながら話しているようにエマには感じられる。

「とにかく船を沈めるわけにはいかない。クルーだけを脱出させるのもだめだ。船ごと浮上させないかぎり大惨事だ」

「ラリー。聞こえるか」

落ち着き払った声が回線に乗ってきた。彼ら全員がその声に聞き覚えがあった。

「……OMですか？」ラリーがひどく驚いた様子で尋ねる。作戦中に彼がそんな口調になるのもエマにとって初めてだった。

「状況は聞いた」任務管理官はラリーの不審そうな声を全く無視して続けた。衛星経由の通信のためか会話にはいくらか時間差があった。「いずれにせよあの船は湾内に入れられん。気密を抜いて着底させよう」

「クルーがいますよ。トリスアギオンの隊員も」

「もちろん救出は努力してほしい。だが優先させるべきなのはあの船をできるだけ沖合で沈めることだ」

「ブルトニウムよ。そんなことで大丈夫なの？」エマは沈黙していることに耐えきれなくなった。

「私はあの船にはブルトニウムはないと考えている」

「……どういうこと？」

「レイチエルの事実誤認だとおっしゃるのですか？」ラリーがし

ばらく経ってから尋ねた。

「いや、狂言だろう。船を沈めさせないための」

エマはいきり立った。

「なんてことを！彼女がそんな嘘をつくと思っているの？あの子が自分が助かりたいからってそんなことをするはずはないでしょう」

「レイチエルはクルーを救うために我々の爆破計画を牽制したのかもしれない」

「彼女はそんなに視野の狭い人間じゃないわ。それはあなたも知っているでしょう？だってあなたは、彼女の……」

「君は彼女に裏切られた当事者ではなかったかね？」OMの言葉は穏やかだった。

「……ええ、確かに酷い嘘をつかれました」エマは静かに言った。自分が落ち着いていることが信じられなかった。

「では、なぜ今度は信じるのかね」

エマは沈黙した。だがそれはOMの意見に賛同したわけではなかった。

それとこれとは違うのよ。うまく言えないけれどそんな嘘は彼女には似合わない。彼女はエゴイストだわ。間違いなく。

だけど自分のためではなく乗組員を救うためにしても、より多くものを犠牲にするようなことを言えるはずがない。

なぜならば、私たちはひとりでも多くのものを助けるためにここにいるのだから。できるだけ多くの人間の未来を護るためにいるのだから。

しかし、それを彼女は言葉にすることはできなかった。

「犠牲は最小限にすべきだ」OMがさつきと変わらない態度で言った。

「もし、プルトニウムの件が嘘ではなかったら？」ラリーはいつもの口調に戻っていた。

「ロシアに確認した。首相は公式にその事実を否定している」

「そもそもそれが疑わしい」

「責任は私がとる」

「いいえ」ラリーははっきりと言った。「責任をとるのは指揮官の私です。あなたには実行メンバーに関しての人事権はあるが、作戦そのものについてとやかく言う権限はありません。ジョナサン、ドーソン、エマ」

「はい隊長」彼らの声は揃っていた。いまだかつてないことだった。

「意見を聞こう。あの船を浮かび上がらせる手はあるか？」

「機関を止めればいい。そうすればあの船のコントロールは取り戻せる」ドーソンが提案した。

「どうやったら機関は止まるの？」

「簡単だ。超伝導コイルを破壊すればいい」

「どうやって近づく。コイルのそばへ近づく」とロボットが狂うぞ」ジョナサンがゆっくりと言った。

「《ロー・ボーイ》自律制御をオフにして有線でコントロールすればいいんじゃないかしら」

「よし。決まりだ」ラリーが議論をまとめた。「あと20メートル潜る。可能な限り接近して《ロー・ボーイ》を接近させ、破壊する。こつちの燃料電池の残量も少ない。あと1時間もすれば《ブライト・スター》に引き離されるだろう。勝負は一回かぎりだ」

「ラリー」OMが呼びかけた。

「なんででしょうか」

しばらくの沈黙があった。エマは息を殺していた。

もしここでOMがラリーを解任するなどと言い出せばどうなるのだろうか？誰かが指揮権を引き継ぐのだろうか？それとも、別のチームがやってくるのだろうか？

「ラリー」

OMが繰り返した。エマは拳を握った。

「健闘を祈る」

そして彼の気配は回線のどこからも消え失せた。

「やったね。隊長」ドーソンが冷やかした。

「よせ」

「俺も言ってみたいつすよ。いまの言葉」

「ジョナサン。来年の契約更新がどうなってもいいのなら言ってみることだ。……総員！」ラリーは声を張り上げる。「行くぞ！」

「はい隊長！」

再びみなが唱和した。

「我々は見放された」

「うるさい」

「この女は救済の機会を我々から奪ったのだ」

「黙りなさいってば」

船医とレイチエルは不毛なやりとりをかわしていた。

やっぱりこいつには一発ぶち込んでおくべきだった。レイチエルは歯噛みする。だが、船医は銃を恐れたのか罵詈雑言を彼女にぶつけるばかりでほかのクルーを扇動しようとはしなかった。

いや、できなかった。と言うべきだろう。救出のチャンスを目の前に差し出され、それがあつという間に消え失せてしまつて以来、ほかのクルーたちは怒ることもできないほど絶望しきっていたのだつた。

ここまで来ると可哀想になつてくるわね。彼女は余裕を取り戻していた。

だけど、もし彼らが増援が来る前に脱出の可能性があることに、つまり脱出装置が復旧していることに気づいたら、再びクルーは船医の扇動に乗るだろう。

彼女は制御装置の前へそつと移動し、彼らの視線をそこから遮った。

ふと目を上げる。船医と視線があつた。男の視線はひどく淫靡でさえあつた。レイチエルは脅すように銃を振ってみせた。彼はにや

りと笑う。

だが、視線は外さない。男は彼女を眺め続けていた。

「うわ、畜生」

ジョナサンが悲鳴を上げた。

「ラリー。だめだ。《ロー・ボーイ》が派手に制御不能になっちまった。いま、3機ともぐるぐる回っているだけだ」

「ジョナサン！『うちの子』から離れて！ケーブルが絡まるわ」
エマも怒鳴っていた。彼女の操る《ロー・ボーイ》もひどかった。
送り出すコマンドの半分以上がエラーチェックではねられているのだ。ただでさえ動きが鈍くなっている状態で、ほかの機械との衝突など気を配ってはいられない。

「ジョナサン。通信速度を落とした上で制御を二重化しろ」

「もうやってるよ！だけでも駄目だ。こいつが磁界の影響を受けてるのは通信部じゃない。本体内部でバグってるんだ」

ラリーが舌打ちをする。

「エマ。そっちは」

「こつちのも聞き分けが悪くなってるけど、まだ大丈夫よ。あと15メートルないわ。やってみる」

「了解。ジョナサン。君の《ロー・ボーイ》は電源を落として遺棄しろ」

「分かった。だが、今となつては電源を切れるかどうかも疑わしいぜ」

その通りだった。ジョナサンの操っていた《ロー・ボーイ》は停止信号さえ受け付けずくるくるトンボ返ししながら海底へ消えていく。通信線はとくに引きちぎられていた。

エマの《ロー・ボーイ》もそれから10秒後に同じ運命をたどった。

「放蕩息子たちよ。さらば」ドーソンが芝居じみた声で言った。

誰もなにも言わなかった。

「……打つ手なしか」ジヨナサンの声も暗かった。

「船首方向なら電磁波の影響もないわ。最初のロボット艇はたどり着いたもの」

「ああ、かもしれん。けれどもう《ロー・ボーイ》はないぞ」とラリー。

「ロボットがある。今、あたしの乗っているのが」

「それであと30メートル潜るのか？」

エマは我に返った。確かに機体のきしみはすさまじいものだった。いや、それどころではない。ハッチのシール部からは水滴がしみ出しはじめている。耐圧殻の強度が限界に近づいているのは確実だった。

「機体の内圧を上げるわ。そうすれば圧力差に耐えられる」

「《ブライト・スター》に取り付いたあとはどうする。ロボットが船尾に近づけば……」

「大丈夫よ。絶対に誤動作しない機械があるから」

彼女は不敵に微笑んでみせた。

がちゃんと音がした。

すぐそこだった。船橋のすぐ外からだった。壁にもたれていたレイチエルは立ち上がる。

くぐもった音が聞こえた。誰かがノックするような音だった。

そして音楽が聞こえた。「フィガロの結婚」だった。

「ほらね」レイチエルは笑ってみせた。声が震えないように、涙がこぼれないようにするだけで精一杯だった。

男たちの表情が再び生き返る。レイチエルは水中電話に手を伸ばした。

「レイチエル・オドネルから救援隊へ。聞こえますか？」

「今度は感度良好よ」

レイチエルの手から受話器が落ちた。慌てて拾い上げる。

「あ、あなたは」

「名乗らなきゃいけないのかしら。私はエマ・オドネル。よろしくね」相手は笑っていた。ただし、その言葉にはかなりの棘があった。レイチエルは絶句したままだった。

業を煮やしたエマは早口で指示を出す。

「しっかりなさい。状況は？」

「げ、現在生存者はクルー6名。救助隊員1名です。クルーの中には一部錯乱したものもいましたが、今は安定しています」

「健康状態は？」叩きつけるようにエマは質問する。

「はい。過労状況ですが生命に支障はありません」

「じゃ、あと5時間くらいはなんとかなるわね」

「え、ええ」レイチエルはうなずいた。相手が何を意図しているのかさっぱり分からなかった。

「こつちの状況を説明しておく」エマは朗らかに話しかけた。

「《ロー・ボーイ》はこの船のクソ磁界で発狂しちゃって使用不能。今ここにいるのは有人ロボット本体。ちなみにバッテリーが切れかけているから、スクリューは回らない。つまりこの場所で釘付け。もつとも船尾へ回り込んだらたちまち制御不能になるのは確実」

「どうするの？」

「外に出るわ。外に出て船尾の超伝導コイルを破壊する。人間だったら磁界じゃ影響はないでしょう。電磁波はいやだけど」エマの言葉はあまりにもあっけらかんとしていて、それが常軌を逸したものであることにレイチエルはなかなか気がつかなかった。

「ちよつと、ここは深度200よ。20気圧なのよ」

「飽和潜水するわ。ロボットを圧力室がわりにして徐々に加圧するの。そして体内の圧力を外圧と釣り合わせれば大丈夫。そこまで圧力を上げるのは大変だけど。窒素酔いを防ぐ薬も持ってきているわ」

「……5時間で足りるの？」

「本当は48時間欲しいわ。健康のことを考えると。けどね、この船、あと8時間で水深が200メートル以下の海域に突入するわ。座礁しちゃったら健康問題どころじゃないよね」

「5時間ね。なんとかするわ」

「よろしく」

電話は不意に切れた。レイチエルは室内を見回した。クルーの顔に浮かんでいるのは焦燥だった。

「なあ。いつになったら出られるんだ」

「あと5時間。そのあと船のコントロールは復旧するわ」

「そんなにかかるのか！我慢できない」

「我慢なさい」歌うようにレイチエルは言った。「ついさっきまでは助かるかどうかも分からなかったのに、今度は待ち時間を気にしてるの？贅沢言わないでね」

「うるさい。さつきからなんだ。偉そうに」3人の男が立ち上がった。肩をそびやかしている。

「まあ、元気になっちゃって。いい加減になさいよ！」

レイチエルは怒鳴って銃を向けた。男たちの腰がすんと床に落ちた。彼女はため息をついた。

肉体は鉛のように重く、唇は乾ききって塩辛い。いちばん我慢できないのはこの頭痛だ。エアが放出されるたびにこめかみがずきずきする。

許容深度を超えた深海作業用ロボットのコクピットの中で、エマはうなされていた。コクピット内の圧力はすでに14気圧を超えていた。彼女の足元にはガス式注射器が5つ転がっていた。

ベルが鳴った。その音は狭いコクピットの中であらゆる音を圧して響いていた。

のろのろと背もたれから起きあがり、圧力計を見る。

「もう、ここまで加圧したのね」つぶやくようにそう言ってベル

を止め、新品の注射器をポケットから取り出した。ひどく乱暴に太股に当てプランジャを押した。シュツとガス音がして薬液が彼女の体内へそそぎ込まれる。

猛烈な吐き気に襲われて咳き込んだ。身体を丸め、涎と涙をとめどもなくこぼす。数分で発作はおさまった。

「エマ。エマ。大丈夫か？」通信機から聞こえてくるのはジョナサンの声。彼はこの苦しみを知っていた。

「なんとか我慢できるでしょう。女は苦痛に強いだよ」

「すまん。俺が行くべきだった」

「あんたはこないだ1年分の許容使用量を使い切ったじゃないの。だめよ。《ジオヘキサ》は毒物なんだから」

「すまん」

「いいのよ。それよりも、緊急時以外話しかけないで。この頭痛、ただものじゃないわ」

「分かった」相手は通信を切った。深呼吸してから背もたれにまた体重をかける。

どうして私はこんなことにしているのだろうか？

裏切り者の妹を助けるため？はした金に目がくらんで毒物を運んでいた6名のロシア人のため？東京湾周辺に住む340万の日本人のため？

少なくともレイチエルのためじゃないわ。私は今でも彼女に面と向かって「くたばれ」と言えるほど彼女を憎んでいる。そのはずだ。だって彼女を憎まなければ、憎み続けなければ、悪いのは私をおいて去った夫になってしまう。彼女と一緒に嘘をついたあの人も悪人になってしまう。

だから私は彼女を憎む。

エマは目を閉じた。

加圧を始めて3時間半を過ぎていた。

その声はつぶやきに近かった。

だからレイチエルは聞き逃した。だが、そのささやきはゆっくりとクルーたちの間で広がっていた。

だから気がついたときはほとんど手遅れになっていた。

「脱出装置が使用可能になっていないじゃないか」

突然船長が吠えた。同時にコンソールへ駆け寄った。止めようとするレイチエルの反応がわずかに遅れた。

「この女。わしを騙したな。動くじゃないか。みんな脱出できるじゃないか」叫びながらキーに手を伸ばす。船を置いて脱出するとコントロールを失った船がどこへ行くかなど全く考えていないようだった。

銃声が響いた。船長が絶叫した。太股を押さえて転げ回る。

「命に別状はないわ」冷酷に言い切った彼女はクルーに銃を向ける。男たちは一斉に後ずさる。

「頼む。俺たちを脱出させてくれ」

「もう我慢できないんだ」

「急がないと船殻が破壊されてしまう」

「うるさい！この恥知らず！」哀願する男たちをレイチエルは一喝した。

「外じゃ命がけで救出準備してるのよ。誰も死なないように努力してるのよ。数百万人のために6人が犠牲にならないように戦っているのよ。自分が憎んでいる人間まで救おうと苦しめるのよ。これ以上……これ以上……」

彼女は顔を上げた。その表情は怒りとは無縁のものだった。

「馬鹿抜かしたら本当に撃つからね」

誰も、なにも言わなかった。

ごっん、ごっんと船橋がノックされた。レイチエルは水中電話を持ち上げた。

「出るわよ。会話ができるのはこれが最後」

「そうね」

「私は今から船尾に向かうわ。超伝導コイルが爆破されたら残りの電力を使って可能な限りアップトリムを維持しなさい」

「姉さ……エマ、あなたは？」

「一緒に浮上したら身体が破裂するから、この深度に残るつもり。ロボットは無動力でもこの深度を維持できるから、コクピットに座って救助を待つわ」

「了解」

「じゃ、いくわよ」それだけ言うとエマはロボットのすべてのスイッチを切り、ヘルメットとフィン、生命維持装置とバッテリーを身につけるとハッチを強制排除した。あっという間にコクピット内を海水が満たしていく。

ハッチが全開になった。気がつくところ、そこは海中だった。ぎゅつとつぶっていた目をエマは開けた。

真っ暗だった。なにも見えなかった。ただ、無限の質量は感じる事ができた。

ライトを点け、彼女は船尾へ歩き始める。

コクピットにつき、潜舵の操縦桿を握るレイチエル。

……徒歩なら、10分つて所か。爆破準備に10分。移動して10分。30分あれば……。

そのとき、彼女はあることに気がついた。

助かったら、彼女になんて言えばいいのかしら。

分からなかった。どうすればいいのか分からなかった。

分からないと言えばどうしてあのとき、あんな気持ちになったのかも分からなかった。エマの夫に告白されたとき、彼女は姉に悪いとは全く思わなかったのだ。あるのはただ、純粋な喜びだけだった。自分が選ばれたという幸福だけだった。

今のあたしなら、どうしただろう？

想像してみる。だが、答えは出なかった。

はっとレイチェルは我に返った。もはや25分が経過していた。

甲高い打撃音が聞こえる。エマが爆薬を仕掛け終わったらしい。

そしてかすかな振動。灯りが消えた。男たちは悲鳴を上げる。し

かし、彼女はコンピューター制御の潜舵が息を吹き返したことをその手応えから知った。

操縦桿に全身の力を掛ける。背後で上がる絶叫も耳に入らなかった。

と、そのとき、彼女は後ろから首を締め上げられた。コンソールに置かれていた拳銃がどこかへ飛んだ。

「キーをよこせ」船医だった。「船が沈む。脱出するんだ」

彼の目は狂気にとりつかれていた。

可能な限りの速度でエマは係留してあるロボットへ急いでいた。

ところが、本来上り坂であるはずの船首への道は下り坂だった。

つまり、船は沈降しつつあるのだ。

何してるのよ。あの女は。まったく、なにやらせてもうまくいかないんだから。子供のころからそうだったのよ。

腹を立てながらも彼女はロボットへ急ぐ。もはや彼女にできることはない。

席から身体が投げ出されるほど暴れたが、船医の力は強烈だった。全く力を緩めない。鞆のような男の呼吸音が耳元で聞こえていた。

意識がふと遠くなる。船が傾いているのか、それとも自分の意識が途絶えているのかレイチェルにはもう分からない。

こんなことなら、両足に一発ずつぶち込んでおくべきだった。せつかくうまくいったのに、こんなヤツに邪魔されるなんて……。

怒りがこみ上げ、一時的に意識が鮮明になる。彼女は渾身の力を

込めて頭を後ろへ振った。後頭部に鋭い痛みが走ると同時に自由になった。

床に落ちている拳銃に飛びつく。
鼻を押さえてのたうつ男の脚に向かって彼女は二度発砲した。

船の傾斜はいよいよ激しくなってきた。おかげで係留索は危険なほど張りつめていた。爆破ボルトでロックを解除した途端、ワイヤーが彼女めがけて跳ね返ってきた。

反射的にそれを避け、身を低くする。首筋からわずかに外れたところをワイヤーは通り過ぎていくのが水流から感じられた。

だが、危機はまだ去っていないかった。ワイヤーが外れたロボットが、彼女の方へゆっくりと傾いてくるのだ。彼女は慌てて周囲を見回す。

船首方向にも、船尾方向にも逃げ場所はない。背後にあるのは船橋だった。目前には次第に迫るロボット。

エマは目をつぶった。

咳き込みながらレイチエルは操縦席に戻った。

一刻の猶予もならない。速く船首を上に向けなければ。

だが、彼女はそうしなかった。上下を制御する潜舵席ではなく、その隣……左右方向を制御する操舵席に着いたのだ。

そうしなければならなかった。

理由は分からないが船体を左へ傾けなければならない。

確信を持って彼女は操縦桿を倒した。

ロボットは倒れてこなかった。代わりに船が大きく左へ傾いた。

ロボットは今度は逆の方へ横倒しになる。ゆっくりとロボットは甲板を滑り落ちていく。

うなり声を上げ、エマは全身のバネを使ってコクピットに取り付いた。

指先がかろうじて引つかかった。

安堵している暇はなかった。今度はそこから振り落とされないように死にものぐるいでしがみつかねばならないからだ。

エマを残して《ブライト・スター》は浮上しつつあった。

いつのまにか彼女は、大声で笑っていた。

その部屋は清潔なだけで何もなかった。一応、テレビとテーブル、ベッド、それに電話があるだけだった。もっとも、圧力調整室の設備に過剰な期待を持つこと自体が間違っていることは彼女にも理解できていた。

とは言え、その中で2週間かけて1気圧に体を慣らさねばならない彼女にとって、それが苦痛なことにかわりはなかったが。

今、エマは貧相なベッドに腰掛け受話器を耳に押し当てていた。

「衛星回線経由で私たちに指示を出していたのではなかったのですか？」

「最初はな。モスクワ発のSSTOから君たちにアクセスしていた」

「なのに、あなたは《信州丸》にいた」

「5時間は長い。大西洋上空からモスクワへ引き返し、首相を締め上げて真相を聞き出し、成田経由で《信州丸》にたどり着くには十分だ」

「最前線に飛び出すのは、任務管理官失格では？」

「そうかもしれないな」

電話越しの声は愉快そうだった。

「あなたが実在しているのか、わたし以外のみんなが疑ってました」

「なるほど。そうかもしれない」

「でも、あなたは自らロボットに乗って100メートルの深度まで降りてきて、わたしをキャッチした」

「その場にいたのは私だけじゃないよ」

「レイチエルを疑っていたあなたが、なぜです？」

「私は悲劇を最小限にとどめるためにここにいるのだ。船をこのまま沈めると、多くの人に危害が及ぶのなら、なかに人がいようがいまいが処分する。船を沈めなくていいのなら、全力でそれを助ける。それだけだ」

「そうですか。それだけなんですか」

「目の前の命に心を動かされていてはOMはつとまらない」

「私には命の選択はできません」

エマは思った。それが、私が絶対に許せない人間でさえ助けたいと思う理由なのだろう。

「君は幸福なのだろう」

「そうかもしれないね。お父さん」

「わたしは……君が、君たちをうらやましく思うときがある」
そして電話は切れた。

それから、チャンバーのドアをノックする音。

窓の向こうにはレイチエルがいた。ひどく困り果てた表情を浮かべ、インターホンを取るように彼女にうながしていた。

人を憎み続けるのは、難しいことなのかもしれない。

彼女はそっと微笑した。

Mission03:「孤独」(後書き)

女性が主人公ということで、いろいろ頑張ってみました。
知人によると「リアリティはないね」とのことでした……。

Mission 4:「樂園」(前書き)

核災害がテーマのひとつになっています。

いま起きていることを見ると、ずいぶん乱暴なお話ですが。

Mission04:「楽園」

Mission04:「楽園」

ガラス窓の向こうで雨はまだ降り続いていた。

低く垂れ込めた雲に覆われた浜辺は無人で、パラソルやデッキチェアがなかば水没していた。

「もう、最っ低」

外を見ていたジュリアがつぶやく。彼女の足もとには乱雑にファイルが詰め込まれた箱がいくつも転がっている。

「ちよつとジュリア。ブルー入ってないで手伝ってよ」

「要保管」と書かれた箱をキヤスターに載せてゴロゴロと押してきたアンナが苦情を言った。

「紙の書類なんて意味ないわよ。どうせほとんどの書類が電子化されているんだから」

「ダメよダメ。ひよつとしたら役に立つかもしれないし」

「だったらアンタがやりなさいよ。あたしはもう、やる気ゼロ。」

あとはコンピューターにお任せ」

それだけ言うのと再び窓の外へ視線をやる。

「ああもう、わたしもやめ！」アンナはキヤスターを蹴飛ばした。それからジュリアのとなりにやってくるところと額をガラスに押し当てて窓の外を眺めた。

「誰もいないわね」

「そうね。いるのは警官と州兵と逃げ遅れた人と……」

「悪党ぐらいよ」アンナがにやりと笑ってみせた。

「そうね」そう言ってジュリアはデスクの上のモニターを見た。

画面には重役室らしい調度が施された室内が映っていた。

いや、それだけではない。

そこにはひどく頑丈な金庫があった。さらにその合金製の扉のあちこちにドリルで穴を開け、電極をさし込んでいる二人の男の姿も映っていた。

彼らの姿に微笑みながら、ジュリアは視線をわずかに巡らせた。破壊された扉の向こうには数台のワークステーションが並び、そこから引き出されたケーブルの先にはラップトップコンピューターが接続されていた。

「あと何分ぐらいかしら」

「そうね」ジュリアは腕時計を見た。「もう2時間近く計算してるから……あと少しね」

「予想じゃ何分なの？」

「最短で80分。最長で140分。解析用チップがなかったらそれの10万倍」

「わお。もしそうだったら一介のOLにはちよつと荷が重いわね」おおげさにアンナが顔をしかめる。そうでなくても荷が重いわよ。ジュリアがそう言おうとした途端、ラップトップがビープ音を鳴らした。慌てて覗き込む。

画面にはまるで意味をなさない40桁のアルファベットと数字が並んでいた。

「一つため息をついてから彼女はハンディ・トーカーを手についた。」

「ミスター・カイル、ヨナ。第一段階の暗証コードが分かったわ」

低く垂れ込む雨雲をつき破って大型の輸送ヘリが浜辺近くのヘリポートに着陸した。

ローターの回転を維持したままで後部ハッチがぱつくりと開いた。「TRISAGION」とマーキングされたヘリから現れたのは偵察・軽作業を主任務とする軽ロボット《プラエファティオ》が2機と重作業可能な大型ロボット《アニウス・デイ》が1機、それにハマー多目的車が2台で編成される7人のチームだった。彼らは力

ーゴマスターに誘導されてそろそろと傾斜路を降りた。

「畜生。太陽はどこにある？降り注ぐ陽光はどこだ！」

「水着の美女は？いや、トップレスだっているはずなのに」

「ここどこが『合衆国の楽園』なんだよ」

地面に降り立った途端に隊員たちからののしり声が上がった。

「我々は楽園には用がない。ぐずぐず言うな」

カーゴマスターが陽気に怒鳴ってハマーのドアを軽く叩いた」

「そりゃそうだ。楽園ならトリスアギオンを必要とするわけがない」ロボットの操縦席の誰かが茶々を入れた。周囲がどっと沸きかえる。

「タイムリミットまで6時間。粘りすぎて溺れるなよ」

男たちの軽口を無視し、雨音に負けないように怒鳴るカーゴマスター。

「分かってる」

ハマーに乗った指揮官が簡潔に答え、窓から出した手を振ってチームへ前進を命じる。

ぬかるみの中をゆっくりとロボットが歩き始め、その後ろではヘリがゆっくりと舞い上がった。

「お前たちの頭が雨で腐っちまわないうちにもう一度任務内容を確認しておく」

隊長のケニー・ニコラウスがハマーの助手席から無線機を通じて呼びかける。

「ここ3週間降りつづいた雨でどのダムも満杯になっちまった。川や運河の水位も限界まで上がってる。このリゾート都市のすぐ近くを走ってる河ももう限界だ」

やり手で知られる30過ぎの指揮官はそこで言葉を切った。

「皆も知っているように温暖化の影響でこの人工海岸の海拔はマインスだ。つまり、あふれた水はみなこっちに流れ込んでくる。流れ込んだ水はもちろん排水ポンプで海へ捨てるが、おそらくある程

度の浸水は免れないだろう」

「ポンプって？」

誰かが質問した。

「もともとどうにもならない湿地帯に造っただけあつてこの都市の洪水対策は万全つてことになっている。各排水施設には強力なポンプが据えてあるし、それを動かす電力も独自に供給できる」

「発電所があるんですか？」

「原子力発電所が地下１００メートルにある。出力１００メガワットで、この都市のありとあらゆる電力もまかなっている」

「リゾート都市に原発が？」

「分かってないな。この周辺は普段でも排水ポンプを動かしてないと海に沈む土地だぞ。火力発電なんかじゃ全然追いつかない。大気汚染も馬鹿にならんし」

「排熱塔が見当たりませんか」

「海底に突き出してる。ここはリゾート都市だぞ。無骨な景観は隠してあるんだ」

「なるほど」

「……そう言うことだ。そこで我々の任務だが、基本的には監視だ。都市には非常事態宣言が発令されて誰もいないことになっているが、どこかの阿呆が残っているかもしれん。その確認を行う」

「それって警察の仕事では？」

誰かがぼやいた。

「そのとおり。だが上層部はロボットを使う事態が発生すると考えている。瓦礫を持ち上げたり、ことによっては家屋を破壊したり」

「なるほど。そいつは州警察の手にあまるかも」

「……そういうことだ」

通話が途切れ、車内はふたたび激しい雨音で満たされた。トリスアギオンたちは豪雨で水に覆われた道をそろそろと進んでいく。

「こんな格好で社内を歩きまわるなんて思わなかったわ」

アンナは思わずばやいてしまう。彼女を追って足早に1階ロビーを歩いていたジュリアは苦笑した。

二人が身にまとっているのはいつものビジネススーツではなかった。陸軍放出の戦闘服だった。脇の下にはSIGの軽機関銃がぶら下がっている。薄くメイクしたその表情と服装はひどくちぐはぐだったが、二人の身のこなしは滑らかで、彼女たちがかなり長期の間訓練を積んだことを物語っていた。

エレベーターが軽やかなチャイムとともに開いた。二人は舞うような動作で銃を構える。そして銃口を標的から外した。

その中にいたのは彼女たちがよく知っている人物だった。

「鍵はびったり合ったぜ。姉さん」アンナの弟のヨナが漆黒の肌に真つ白な歯をのぞかせて微笑んだ。

彼女たちはうなずくとエレベーターに乗る。

「あとは金庫本体のコードを見つけるだけですな。ミスター・カイル」

ジュリアの言葉にああ、と老人はうなずいた。彼こそがこの「仕事」を二人に持ち込んだ人物だった。

「扉を開けるのは簡単だ。後はどうやって持ち出すかな」

「それは考えてあります。大丈夫ですわ」ジュリアは保証した。

「それにしても」アンナは首を傾げる。「どうして会社はあれを持ち出さなかったのかしら」

「記録に載っていないからよ。記録になければ、存在しないも同然だからよ。麻薬カルテルが資金洗浄のために持ち込んだモノを記録に残す人間なんているはずないでしょ」

「そうね」アンナはため息をついた。「だけど、人の出入りさえコンピューターが監視しているこの都市にカルテルの人間が客として存在してるなんて」

「記録がすべてだからだ」老人が意地の悪い表情で言った。「コンピューターにとっては本当の人物像などどうでもいいんだ。デー

タの上で矛盾がない限り不正を発見することはできんよ」

再び穏やかなチャイムが鳴った。ゆつくりと扉が開く。

ビルの地下3階には彼らの目指す巨大な金庫室へ通じる廊下が延びていた。

「おい。ここはリゾート都市じゃなかったのか？」

ハンマーを運転していたジャック・シモンズはハンドルを握ったままルームミラーを覗く、後部座席の男が林立するビルを眺めて驚いていた。

「間違いないリゾート都市だよ。西海岸、いや、全米屈指の楽園だな」

「ならどうしてこんなビジネス街があるんだ」

分かってない奴だな。ジャックは頭を振った。

「ここは高級なリゾート都市だ。そこにくる客のために高度なサービスが必要になる。これもその一環だよ」

大幅にはしよった説明をするジャック。相手は納得しなかった。

「俺もさ、昔ロングアイランドとかに行ったことがあるけど、そこにはこんなものはなかったぜ」

「ここはそれとは比べものにならない」ケニーが割り込んだ。「言ってみればここは巨大なプライベート・ビーチだ。入場者は高額所得者、働いている人間は身元保証付き。外部から入ろうとするとゲートをくぐって『審査』を受けなくちゃならないから犯罪なし、浮浪者なし、人工の浜辺にカジノ、劇場、『非感染証明』つきの女、あるいは男、エトセトラ……」

ケニーは今にも歌い出しそうな口調だった。隊員の何人かため息をつく。

通信士のセルベラもその一人だった。彼も、口もとに皮肉な笑みを浮かべながら大きく身をそらし……そして後部の貨物スペースに見慣れないコンテナがあることに気がついた。

こんなもの、積んだ覚えはないのだけでも。
彼は首を傾げる。だが、それを追求する暇はなかった。本部への
定時連絡の時間がきたのだった。

「任務管理官、ちょっとお尋ねしたいことがあります」

西部アメリカ・トリスアギオン支部の任務管理官（オペレーション・マネージャー：OM）は典型的なアメリカ人のオフィスでのポーズ……机の上に脚を投げ出している書類チェック姿勢……を解除すると書類から目を上げた。そこには資材管理担当者がプリントアウトの束を抱え、奇妙な表情を浮かべていた。

「《パーク・ビーチ・シティ》へ派遣したチームの件ですが……」

OMは目をしばたかせた。

「ああ、あの洪水になつてるリゾート都市か。それがどうした？」

「装備の件なんです。OM、貴方は彼らに武装許可を出しましたか？」

男は首を振った。怪訝な顔をしている。

「連中……大量に持ち出しています。H&K社製サブマシンガン、ショットガンに拳銃、対戦車ロケット砲に、ロボットが装着する20ミリ機関砲まで」

「ばん、とデスクに手のひらを叩きつけてOMは立ち上がった。」

「どうやって？」

「資材管理部の記録では正式な武装許可が下りています。貴方の名義で」

「馬鹿な。なんのために武器なんかがあるんだ」

「で、こっちの記録をさっき調べてもらいましたが、そんな許可は出ていません。どこかで記録を改竄されたようですね」

「なんのために！」

「分かりません。とにかく確認する必要があります。査察部へ連絡をお願いします」

男が去った後も、しばらくの間OMは呆然としていた。それから慌てて受話器を持ち上げる。

「私だ。ケニー・ニコラスのチームを呼び出してくれ」

「なあ、ちよつと気になることがあるんだが」

小休止の時間に呼びとめられ、ジャックはうんざりした表情で相手を見た。さつきオフィス街を見て驚いていた男と視線が合った。そいつはにやにや笑っていた。

「あんた、本当にジャック・シモンズって名前かい？」

「……なにを言ってるんだ？」

「いや、お前さ、前から気になつてたんだけど『ジャック』って呼んでも反応がないときがあるじゃないか。だからひよつとしたら偽名を名乗ってるんじゃないかと思つてさあ」

ジャックは隣の隊長を見る。彼は肩を軽くすくめた。

「おい、いい加減にしてくれよな」

「お前の記録、こつそり見たんだけどさあ」相手はジャックのいらだちなどまったく気にしていなかった。「食い違いがあつちこちにあるんだよねえ。たとえば、あんたの出身地の番地、あんたが生まれた当時には存在してなかったりするけど」

ジャックは相手に一歩近づいた。8人のトリスアギオン隊員すべてが彼に注目していた。

「結局何が言いたいんだ」

「あんた、犯罪者じゃないのか？経歴を偽つてトリスアギオンに入隊して、国外逃亡をねらってるんじゃないのかい？」

「ジミー」それまで黙っていた隊長が静かに呼びかけた。

「お前、頭いいな。半分当たりだよ」

同時に彼はホルスターから拳銃を抜いて発砲した。何が起こっているかも分からずにジミーは壁に叩きつけられて即死する。

「ジャック、カミンスキー、トキタ」

ケニーが怒鳴ると三人の手に魔法のように銃が現れ、あっけに取られている残りの三人へ向けられた。

「もうばれちゃったか。仕方ないなあ」彼はひどくうれしそうだった。

「隊長、いったいこれは……」

「経歴を偽っているのはジャックだけじゃないってこと」トキタが低い声で言った。

「黙ってりゃよかったのに。自慢したくたえようがなかったのか？ あいつは」カミンスキーはうんざりしていた。

「そういうことだ」ケニーの笑顔は相変わらずだった。

「まあ、ばれてしまつては仕方がないよな。うん」

そう言うなり彼は3度立てつづけに引き金を引いた。一言も発せないまま3人のトリスアギオン隊員は地面に崩れ落ちる。

「殺さなくても……」

「殺さなきゃ、バレてたぞ」かすれ声のジャックに対してケニーはあくまでも穏やかだった。

「どうする」トキタが無表情に尋ねた。

「計画どおりにやるまでさ。彼らは最初から始末するつもりだった」

「そうか」

トキタはうなずいた。ケニーは拳銃をホルスターにしまつと矢継ぎ早に指示を飛ばす。

「行くぞ。ジャックはハマーを運転しろ。トキタは『プラエファティオ』、カミンスキーは『アニウス・デイ』だ」

「あんたは？」

「おれ？ おれはお前の助手席だ」ケニーはジャックに微笑んでみせる。

「畜生。こんなはずじゃなかった」ジャックは青ざめたままハマーのドアを開けた。

「どんなことを期待してたんだ？ え？」対するケニーはあくまで

も陽気だった。

そのとき、ハマーの無線機が鳴った。本部からのものだった。ケニ―は無言のままスイッチを切り、そして言った。

「さて諸君、出発だ」

ジャックは乱暴にエンジンをかける。

雨はまだ、降り続いていた。

河の水位は限界まで上昇していた。

護岸設備は莫大な流量による圧力にもはや耐えきれなくなっていた。堤防は各所で決壊し、いくつかの水門も破壊される。

制御を失った濁流は民家を、農園を飲み込み、やがて人造の樂園へ進入する。

その量は都市の排水ポンプではまかなえないほど莫大なものだった。暗渠から水があふれ出し、リゾート都市の道路を勢いよく濁流が満ちていく。

「上がったり下がったり、忙しいわねえ。次はどこ？」

ジュリアは体をエレベーターに預けてため息をつく。肩に下げた軽機関銃とラップトップパソコンがひどく重い。

「1階の機械室。たぶん……これで最後」普段はけたたましいほどのアンナの声にも疲労が混じっていた。

カイルとヨナもむつつり黙り込んでエレベーターの床に腰を下ろしている。

十分な下調べをしたにもかかわらず、いざ取りかかってみるとこの「仕事」は細かなトラブルが相次いだ。

ケチのつきはじめは電源関係だった。この洪水に備えて職員を全員退出させた際に、警備会社はビルの電源を非常用に切り替えた。

そのおかげで金庫室の扉はびくともしなくなつた。扉の電子ロッ

クは解除できたのだが、扉を開放するモーターへ電力が供給されていなかったのだった。

彼女たちは電源を切り替えるためにビル内を走り回る羽目になった。そして、これが最後の操作となるはずだった。機械室の電子錠を開け、警備員の詰め所から探し出したキーを分電盤に差し込んで回す。これで通常電源に切り替わらなければもはやお手上げである。エレベーターの扉が開いた。彼らは機械室へ走り出そうとする。

「待つて！」ジュリアが鋭く静止した。

金庫室につながる大型エレベーターから巨大な人影が大股に出てきた。その両手には金塊が抱えられていた。

その横にはごく普通の体格の人間が付き添っている。

4人は呆然と立ちつくす。そのとき、巨人はこちらへ向きを変えた。巨人は、ロボットはぴたりと動きを止めた。山と積んだ金塊が腕からこぼれ落ち、ひどく重たい音を立てて床に跳ねた。まるで悪戯が見つかった子供のような反応だった。

「泥棒！」アンナが叫ぶと同時に発砲した。

なに馬鹿なこと言ってるのよ。泥棒はあたしたちでしょ。

ちらとジュリアは思ったが、体は自動的に動いていた。滑らかに銃を構え、わずかに遅れて発砲する。

軽やかな4丁の銃の作動音と同時にロボットのボディにささやかな火花が散った。だが、それはロボットにとって致命傷だった。銃弾は簡単にその外板を貫き、内部の精密機械を破壊した。巨人は奇怪なダンスを踊ってひっくり返る。パイロットが死にものぐるいでシートから這い出した。

カイルの足下の絨毯に穴が開いた。相手も拳銃で反撃してきたのだ。

「隠れる！」ヨナはロボットめがけて1連射すると接客ブースへ身を投げた。ほかの3人も手近な遮蔽物へ飛び込んだ。

不意に銃撃は止んだ。エレベーターの扉は閉じていた。彼らは一時撤収したらしい。

「何？あいつら」アンナがあえいだ。

「私たちと同じ、泥棒よ」

「そうじゃないのよ。ジュリア。あれ見てよ」アンナはひっくり返っているロボットを指さした。

そのロボットには「TRISAGION」と記されていた。

「畜生。閉じこめられた」

トキタに肩を貸して金庫室の前を歩きながらジャックは毒づいた。

「どんな連中だった？」ケニーは金塊に腰掛けたまま尋ねた。

「4人くらいだった。そのうち2人は女、白人と黒人だったかな」

「武器は？」

「サブマシンガンみたいに見えたが『プラエファティオ』が行動不能にされた」

「『軽突撃銃』だ。後方支援の兵士でも扱える大きさと反動で、威力はアサルトライフル並らしい。やつら、素人にしては出来過ぎるな」

「ああ、悪党は俺たちだけじゃなかったってことか」

大金庫室のロックをほとんど解除していた手管をジャックは思い出す。彼らはただ、『プラエファティオ』の上腕部に取り付けた20ミリ機関砲とそのパワーで扉を破壊し、こじ開けただけだった。正直なところ、ロックが解除されていなければここまで簡単にいく仕事ではなかった。

ケニーは立ち上がるとエレベーターまで歩き、乱雑に積み上げた武器コンテナに隠れた。

「ジャック。お前も来い。カミンスキー、合図をしたら降ろせ」
うめきながら命令に従う。ケニーが「1」と描かれたボタンを押した。

扉が開いた途端、どこからともなく銃弾が降り注いだ。金属片や漆喰が飛び散る。

二人はできるだけ低い姿勢を保って周囲の様子を探った。

「お前は右を見る」

ジャックはポケットから鏡を取り出してコンテナの陰からそっと突き出す。

銃火が二つ。そのうちひとつはさほど離れていない。さらにわずかに肩も見える。

「2人いる。1時の方向、30メートル。2時の方向、20メートル。こいつは狙撃できそうだ」

「こつちも2人確認した」ケニーが怒鳴った。「カミンスキー！降ろせ！」

無線機に叫ぶとドアがゆっくりと閉まる。ジャックは安堵の吐息を漏らした。

「カミンスキー」エレベーターから降りるなりケニーは言った。

「《アニウス・デイ》を遠隔操縦でロビーへ突っ込ませろ」

「できますが《アニウス・デイ》はエレベーターに入りませんぜ」

「かまわん。やつらを混乱させられたらいいんだ。膠着状態を抜け出して逆にあつちを制圧する」

「簡単にはいかないと思いますがね。さっきの戦いぶりを見るとケニーは一瞬考え込んだ。その表情は無抵抗な人間を楽しみながら殺した殺人鬼のそれではなく、有能な指揮官のものだった。

「《アニウス・デイ》を突入させるところは変更なし。そのあと、右の壁沿いに展開して敵をひとり確保しろ。そいつを人質にして交渉する。トキタとジャックが突入、俺とカミンスキーは援護射撃」

「了解」うつろに3人の男は唱和する。

「なあ、トキタ」再びエレベーターに乗り込みながらジャックは小声で尋ねた。

「あんたもケニーの『勧誘』を受けた口なのかい？」

ああ。トキタはうなずいた。

「日本人相手のちゃんな麻薬ブローカーだったんだが、『大手』

に目を付けられてね。新しい身元をくれると接触してきた。あんたは？」

「俺も似たようなものだ。窃盗で服役してたんだが、仮釈放中にあいつにスカウトされた。言うことかかないと立件できなかった盗みの証拠をばらまくと言われて」

「カミンスキーはどうだろうか？」

「詳しくは知らんが、たぶん俺たちと同じだろう」

「……やり手だな。ケニー隊長は」

「ああ、でも、個人営業じゃない。でかい背後があるんだ」

「ケニー・ニコラウス、この男、調べれば調べるほど現実感がなくなってきましたね」査察部の調査員は肩をすくめながら「西海岸洪水対策作戦」の新任の任務管理官（OM）に報告する。前任のOMは30分前にストレスのあまり入院してしまったのだ。

調査員は続けた。

「出生地も嘘、貯金口座も入金と同時にどこかへ転送されることになっていて、あまりにも手続きが複雑なので一体何がどうなっているのか分からないくらいです。もちろん家族に関する項目もめちゃくちゃです」

「その実存さえ疑われる人間と、その男が身元を偽造した逃亡犯たち」

「これがその逃亡犯たちの訓練記録と心理テスト結果、それから実働記録です」

差し出された資料を一読するOM。しばらくしてから机の前の調査員を見上げた。

「この記録は本物なのか？」

「はい。ここまでは偽造していません」

「感状が3人で合計8。それも2年以内で。優秀じゃないか」

「ええ。意外ですけど」

「意外でもなんでもないかもしれんぞ」OMは苦笑した。「優秀なトリスアギオン隊員とはつまり、優秀な犯罪者予備軍なのかもしれない。警官と犯罪者が似たような資質を持つと同じように」

調査員は曖昧な表情を浮かべていた。OMは3人の記録を眺めながら続けた。

「勇敢で、冷静で……優秀な人間に見えるのだから」

「粗暴犯をのぞくと犯罪者と一般人の差異はほんのわずかなものです」

「分かっている。どこかで道を間違えて、そこから這い上がる手段を見つけれなかったか、見つける努力を諦めてしまったのだろう」

「そうなりますね」

「もしケニーが『計画』を途中で放棄していたなら、かれらは優秀な隊員でいられたのだろうな」

OMはふつとため息をつく。調査員は彼の様子に少し驚いていた。彼のような人もため息をつくことがあるのだろうか。「氷」という異名を持つ男が……。

だが、調査員がそのような思考に浸っていたのはわずかな間だけだった。

「何が目当てだと思う？盗み出すのにロボットが必要で、命を危険にさらしてもいいほどの価値があるものとは」

「現金、宝石、有価証券……そんなところでしょが、避難命令が出たときに持ち出されているはずですよ」

「本当に盗みが目的なのだろうか」OMはつぶやいた。「彼らは偽造と欺瞞工作に恐ろしく手間をかけている。割に合うとは思えん」

「とにかく、ロボットのトランスポンダーから大至急彼らの位置を割り出します」

調査員は言った。

「そうしてくれ」OMはうなずくと会談を打ち切る。

調査員が去ったあとも、男は3人の記録を眺め続ける。

……これは一種のデモンストレーションかもしれない。

OMはふと思う。それはひどく不快な考えだった。

ロボットの万能性と多用途性を宣伝するための。犯罪にロボットが用いられたときの危険性を世間に知らしめるための。

そう、我々のスポンサーの一部がロボットの兵器としての利用価値をトリスアギオンの活動記録を使って宣伝するように……。

それはひどく不快な考えだった。

「トリスアギオンが盗みをやるなんて！」

「おいおい、われわれだって泥棒だぞ」

息巻いているアンナにカイルは苦笑する。

「彼らは何人いるのかしら？」ジュリアは平静を取り戻していた。「何人いるか分からないが、金庫室に立てこもっているだけで全くだろう。外にはロボットが1機とハマーが停まっているだけだった」ヨナは外を振り返る。道路には30センチほど水がたまり、銀行の入り口に積み上げた土嚢をもうじき乗り越えてこっちへ流れ込んできそうだった。

そのとき大音響とともにロビーのガラスが割れた。同時に巨大な人影が飛び込んでくる。

「来たぞ！」ヨナが叫びながら発砲する。ほかの3人の注意もそちらへ向いた。

「違う！陽動だ」《アニウス・デイ》のコクピットが無人であることに気づいたカイルが叫んだ。

だが遅かった。エレベーターから銃声とともに男が2人飛び出してきた。ヨナがすかさずバーストショットで応戦する。

当たらなかった。それどころかジャックが闇雲にショットガンを連射してヨナのすぐとなりのオブジェを粉々にした。ヨナは耐えきれずベンチの陰に身を投げる。

拳銃の発射音と同時に悲鳴が聞こえた。太股を押さえてカイルが

床に倒れた。

銃を構え直したアンナの射界に赤毛の男が飛び込んできた。必中の距離だった。

しかし、引き金を引くはずの指は硬直していた。男が突っ込んだ。アンナは悲鳴を上げた。彼女と男はもつれたまま床を滑った。

先に立ち上がったのは男だった。彼女をひつつかんで巨大な彫刻の陰へ引つ張り込むと、ショットガンを突きつけた。穴だらけにされた《アニウス・デイ》は意味もなく壁へ向かって突撃し、ひっくり返ってそこで動かなくなっていた。

「おい。この女がどうなってもいいのか！」

嫌悪を声に出さないように努力しながらジャックが怒鳴った。

返事は至近距離への着弾だった。ブロンズ像が甲高い音とともに碎けた。

「そつちこそ命が惜しければアンナを放しなさい！そうすれば仲間も無事に逃がしてあげるわ」

「うるさい黙れ、このクソアマ！イニシアチブを握ってるのはこっちだ」

ジャックの代わりにケニーがエレベーターから怒鳴った。が、機関銃を掃射されて床にはいつくばる。

トキタがショットガンを立て続けにぶつ放した。だがそれは威嚇以上の効果はない。逆にジュリアに狙撃され、弾切れになったショットガンを放り出して柱の陰へ飛び込んだ。

「クソ、クソ、くたばれ、くたばれ！」

ケニーが叫びながら武器コンテナから身を乗り出し、両手に構えた拳銃を連射した。たちまちのうちに弾丸は尽きてカチカチと撃針が鳴った。カミンスキーが彼のベルトをひつつかんで引きずり込む。さつきまでケニーがいたところに銃弾が降り注いだ。

「おいおい、交渉するんじゃないのかよ」

銃撃に加わりたくても加われないジャックがつぶやく。ケニーは完全に我を忘れ、ひたすら発砲を繰り返していた。

ロボットが破ったガラスから静かに雨水が浸入し、銃を構えてにらみ合う彼らの脚を濡らす。やがてその流れはゆるゆるとエレベーターへなだれ込んでいく。

濁流の被害は浸水だけではなかった。

水位の上がった水は逃げ場所を求め、本来原子力発電所の排気口であるべき箇所まで侵入する。

異常を検知した監視システムはシャッターを閉鎖した。だがそれはプラントの異常なまでの温度上昇を招いた。

監視システムは混乱する。本来なら適切な指示を出すはずの人間は最低限の員数を残して避難しており処置は遅れに遅れていた。監視システムは堂々巡りの末、基本ルーチンに舞い戻り、さっき閉じたシャッターを開放してしまった。

再びなだれ込む濁流。水位はさっきよりも上昇していた。

ダクトから侵入した水が電気回路をショートさせるまでさほど時間はかからなかった。

警報が鳴ってはじめて少数の管理者は事態がとめどもなく悪化していることに気がついた。

「二次冷却ポンプが停止」

「予備電源に切り替える」

「切り替え完了。冷却ポンプ再起動中……温度上昇が停まりません。緊急停止装置が作動します」

「待て、フル稼働中だぞ、急に止めるな！」

技術者の叫びは通じなかった。広大なオペレーションルームで彼に状況を告げていたのはコンピューターだった。

「緊急停止装置が作動しました。制御棒は炉心へ挿入されました」合成された女声が平坦に彼に告げた。技術者は冷却系の圧力と温度を示す画面に釘付けになる。異様な振動がどこからか伝わってきた。炉の反応停止が蒸気発生器に急激な圧力変動を呼び起こしたの

だった。管内を伝わる脈動が音とメーターの両方に表れていた。

もし、この振動が配管の弱い部分に過剰な応力をかけたのなら……

男の胸を不気味な予感がよぎる。

配管は破れ、そこから冷却水が、汚染された水が漏れ出すだろう。もしそうなれば……。

しかし、彼の不安は杞憂に終わった。振動は徐々に収まり、十数秒後には突然に止んだ。

安堵する技術者。だが、彼は自分が災厄の引き金を引いたことを知った。

炉は停止した。つまりそれは、この街を水没から救っていた排水施設を動かしていた電力が途絶えたことを意味するのだ。

彼にはどこからか濁流の音が聞こえたような気がした。それは次第に大きくなってくるような気さえしていた。

金庫室へ流れ込む水量は次第に増えてくるようだった。最初は排水口へ消えていた水がゆっくりとコンクリート床の上に広がっていた。

「ケニー。まずいぜ。このままじゃ溺れちまう」

黙れ。ケニーはカミンスキーをどやしつけた。ここまでたどり着いたんだ。絶対に諦めるものか。

「あんたはそう言うがね、どうするんだ《アニウス・デイ》はもう動かないし、あつちは完璧な火器配置で俺たちを包囲している」

「それがどうした。ジャックが人質を取ってるんだぞ。4対3なんだぞ」

「いや、3対3だ。ジャックは身動きがとれない。ケニー、あんたはもつと頭がいいと思ってたよ」コンテナに腰を下ろして彼らのやりとりを聞いていたトキタが苦笑する。

「なんとか脱出する方法を考えるべきだ」彼はゆっくりと言った。

「さもないと、撃たれて死ぬか溺れて死ぬかの二者択一の道しかない」

「トリスアギオンが盗みをするなんて」アンナが男をにらみあげた。

「それとも、トリスアギオンを装った強盗なの？」

「真正正銘の隊員だ」

「最低」

「頼むから自分が持ち合わせていない美德を他人に期待しないでくれ。お嬢さん」ジャックは苦笑する。アンナはそっぽを向いた。

「あの爺さん、がんばるな」

彼はカイルを見て不意に言った。老人は撃たれた太股をハンカチで縛っただけの応急処置でそのまま伏せ、こつちをじつと狙っていた。おかげで彼はここから身動きがとれない。人質を取ったのか、それとも取られたのか判断に苦しむところだった。

「そうよ。あの人はね、ベトナム戦争の勇者よ」

「あの戦争に勇者がいたとは驚きだな」

「いるわ」アンナはまっすぐ男を見上げて言った。「まず、生き延びたこと。それだけでも価値があるわ」

ジャックは肩をすくめる。

「それにしても、そのベトナムの勇者と銀行勤めのOLとの接点が分からんな」

女は眉をひそめる。

「どうしてわたしがここに勤めてると思ったの？」

「銃を扱うために爪は切つてあるが、手入れはきちんとしている。そしてこの様子に詳しそうだ。君がOLで、この銀行に関係していると思うのは自然だろう？」

「……そうね。簡単な推理かも」

「ああ、で、あんたたちとあの老人との関係は？」

「彼はここの市警の警部。いえ、警部だったわ。麻薬カルテルが

売り上げをここでマネーロンダリングしていることを突き止めたの。だけど立件できなくて……」

「それならいつそ奪ってしまえ。と」

「そうよ。昨今のインフレで年金生活に不安が出たんですって」

「そしてターゲットの銀行に勤める女を誘った」

「ええ」

「……どうしてまた、そんな計画に乗ったんだ？」ジャックには分からなかった。女の外見も口調もまるで犯罪とは縁がないように見えた。

「すごく簡単な理由よ」アンナは唇をゆがめた。

「ただ、お金が欲しかったの。もっともっと欲しかったの。どう？簡単でしょ？」

ああ、ジャックはうなずいた。彼女の動機は同意はできないが理解はできた。

「あんたこそどうして？」

「別に金が欲しかったわけじゃない。刑務所と仮釈放の繰り返しから脱出したかったただけだ」

「そうなの」

「いまじゃ後悔してる。なんにも変わらなかった」

ふっとアンナは笑う。

「この会話、犯罪者同士でやるものじゃないわね」

「まったくだ」ジャックは笑った。だが、彼女に突きつけている銃口は揺るぎもしない。

ロビーに流れ込む泥流はしだいに水位を増していく。しかし、金庫破りたちは膠着状態のまま睨み合いを続けていた。

一刻もはやく発電プラントを再起動する必要があった。さもなければ街が沈んでしまう。

通常の5分の1まで減った管理要員は死にものぐるいで復旧を進

めていた。会社は避難した社員を呼び集めようとしていたがとても間に合いそうになかった。

1分1秒が貴重だった。

熟練技師たちは驚くべき速度で復旧作業を進めていた。しかしそれは、いくつもの規則違反を犯し、さらに数ヶ所の安全装置を遮断する必要があった。その結果、通常の条件では起きないはずの現象がいくつも発生した。

緊急炉心停止システムが使用不能になっていたこともその一つだったし、普段なら行わずの配管のチェックもなおざりで、細管の接合部のいくつかが振動でガタがきていたことも見逃されていた。さらに、二次冷却水の一部が分解して水素ガスが発生していることも誰も気がつかなかった。

これらは普段ならどれも起こるはずのない不具合で、もし起こったとしても即座に見えされるはずの問題であった。

その微細なトラブルは炉心の制御棒の半数を引き出し、熱せられた数百気圧の軽水が一時冷却系を循環しはじめたときに一気に顕在化する。

管内で発生した水素が毛細管の継ぎ目から漏れ、引火して小爆発を起こした。

その爆発は一時冷却配管の一部にダメージを与え、そこから猛烈な勢いで蒸気が漏れる。高圧の蒸気は大気圧の中で爆発的に膨張する。隔壁が一瞬のうちに消し飛んだ。

プラント全体が大きく揺れた。全ての明かりがふつつりと消え、数秒後に予備電源へと切り替わる。サイレンがようやく鳴り始めた。

「水蒸気爆発?!」

明滅するランプと警告音で満ちあふれたオペレーションルームは恐慌に陥っていた。

「緊急停止!」誰かが叫び、スイッチを殴りつけた。

制御棒は下りてゆかなかった。炉は反応を継続していた。

「止まれ、止まれ、停まってくれ……」

男は何度も、何度もスイッチを殴りつける。だが、なにも起こらない。男の肩がごとりと落ちた。

「警告。一次冷却水の水位が下がり続けています。速やかに運転を停止してください。警告。一次冷却水の水位が……」合成音は彼らの努力をあざ笑うかのようだった。

やがて技術者の会話は絶叫に近づいていく。

「冷却材が喪失する」

「分かっている。そんなことは分かっている」

「ECCS（緊急炉心冷却システム）を作動！炉に注水するんだ」「了解」

誰かが保護ガラスを叩き割ってボタンを押す。即座に失われていく軽水の代わりに水が炉へ注ぎ込まれた。ECCSは正常に機能したのだ。原子炉が空焚きされる恐れはなくなったが、注水された水は破断した配管から施設内に轟音をあげて流れだす。

その冷却水は当然強い放射線を帯びていた。監視装置が放射能漏れを警告しはじめた。

それはプラント内の全てのものへの死刑宣告だった。

サイレンが鳴り響く中、もはやだれも声を発するものはいない。

「なぜ今さら軽水炉なんだ。それもこんな旧式の」

原発事故の第一報に凍りつくトリシアギオンの洪水対策指揮所の中で、任務管理官の皮肉な声が響きわたった。

それが質問であることに、それも自分に向けてのものだということに気がついた技術員は一瞬へどもしてから早口で答えた。

「……確か、州の環境条例でこの種のプラントは相当な実績を積んだものしか認可されなかったはずですよ。ですから、軽水炉のなかでもいささか時代遅れの型を使わざるをえなかったのでしょうか」

「融合炉だってあるだろう。それがだめなら高温ガス炉とか」

「高温ガス炉は熱交換機のトラブルといまだに縁が切れませんか

らね。融合炉だって中性子をあつかう関係で設備が放射能を帯びてきます。電力会社が宣伝するほど安全ってわけじゃありませんよ」

「……この世界はまだ、樂園にはほど遠いということか」

OMはそうつぶやいて口元をゆがめた。それから自分を注視する隊員たちに向かって声を張り上げる。

「話を簡単にしよう。地下埋没式の軽水炉が冷却水流出事故を起こした。中にはまだ20人の人間がいる。外は大洪水で、国際原子力委員会の助けも、アメリカ国家安全局の横やりもない。ただこっちも人手がない。現場に駆けつけられそうなトリスアギオンのチームは2つしかなく、どっちも今のところ連絡が取れない」

OMはぐるりと周囲を見渡した。誰もがひどく真剣な表情を浮かべていた。

「さあ、我々はどうすればいい？意見をくれ。15分だ」

彼は口を閉じて腕を組んだ。次の瞬間、周囲は議論で沸騰した。

「とにかく蓋をするんだ。地下埋没式だから蓋をすれば廃棄物が漏れることはないだろう」

「馬鹿野郎！中の人間はどうするんだよ」

「もちろん避難したあとに蓋をするにきまつてるだろ！」

「現状で最下層から人間を救助するのは難しい。いや……不可能だ」

「駄目よ。蓋をするだけじゃ。炉は動いているのよ。緊急注水した冷却水だってじきに沸騰しはじめるわ」

「やはり反応を停止させなきゃ駄目か……。なんとしてでも制御棒を炉心へ挿入しないといけないのか」

「どうやって？炉心付近は放射線と熱で地獄みたいになってるはずだ」

「ケニーのチームと連絡は取れたか？」議論の様子を机に座って観察していたOMが不意に振り返って通信士に尋ねた。

「いいえ。と彼女。」

「呼び出しを続けてくれ」

「だけど……あの人たち、任務を放棄したんじゃないんですか？」

「いいや。連絡が取れないだけだ」

「でも……」

「呼び続けてくれ。彼らは応えるだろう」

女にOMは断言する。

男の確信に満ちた態度に通信士は首を傾げながらもインカムのスィッチを入れた。

「レベル4緊急事態発生。第一級優先順位で応答願います。誰か聞いていますか？レベル4緊急事態……」

洪水のどさくさに紛れてなにかをやるうとしている彼らが、なぜ戻ってくるとわたしは考えているのだろうか？

OMは自らに問いかけた。

それはただの願望にすぎないのではないか？

いや違う。

私には分かったのだ。彼らの経歴を知った瞬間に確信したのだ。

彼らがトリスアギオン隊員として戻ってくることを。

理由は自分自身にも分からなかった。ただ、それは確固とした結論として男の中に存在した。

OMは腕を組み直し、サングラスに覆われた目を閉じる。

スタッフたちの議論はまだ続いていた。

浸水は突然その水かさを増した。おかげでエレベーターに流れ込む水量は一気に増えた。

「ケニー。あんた、やつらと交渉するつもりなんだろ？」カミンスキーがひどく心配そうな声で尋ねる。

「いや、ぶち殺してやる。皆殺しにしてやる。女どもめ、おれをコケにしやがって」

ケニーは明らかに度を失っていた。彼の呼吸は荒く、額に汗が浮

いては流れ落ちていた。カミンスキーは初めて不安を感じた、ケニ一の姿は自分をこの計画に引き込んだときの冷静な悪党らしい態度とは全く無縁だった。

こいつはひょっとして、荒事をこなしたことがないんじゃないのか？

カミンスキーはふと思った。そのとき、彼の腰につけてある通信機の受信ランプが明滅していた。

無意識にそれに手を伸ばす。

「おい、やめろ」ケニーがかすれた声で静止した。だが、カミンスキーはそれを無視する。さっきのケニーの態度を見て以来、彼はこの男に対する畏怖を失っていた。

「ジャック。無線を聞いてみる」

後ろからトキタの低い声が聞こえてきた。ジャックはショットガンをアンナへ向けたまま慎重にスイッチを入れた。

「……態発生。第一級優先順位で応答願います。《ケニー・ニコラウスチーム》誰か聞いていますか？レベル4緊急事態発生。第一級……」

「レベル4ってなに？」

尋ねたのはアンナだった。少し眉をしかめて記憶をまさぐるジャック。いまだかつて2以上のレベルの災害を体験したことはなかった。

「……確か、10万人規模の死傷者が出る可能性がある災害だ」

「何が起こったの？」

「知るものか」

つぶやいたジャックは通信機を見つめた。スピーカーからはかすれた声がまだ呼びかけを続けていた。

「おい、なにしてる！」ケニーが叫んだ。銃を振り回している。

「レベル4だ。尋常じゃない」

「お前、自分がなにをしているのか分かっているのか？この馬鹿野

郎。やめろ」

彼はひとつため息をつくと通信機をにぎる。ケニーが彼に銃を向けた。

「よせ」カミンスキーがその手を押さえた。「奴等は俺たちの居場所も、なにをしてくしたかも知ってる」

「こちらジャック・シモンズ。明瞭に受信」

「……ジャック・シモンズ？ケニー・ニコラウスチームの？」

「そう。そうだよ」

「信じ……られない」

「ちよつと……立て込んでね。それで返事が遅れた」

銃を突きつけられているにもかかわらずアンナがくすりと笑った。スピーカーの向こうでこそそこそと音がしたあと、オペレーターの甘い女声に代わってしわがれた声が聞こえてきた。

「任務管理官だ。そちらの状況を知らせてくれ」

ジャックは後ろをちらりと見る。

トキタは柱の陰に伏せたまま通信機を耳に押し当てていた。

カミンスキーとケニーの姿はこっちから見えなかった。

「移動中に、あー。事故が発生。隊員3名が死亡。現在、ケニー隊長以下4名が健在」

「了解。では状況を説明する」

相手はこのチームに何が起こったのかさえ聞こうとはしない。そのこと自体が彼らの犯罪が露見していることを物語っていた。

ジャックは通信機のポリウムを上げ、ほかの人間にも聞こえるようにした。

「諸君のいる都市に設置されている原子力発電所に事故が発生した。冷却管が破れ、汚染された一次冷却水が坑内にあふれ続けている」

「ああ、神様」アンナがあえいだ。

「緊急注水して小康状態を保っているがあくまでも一時的なものだ。このまま放置すると最悪の場合は炉心融解する。どろどろに説

けた放射性物質がまき散らされるわけだ」

「一体……どうしろと？俺たちはプロじゃないぜ」

「対策案はこうだ。何らかの手段を使って炉心へ接近。ロックがかかってしまっている制御棒を挿入。炉の反応を停止させたのち、プラントを封印して冷却水が外へ漏れ出さないように処理する」

誰もが黙りこくっていた。トリスアギオン隊員だけでなく、ジュリアたちも凍りついていた。だが、通信機の向こうの声は平静そのものだった。

「諸君には制御棒の挿入作業をやってもらいたい。プラント内にもまだ生存者がいるが、彼らは炉心へは近づけない」

「具体的には？」なぜ自分がこんな質問をしているのかジャックは理解できなかった。少なくとも自分は裏切り者のはずではなかったのか？

それなのに、相手は全くその事実に触れず、自分もまた触れようとしな。司令部が彼らの裏切りを知っているのは確実だった。

「《プラエファティオ》で格納容器内へ入り、油圧で支持されている制御棒集合体を炉心へ降ろしてくれたらいい」

「放射能は？」

「施設内はかなり汚染されている。保護服を着ていても冷却系区画に1時間いれば、年間許容量の1・5倍近い放射線を浴びることになる。コクピット周りを保護した《プラエファティオ》の中にいれば多少はましになる」

「炉心付近の汚染は？」

「むしろ格納容器内の方が汚染は少ないだろう。圧力容器に損傷はないらしいから。一次冷却水が格納容器内に溜まっていければ話は別だが」

どっちもどっちだ。ジャックはつぶやいた。いや、どっちもごめんだ。そう言うべきだ。今すぐにでも。

「状況は理解した。協議するので5分待ってくれ」ケニーが通信に不意に割り込んだ。いつもの冷静さを取り戻していた。

「了解」そして無線は切れる。それからしばらくの間ホール内の誰も口をきかなかった。

沈黙を破ったのはケニーだった。

「休戦しよう」ひどく明るい口調でジュリアたちに提案した。「金塊は山分けた。おい、ジャック、無粋なものは下ろせ」

ジャックはアンナに突きつけていたショットガンを下ろした。カイルとジュリアがなにか話し合っている。

「行きな」ジャックはアンナに軽くうなずいた。女は仲間の方へ小走りに駆けていく。

「いいわ。それで妥協しましょう」ジュリアが言った。

「そうでなくちゃ」ケニーは満面の笑みを浮かべていた。「おい、金塊をハマーに積み込むぞ」

「ケニー。済まないがハマーは俺が使う。金塊は別のもので運んでくれ」ジャックは穏やかに言った。

「なんだって？」

ジャックはため息をついた。

「あれは『プラエファティオ』と司令部の中継器として使うんだから、あんたに乗っていかれちゃ困るんだ」

「どういうことだ」

「ケニー。やっぱりあんた、頭悪いな」カミンスキーが言った。

「ジャックは発電所に行くつもりなのさ」

「……お前、なにを考えてる？」ケニーは大腿にジャックへ近づいてきた。「分かっているのか？俺たちは3人殺してるんだぞ。もう、後戻りできないんだぞ。え？分かっているのか？」

「とにかくあんたはほかの乗り物を探してくれ。時間がない」

ジャックがそう宣言した途端、ケニーの表情が豹変した。歯をむき出し、呼吸が荒くなる。

「お前、わたしの命令が聞けないのか？」

「なぜ俺があんたの言うことをきかなくちゃいけない？」ジャックはケニーをにらみつけた。その表情には笑みがあつた。「俺はト

リスアギオンだが、あんたはただの泥棒だ。なぜ俺があんたの言うことをきかなくちゃいけない？」

憤怒の表情でケニーが拳銃を抜いた。だがそれはジャックのショットガンの台尻で簡単にはねのけられた。拳銃はどこかへ飛んでいき、泥水の中へ落ちた。

「お前だつて犯罪者じゃないか。なにをきれい事言つてやがる」

「あんたに言われる筋合いはない。それに……」

ジャックはショットガンを床に落とした。ぽちゃんと水しぶきが上がった。次に拳を握りしめ、強烈なフックをケニーへ見舞う。一撃でケニーは倒れた。ショットガンを捨てたときとは比べものにならないほどの水しぶきが上がった。

「……前からあんたが気に入らなかつた」

ジャックは倒れた男に背を向けて歩き始めた。

すぐあとからざぶざぶと水をかき分けながら歩く音が聞こえた。振り返る。

トキタとカミンスキーがいた。

「私もあいつに愛想が尽きた」トキタが言った。

「金塊もいいが、それを使う世界がメチャクチャになつちまつたら意味がない」カミンスキーは肩をすくめた。

「そうか」ジャックはうなずいた。それからジュリアたちへ振り向いた。

「できるだけ急いで、できるだけ遠くへ逃げてくれ」

そう言い捨てて数歩歩き、彼はまた振り返った。

「もしよければ、そこに倒れてる男も連れていってくれ」

顎でケニーを指してから、男は大腿に口ビーから去った。

その姿をアンナはじつと見ていた。

そして、考え続けていた。

……なにが彼らに決意させたのだろう？なぜ、彼らは考えを変えたのだろう？

その答えを知るためには、自分自身も変わる必要があることに彼

女は気がついていていた。

ガイガーカウンターが不気味なビートを刻んでいた。

サーチライトに照らされる隔壁は不気味に揺らめいて、ここが最先端の技術を導入して作られた設備とは思えない。

「ジャック、ロックを解除するぞ」サーチライトの中に奇怪なシルエットが現れてスイッチを押す。放射能防護服を着たトキタだった。彼らはくじ引きで分担を決めたのだった。

ブザーとともにロックボルトが外れる。ジャックは『プラエファティオ』のマシンアームで扉のリングを摘むと引っ張る。これは彼らが3人のトリスアギオン隊員を間接的に殺したときに置き去りにした機体だった。

ぎりぎりと言を立てながら緑色のドアは開いていく。

「くそ、なんで原発なんて作るんだ」

「本気で言ってるんじゃないかな」トキタは楽しそうだった。

「もしすべての電力を火力に頼っていたら、海水面の上昇はこんなもんじゃすまない。それに、石油だって枯渇しかかっている」

「分かっている。だけどいくら便利でもこんな大災害につながるものを作るのはどこか間違っていると思わんか？」

「思うよ。でも、ひよつとしたらこの世界に『本当に正しい答』」

「ってものは存在しないのかもしれないぜ。我々はひたすらどこかでボロを出しながらやっていくしかないのかもな」

「それって楽観主義なのか？それとも悲観主義？」

「ただの現実主義さ」

扉が解放された。その途端ガイガーカウンターのノイズが急激に大きくなった。

「やっぱり漏れてやがる」ジャックは舌打ちした。

「レベルは？」

「1グレイ。被曝したら急性放射線障害まちがいなし。トキタ。」

お前はここに残れ。ここから先は大丈夫だ」

「……すまない。本当に大丈夫か？」

「ああ、ここから先はもともと無人のロボットがパトロールするようになっている。《プラエファティオ》も問題なく入れるだろう」

「すまない。本当に」

「気にするな。それよりも制御室で倒れている連中の面倒をみてやってくれ」

「そうする。じゃあな」

トキタは足早に立ち去った。汚染された一次冷却水は逃げ遅れた20人のうち半数を死に追いやり、残りの半分の肉体にも見えない損傷を与えていたのだった。

メンテナンスの際に使用する鉛の保護プレートを手当たり次第に取り付けて放射線対策を施した《プラエファティオ》はひどく重々しい歩調で通路へ足を踏み入れた。

分厚いコンクリートで固められた格納容器のメンテナンスハッチは《プラエファティオ》の右腕に取り付けられているインターフェイスカプラーを使えばすぐだった。高さ8メートルにもなる燃料容器を出し入れできるそのメンテナンスハッチはとてつもなく巨大だった。

油圧でゆっくりと開いた扉をくぐり、ジャックはそつと格納容器内へロボットを進めた。彼の足下には体育館なみに巨大なスペースが広がり、その中心にステンレス製の燃料容器が鎮座して無数の補機が接続されていた。その光景はまるで古代の王墓を連想させた。

「ジャックからトリシアギオン・レスキュー・コントロールへ」

「コントロール、受信しました」

ジャックへの応答にはタイムラグもノイズもなかった。《プラエファティオ》の背中に取り付けられたドラムがその秘密だった。そこから地上のハンマーまで延びている光ケーブルによってたとえ地下でも、入り組んだ土地であっても隊員は司令部と連絡が取れるのだ

った。

「いま、機載のカメラで燃料容器とその周辺を撮影している。それが制御棒支持体なのか教えてくれ」

「了解。いまワシントンのオブザーバーに見てもらっています。もう少し待ってください」

十数秒後に回答があった。その男はエンジニアに特有の自信にあふれた口調で装置のありかと基本的な構造を伝えた。

「分かった。燃料容器の上にくっついていてるやつがそれだな」

「そうだ。油圧のシリンダーで普段は支持体ごと持ち上げている」「下ろすときは？」

「シリンダー基部にオイル抜きボルトがある。そいつをゆるめれば作動液が抜け、制御棒は自重で落ちるはずだ」

「了解。なんとかやってみる」そこまで言ったとき、ジャックはあることに気がついた。

彼のいるメンテナンス口からはごく細い通路が燃料容器上部へつながっているだけで、とてもロボットがその上を歩けるようには見えないのだった。

つまりジャックは、放射能に汚染された空間を防護服だけで進まなければならぬのだった。

「ジャックからコントロールへ」

「コントロール受信」

「いま気がついたんだが、ここから燃料容器まではロボットを降りて徒歩で行かなきゃだめなんだよな……」

「ええ、それで？」

「ここの放射線量、半数致死線量にちょっと足りないくらいなんだ。ロボットを降りたらたぶんやられる」

彼はさらりと口にした。つまり、この環境にさらされると約5割の人間が1ヶ月以内に死ぬほどの放射線がここにあふれているのだ。もちろん生き残った5割の人間も健康に著しい障害を受け、ほとんどが寿命を全うすることはできない。

相手は黙り込み、通信機からはかすかなノイズしか聞こえなかった。

「ロボットではどうしても行けないか？」任務管理官が尋ねた。

「無理です」答えたのはワシントンにいるオブザーバーだった。

「そのメンテナンス通路にはとてもそんな強度はありません。重量物は天井のクレーンを使いますから、そんなに強度を必要としないのです」

「では、そのクレーンでロボットを引き上げて」

「無理だな」OMヘジャックは異議を唱えた。「そのクレーンはいま、燃料容器の上で停まってる。固定用の鎖もない。炉心のメンテナンスは基本的に人間がやることになってるみたいだ」

「そうか」OMは珍しく口ごもった。噂によると氷のような冷徹な人物らしいが、さすがに彼でも自殺の強要をするつもりはないようだった。

ジャックは必死で思考を巡らせた。

制御棒を下ろしたければ、ロボットを降りるしかないらしい。だが、ロボットの外板による遮蔽がなくなれば……何らかの障害を受けるのは確実だ。

この姿も見えなければ、音も聞こえない「敵」にジャックは初めて恐怖した。

こんな目に見えないやつよりも、銃撃戦の方がまだましだったな。畜生、どうして俺が、こんな所でこんな酷い決断を下さなくつちやいけないんだ。

理由は分かっていた。

……なぜならば、俺はトリスアギオンだからだ。

……なぜならば、いまここでなんとかできるのは、俺しかないからだ。

……刑務所と仮釈放が人生のすべてになってしまうのは我慢できないからだ。

どれもとても単純で子供じみた理由だった。どの理由にも明快な

反対意見がつけられそうだった。
だが、男の心は決まっていた。
深呼吸のあと、彼はハッチを開けた。

「彼は証明する必要があったのだろう」
無機質までに白い壁にもたれた任務管理官は医師へ話しかけた。
「自分が誰かのためになにかできることを。自分の人生が無意味なものでないことを」

「あるいは自分が何者であるかを」

医師がOMの言葉を受けた。OMは微笑んだ。

「彼はトリスアギオンだった」

「3人殺しましたよ。間接的にだが」

「ああ、それは間違いない。それは弁解の余地がない」

「それでも貴方は彼を英雄だとおっしゃる？」

男は窓の外を見た。空は晴れ、1ヶ月前の大洪水が嘘のようだった。

「償いはした。と思いたい」

「貴方らしからぬ言い分ですね」

医師は苦笑すると煙草をくわえた。

「この世界には善人もいれば悪党もいて、その境界がひどく曖昧な人間もいる。わたしはそう考えている。善悪だけで物事を判断するのは危険だ」

「この世界は楽園ではありませんからね」

「いまでも、たぶんこれからもずっとそうだろう」OMは断言し、そして続けた。

「先生、それがトリスアギオンの存在する理由ですよ」

男は軽く会釈するとその場を立ち去る。

廊下から見える西海岸の空はひどく蒼かった。

Mission 04:「樂園」(後書き)

「組織の中の悪の存在」をハリウッド映画風にアレンジして書き始めたお話が、いつの間にか奇妙な展開になってしまいました。

Mission05:「幻獣」(前書き)

「ボーイ・ミーツ・ガール」を目指してみました。
そして、ラストエピソードということでこれまで封印していた「戦
うトリスアギオン」を書いてみました。

Mission05:「幻獣」

Mission05:「幻獣」

その男の人は、なんだか目の前の光景が信じられないみたいだった。

っていつか、ふいに夢から覚めて驚いているみたいな感じだった。笑顔も、身のこなしもどこかぎくしゃくしていた。

まるでロボットみたいだ。

あたしはそう思った。でもすぐに考え直す。

違う違う。ロボットはもつとスムーズに動くもの。この人の動き方は・・・そう、ずっと昔の映画に出てきた、そう、「スター・ウォーズ」の金ピカのあれみたいだ。

その隣に女の人がそつとならんだ。男の人の動きはさらにぎくしゃくした。拍手と歓声、それからため息がどこからか聞こえてきた。確かにその人はきれいだった。ホントにきれいだった。

ベールから透けて見える紅茶色のショートカットも素敵で、ちょっと古風なデザインのウエディングドレスを着たそのスタイルは完璧だった。

おなかの中に赤ちゃんがいるとはとても思えない。

彼女はにつこりとほほえんで、幸せそうに男の人に頬を寄せた。その仕草には迷いもなんにもなかった。拍手がさらに大きくなり、男の人はさらに緊張する。それを微笑ましげに花嫁が見上げ、二人はじつと見つめ合う。

なんだか、夢のような光景だった。ドラマのワンシーンみたいだった。なんて見てもため息が出てしまう。

そして、合唱隊の聖歌、髭もじゃな牧師様の挨拶、ふたりの誓い、

指輪の交換。

なんとも見ているのに、順番があやふやになるのはこのあとにあるシーンのせいだろう。

そう、花婿はまるでそれが最初のキスみたいにぎこちなかった。少なくとも赤ちゃんができるんだから、いままでキスをしたことがないなんてあり得ないんだけど、おずおずと花嫁のベールを持ち上げる花婿の手は震えてさえいた。

だけど、情熱的なキスだった。すごく、感情がこもっていた。

少なくともあたしにはそう見えた。

それから、とても無粋な電子音。ぎよっとする花婿。息をのむ花嫁。

電子音はひとつではなかった。少なくとも10以上、いや20以上は鳴っていた。

タキシードの裾をまくり、ベルトにつけたページャー（ポケットベル）の画面を見る花婿、その付き人も同じ仕草をしている。二人とも同時に顔をしかめた。あちこちで不平や不満の声が上がっていた。

「よりによって・・・」

「ガード。花婿は残ってる」

「そういうわけにはいかない。レベル5だ。『すべての受信者は可及的速やかに出頭せよ』って」

「メッセージなんてほっとけ。今日はお前にとって特別な日なんだ」

「駄目だ。行かなきゃ」

そこで花婿は気がつく。自分をじっと見つめている不安げな瞳に。「大丈夫。すぐ戻るよ」優しく微笑み、そっと相手の頬に指を触れる。花嫁は無言のままだった。

「ごめん」

そう言っただけで花婿は花嫁を抱き寄せてキスをした。さっきまでのおどとした雰囲気は消え失せていた。それから大股に走り去る。花

嫁は唇に手をやったままその後ろ姿を見送った。

そこで画面は真っ暗になった。

あたしは椅子の上で膝を抱え、ポータブルプレイヤーの液晶画面を見つめていた。

ため息をついてスイッチを切る。かちやかちやとモーターがうな
ってデイスクを吐き出した。

どうしてまた見ちゃったんだろう。

自己嫌悪と自己憐憫に浸りながらも一度ため息をつく。知らない
うちに紅茶色の前髪をもてあそんでいることにあたしは気がつい
た。

そう。

あたしは知っている。

その日出動した国際救助隊・トリスアギオンの隊員はたくさんの
犠牲者を出したことを。

その中にあの花婿もいたことも。

つまりこれが、彼の最後の映像ってことを。

つまりこれが、花嫁のおなかの中にいたあたしにとって、パパの
唯一で最後の映像になるってことに。

あたしは目をこすってから、ぎゅっと膝を抱えなおす。

ポリエステルの真っ白なつなぎ。

その上は完全気密のビニールスーツ。

オーバーシューズとズボンの継ぎ目にはしっかり巻かれたビニ
ルテープ。

もちろん頭にはる過装置付きのヘルメット。

装備は完璧だった。

にもかかわらず、私はいつも不安だった。滅菌灯とエアシャワーを浴び、エアロックを抜けてここにくるたびに私は震えてしまうのだ。

理由は分かっていた。

ここが戦場だからだ。ここが人類最後の砦だからだ。

ここでの手探りの作業と乱暴な推理の結果が数千の、あるいは数万の人命に関わるからだ。

私は気楽に生きたかった。ただの研究者として生きていたかった。だが、なぜか私はここにいた。政府管轄のCDC（疾病対策センター）職員として。その防疫チームの一員として。理由はいまだに分からない。少なくとも、ウイルス学の最先端にいたいという願望だけでないことは確かだった。

分厚いガラスの向こうで同僚が手を振った。私は少し足を速める。

「チャン。本日のお客さんだ」

ヤンコビッチがまんまるのヘルメットの中で満面の笑みを浮かべていた。この男はいつもそうだ。悪趣味なほどに……事実悪趣味なのだが……

いかなるときでも陽気でテンションが高いのだ。

「患者は？」

私はワイヤレスマイクに並列につながれたレコーダーのスイッチを入れた。

「動物商。ただし密輸入の南米産動物専門らしい。年は37」

プエルト・リコ系の男は全身から汗をしたたらせながら眠っていた。彼は人工透析機につながれ、呼吸器の助けを必要としているにもかかわらずその表情はおだやかだった。

ただし、体力はかなり消耗しているようだ。以前は肥満で張りつめていたらしい皮膚はたるみ、黄色く変色していた。

「病状は？」

「運動障害、痙攣、呼吸困難、高熱、意識障害」

「流行性脳炎？」ここに運び込まれる患者ならそっちだろう。蚊や蠅が媒介するウイルス性のものでなければ、ここへはやってこない。

「ああ。だが、既知の抗体反応が出てないし、ウイルスの分離もできなかった。『新顔』だよ」

私は自分の眉がひそめられていくのが分かった。

「発病したのは？」

「結構早い。今朝だ」

「それでこのありさま？」確かに早い。だが、早すぎる。別の意味だが。「よく半日でここへ運ばれてきたな」患者がここへ運ばれてくる、あるいは疾病報告があるのは事態がある程度悪化してから、すなわち一般の医師たちの手に負えなくなってからなのだ。それが半日ということは・・・。

「彼に感染させたと思われる人間が今朝死んだんだ。彼はその一つの血の混じった嘔吐物を浴び、その3日後に発症した」

確かにこれは我々の仕事だ。

「ほかに感染者は？」

「今のところはいない」ヤンコビッチの声にはわずかながら安堵があった。「友人も、家族も発病していない。どうやらこのウイルスは空気感染しないらしいな」

私もいつのまにかため息をついていた。空気感染する致死性ウイルスなど防疫関係者にとつては悪夢のような存在だからだ。

「ただ、奇妙なことがある」彼の声が低くなった。「患者の症状だが、正確には脳炎ではない。彼が犯されているのは高熱ではなく神経毒で、その毒素は彼自身の副腎で生成され続けている。いま現在も」

私はこの患者が人工透析を必要としている理由をようやく理解した。ヤンコビッチは続ける。

「ウイルスが副腎髄質をどう作り替えたかまるで不明だけど、ホ

ルモン分泌を司るはずの器官が猛烈な勢いで脳内物質に似た構造の毒素を作り出している。いま我々のできる治療は人工透析と視床下部のブロックくらいだろうな」

そうなのだ。「敵」の正体はまだ不明で、戦いはいま始まったばかりなのだ。た。

再び私は震えはじめた。

それは2ヶ月前の出来事だった。

僕が《教授》の部屋に着くと、そこには先客がいた。

紅茶色の髪を三つ編みにした少女、サーシャ・タチアナだった。マリンブルーのワンピースを着た彼女は、部屋の隅の椅子に両脚をぶらぶらさせながら腰掛けていた。教室にいるときとは雰囲気がちがう。僕はそう思った。いまの彼女はちよつと幼い感じがする。それが悪いわけじゃないけれど。

「やあ、パトリック。わざわざありがとう」《教授》はそう言つて本やノートや得体の知れない小物が山積みになっている机から立ち上がった。彼が僕を「パット」と呼ばないのが嬉しかった。僕がクラスの皆から集めたレポートの入ったディスクを差し出すと、《教授》は机越しに手を伸ばしてそれを受け取った。

「飛行機の中で見るよ。採点結果は戻ってきてからだから、3ヶ月後かな」

彼は微笑んだ。この人の様子も教室にいるときとは違っていた。どっちかって言うと、今のほうが生き生きしているように思う。

「今度はどこに行くんですか？先生」《教授》と僕は彼を呼ばない。それは教室やクラブ、講師室でささやかれるウソの肩書きだからだ。

ターナー・レイドロー先生は教授じゃない。博士号論文を書き続けている学生のひとりにすぎない。専攻は文化人類学。教えているのは歴史、そしてときには数学。場合によっては生徒相手のカウンセラーにもなる。

つまり他の先生たちにとって、ターナー先生は雑用を押しつけることのできる便利な人だったのだ。先生たちの彼に対する評価はそんなものだった。だけど僕の評価は全然違った。たぶん「おとな」としては失格なのかもしれないけれど、ターナー先生の少し子供じみたところに好感を持ったのだった。授業の合間やカウンセリングのときに声を低めて話してくれる彼の「冒険談」が気に入ったのだった。

ターナー先生は少し考え、積み上げてある本の下にある地図帳を引っぱり出した。電子地図でないのがこの人らしい。

「そう・・・ここだ。ギアナ高地の南側」

「ギアナ高地って？」指された50万分の1地図では、それがどこの国にあるのか分からなかった。それほど大きな高地だった。

「ベネズエラとブラジルの国境にまたがっている高地。一部がフランスの海外県。『失われた世界』の舞台にもなった所ですよね」サーシャが部屋の隅からふいに言った。でもそれは、僕にというより先生に向けての言葉だった。

「『ロスト・ワールド』って南米の島が舞台じゃなかったっけ？」サーシャは少し考え、それからふかくふかくため息をついた。首を数回振る。

「あのねえ。あんたが言ってるのはスピルバーグの映画。あたしが言ってるのは『本当の』やつ！ドイル卿の書いた小説のことよ」
「そ、そうなの？」知らなかった。そんなこと。だいたいドイル卿って誰だろう。

僕のとまどいはお見通しだったに違いない。サーシャはばあか。って顔をしてみせてから、瞬時にそれを笑顔に切り替えてターナー先生の方を向いた。その変わり身の早さに僕はむしろ感心してしまう。

「そうだよ。よく知ってるね」

先生の言葉にサーシャは微笑んでからうつむいた。なんだかクラスでの彼女とは別人みたいだった。

教室での彼女はとにかく飛び抜けていた。成績もルックスも、ありとあらゆる点で。2つ下の学年から飛び級でやってきたはずなのにクラスでいちばん大人びていた。1つ下からやってきた僕がいつもガキあつかいされるのとは大違いだった。

つまり、彼女はクラスの中心人物だった。

だけでも僕は知っていた。彼女はクラスのみんなを、いや、この学校のほとんどすべてを嫌っていることを。

違う。それは正確じゃない。

彼女はみんなを「憎んで」いたのだ。

女の子たちのグループに混じって笑いさざめきながらも一瞬ひどく冷めた表情になる彼女を見たときに、校庭から教室を振り返ると彼女がとても冷ややかに僕たちを眺めていることに気がついたときに、僕はそれを直感的に理解したのだった。

それはひどくショックなことだった。

けれどもっとショックだったのは、それに気がついているのがどうやら僕だけらしいってことだった。他のみんなにとって彼女は完璧なクラスメイトに見えるらしい。その事實は僕をひどく混乱させた。

けっきょく、僕はその二つの事実・・・彼女が決してみんなに好意を抱いているわけでないことと、僕はどうやら「見えないもの」が見えるらしいこと・・・について誰にも話さないことにしたのだった。

「そんな・・・ギアナ高地で何を調査するんです？どれくらいの

間いないんですか？」黙ってしまった僕の代わりにサーシャはたずねる。まるで僕が存在しないような話し方だった。

「比較的新しい遺跡群が見つかったので、その調査だよ。実質的な調査は本格的な雨期が始まるまでだから、だいたい2ヶ月くらいかな」

「その間、先生の代わりはどうなるんですか？」と僕。サーシャはこつちを腹立たしげににらみつけた。

「うーん。正規の授業はミズ・コネリーが代わりにやってくれることになってるけれど、他はお休みだな」

「数学の補習もお休みですか」サーシャは悔しげだ。ここの自習用AIはカリキュラムに忠実すぎて学年相応のことしか教えないので彼女には物足りなく、ターナー先生の補習では、授業についていけない僕の隣で彼女が高度な数学（そう、ガウス平面とかなんとかの）を教わっていたのだった。

「ごめん。そうなるね。しばらくは図書館の教科書で勉強しててくれ」

「つまんないです。あれって例題と解き方しか載ってないし」

このままここにいて会話を聞いているのはなんだか彼女に悪いような気がしはじめた。彼女にとっては僕はいないも同然なのかもしれないけれど。

僕は先生に会釈して立ち去ろうとする。

「ああ、パトリック」先生が僕を呼び止めた。「本を貸してあげる約束だったな。確かその机に・・・サーシャ、君がいま持っているその本だ。それをパトリック君に渡してくれないかな」

「やです。あたしもこれ、読みたいです」

ターナー先生と僕は顔を見合わせた。こんな彼女を見たのは初めてだった。先生はため息をついた。

「サーシャ・・・」

「いいですよ」僕は慌てて言った。「いいです。待てますから。」

サーシャ。それ、読み終わったら貸してよ。ね？」

返事はなかった。彼女は本を抱いたまま椅子を蹴って立ち上がると、僕に肩をぶつけながら猛烈な勢いで部屋を出ていった。ドアが勢いよく閉まり、その音に僕と先生は首をすくめた。

「あんなのは初めてだな」先生は苦笑した。僕もうなずく。

「だけどあまり驚いてないね。パトリックは」

「なんとなく、そうじゃないかなって気がしますから」

「言うじゃないか」先生は椅子に座り直した。興味深げに僕を見る。その表情は「冒険談」を話してくれるときと同じだった。

「だって、そのう」僕は言いよどんだ。

「続けて」

「彼女、見てて分かるんです。みんなを・・・僕たちを・・・嫌ってるって。無理してつきあってるって」先生の表情が深刻なものに変わった。僕は慌てる。

「あ、でも、みんなと喧嘩してるわけじゃないんです。彼女は人気者だし、その、きつと無理してみんなに合わせるんだと・・・でもクラスのみんなが嫌なやつってわけじゃないし、いじめてるわけじゃなくって・・・」

「気がつく子もいるんだな。まあ、ここの生徒なら当然かもしれないか」

支離滅裂になって黙ってしまった僕に先生は静かに言う。僕はなんと答えていいか分からない。彼はすこし考えてから立ち上がり、僕の顔をのぞき込む。コロンといまじゃほとんどだれも吸わない煙草の匂いがした。

「頼みたいことがある」先生は真剣な表情だった。「先生がいない間、サーシャを守ってほしい」

どきんと心臓が跳ね上がった。耳が熱くなった。

「できませんよ！そんなこと」うわずった声はまるで自分のものじゃないみたいだった。

「どうして？」

「だって彼女は頭がいいし、気が強いし、それに僕を嫌ってるし。」

だいたい彼女が守られなきゃならないような状況なんてありえないですよ」

「本当に？」細い先生の目が急に迫力を増したように思えた。

「た、たぶん」たしかに彼女は無理をしているけれど、先生が心配するようにぽつきりいくようには見えなかった。彼女は僕なんかよりもずっと強い子だ。そう感じていた。

「そうだな。先生が心配しすぎなのかもしれない。パトリックがそう見立てているのならそうだろう」

僕は赤面してうつむいた。

「だけど、約束してほしい」先生は一瞬のうちに笑みをうち消した。「もし、彼女になにかあったら守ってほしい」

僕はうなずいた。そうさせるなにかが先生の言葉にはあった。けれども、それだけが理由じゃなかった。

部屋を飛び出していく彼女の瞳に涙が浮かんでいたこともその一つだし、ぶつけた肩がずいぶん華奢なことに気がついたからかもしれない。

そしてなによりも、図書館で膝を抱えてメディアディスクの映像を眺めている彼女の姿を思い出してしまったからかもしれない。

「彼女はここでも特別なケースなんだ」先生の口調はつぶやきに近く、それはほとんど聞き取れなかった。「それに私は彼女に借りがある。とても返せないほどの」僕はただ沈黙していた。

「ようし」自分自身に埋没していたターナー先生は大声を上げた。それはいつもの見知った先生だった。「頼んだぞ。これで心配事がひとつ減った」

彼は手を伸ばす。握手を求めているのだときがつくまでにしばらくかかった。

僕は赤面しながらターナー先生の手を握る。

それはずいぶんごつごつしていて、そして暖かった。

きつと先生にはなにか予感めいたものがあつたのだろう。

先生が南米に旅立って2ヶ月後、そのニュースが飛び込んできたときに僕は最初にそう思った。

そして知る。

僕に果たさなきゃいけない義務ができたことを。

今度は僕が彼女を見守らなきゃいけないのだと。

そう、先生が加わっていた調査隊はプロジェクト完了間際のある日、忽然と姿を消したのだった。なんの前触れもなく。なんの痕跡もなく。

まるで神隠しかなにかにあったように、彼らは消えたのだった。

夜は更けていたが、大気はまだねっとり蒸し暑い。屋外プールを照らす照明の照り返しだけを頼りにわたしは歩いていく。さつきまでは耳障りに騒々しかったピアノの音色も母屋から離れるにつれしだいに哀愁を帯びはじめる。どこからか虫の声が聞こえてきた。おそらくキリギリスの親戚だろうけど、私の聞き慣れたものに比べるとずいぶん威勢がよく、騒音の一步手前と言ったところだ。

「モーガンさん、お待ちせ」

わたしはユーカリの木にもたれて煙草を吸っていた男に声をかけた。彼は慌てて身を起こし煙草をもみ消した。その間にわたしは駐車してあったGMのドアを開けてそれに乗り込み、深く長いため息をつく。メタノールの匂いがかすかにした。

「すまんすまん」男は謝りながらイグニッションを回す。エンジン音は聞こえない。代わりにインバーターの高周波ノイズが聞こえはじめた。柔らかなアラムのあと、モーガンはゆっくりとアクセ

ルを踏む。車はモーター音とともに動き始めた。

「カホ、どうだった」

礼儀正しく門番から挨拶をうけ、車が邸宅から離れるとすぐにモーガンが尋ねてきた。わたしは後部座席でぐつと体を伸ばして大の字になる。イブニングドレスの裾が乱れるのも気にしない。そのまま乱暴にハイヒールを脱いで放り出す。

「こらこら、お嬢様」ルームミラーの中でモーガンの目が笑っていた。

「最っ低。誰も彼もが事態を軽く見過ぎている。そのくせ自分のシマを荒らされるのは嫌がつてるのよ。ま、いつものことだけどね」モーガンは肩をすくめた。彼にはこのような気障なしぐさがよく似合う。あたしは彼の真っ白になった顎髭を見ながら続けた。

「問題はね、とにかく関係者を名乗る人間が多いこと。ベネズエラとブラジルの政府関係者はともかくとして、WHO（世界保健機構）やアメリカのCDC（疾病対策センター）にフランス人までいるのよ」

「それに国際救助隊『トリスアギオン』も」

「そうね」わたしは微笑んだ。「トリスアギオンの人間がいちばん呼びじゃなかったかも」

「カホが偉いさん相手に淑女をやっているところを一度見てみたいもんだな。かしなんでまた、フランスまで出て来るんだ？」

「ここにはまだフランスの植民地・・・じゃなくって海外県・・・があるのよ。だからですって」

「なるほど。で、分かったことは？」

「あると言えばあるし。ないと言えないわ。関係者の話を総合すると少なくとも患者の接点らしきものは出てくるの」

わたしはガラス窓におでこをくつつけたまま話した。

今のところわたしたちの出勤の原因となった「脳炎」患者は8名が確認され、生存者は4名。発症までの時間は60時間前後。死亡率は100パーセントだった。症状はどれも同じで悪寒と発熱、運

動障害ののち昏睡状態に陥るのだ。ただ感染力が著しく低く、体液を浴びたり体内に取り込んだりしないかぎり発症しない。それだけが救いといえば救いだろう。研究機関がウイルスを分離しようとしているが、その努力はまだ実を結んでいない。

「第1世代の感染者は全員、ギアナ高地の南のブランコ川源流から帰ってきたものばかりなの」

「そこでなにかと接触したのかい」

「うん。そこまではまあ確定情報ね。だけどまだ続きがあるの。彼らが接触したのは『マピンガリ』って怪物らしいわ」

「はあ？怪物？」

「インディオたちがかなり巨大な未知のほ乳類を総称してそう呼んでるらしいわ。アマゾンってまだ知られていない生物が結構いるんじゃないかって言われてるけど・・・とにかく、第1世代の感染者はその『マピンガリ』の死体があるとあるインディオの集落にあると聞いて上流へ向かったらしいのよ」

「それはどこから得た情報？」

「フランス人。5杯目くらいのパンチを相伴したときに、わたしの耳元にささやいてくれたの。そのときの彼の顔ったらもう・・・笑っちゃうわ」わたしはひどく無邪気に聞こえる笑い声を上げた。モーガンはため息をつく。彼のわたしに対する態度は、じゃじゃ馬娘に父親が取るそれと同じだった。

「その程度の話かい。信憑性があまりにもないね」

「ええ、だけど『マピンガリ』の話はベネズエラ政府のお役人からも聞いたのよ。焼き畑で森に入り込むインディオから『謎の巨獣・マピンガリとそれを守護する森の民』の目撃談が相次いだので動物学者に調査を依頼したそうよ」

「で、結果は？」

「さっぱり。でもかなり強固な噂みたい。なかなか収まらないんですって」

モーガンはネクタイを緩め、考えをまとめていた。

「その噂、私は近代化したインディオの心理的代償行為って気がするがね」

「そうね。一種の集団幻覚というか、願望のようなものかもしれないわね」わたしは相づちを打つ。数万年のあいだ森に依存して生きてきたインディオは、急激な近代化にさらされた結果、自分たちが食べもしない作物を育てるために森を焼いて生きることになった。わたしにはそれを批判する資格はないが、彼らの中にそれを潔いものとしなないかがあり、それが幻の存在を呼び出してしまうのかもしれない。

とりとめのない考えにわたしはとらわれていた。首を振って我に返る。わたし、ひよつとしたら酔っているのかも。

「まあ謎の怪物はともかくとして、ブランコ川源流って聞いて引つかかるものない？」

モーガンは首を振った。

「『トリスアギオン出動要請リスト』の最新版に載ってたわよ。2週間前に、そのあたりでアメリカの学術調査隊が消息を絶ってるの」

「なんだって？」運転中にもかかわらずモーガンがこちらを振り返った。わたしのぎよつとした表情に気がついたのか、彼はすぐの前に向いた。

「もう・・・気をつけてよ」

「すまんすまん。それで、その学術調査隊って？」

「インディオの遺跡を発掘する考古学者と人類学者のチームなんだけど、サポートを入れて50人を越える大所帯が調査キャンプから消え失せたの。キャンプ跡にはなにも残っていなかったから移動中になにかがあった。としか分からないほど状況は異常ね。現在地元の警察とトリスアギオンのブラジル支部が搜索中」

「アマゾンの奥地で消えた調査隊とそこが発生源らしい未知のウイルス・・・実に興味深いね」

「そう。絶対にこの二つの事件にはつながりがあるわ」

「ならば、調査隊を探すのが先決だね。しかし、ジャングル踏破に慣れた警察と地元チームが捜せなかったものをどうやって探せばいい？」

「簡単よ、かーんたん」わたしはひどく朗らかな気分になっていた。自分のアイディアに有頂天になっているのだろうか。それとも酔いが回り始めたのかしら。

「彼らは調査隊が『どこに行こうとしたか』知らないで探そうとしている」

「そりゃ当然だろう」モーガンが苦笑していた。分かってないわね。彼。

「だから、わたしたちは『本来の目的地であるはずのキャンプを引き払って調査隊がどこへ行こうとしたか、本来の調査をほっぽらかしてまで興味を持つものとはなにか』から調べはじめるの。調査隊は行方不明になった場所の近くには必ず『それ』があるはず。でしょ」

「確かにそうだ」ルームミラー越しのモーガンの瞳には感嘆の色があった。それは実に気持ちいいものだった。普段は部下からそういった視線を浴びていないだけに。

「でしょでしょ？」わたしは身を乗り出した。

「だけど、どうやって？」

「簡単よ、かーんたん。メンバーの名簿はあるんだから、そこをたぐってきや楽勝でしょ」私はけらけら笑いながらドレスの胸に手を突っ込み、ブローチを取り出した。モーガンはなぜかため息をついて視線をそらした。わたしは全く気にせずにはちんとブローチの蓋を開いて「作戦本部」とささやいた。

数回の呼び出し音のあとに聞き慣れた声が出る。

「あ、あたしよ、あたし。どう？分かった？」

「酔ってますね」電話の向こうの声はうんざりしていた。

「だって、パーティですもの」

「情報収集に行ったんでしょ？酔っぱらってる暇なんてないので

は？」

「・・・男のくせにいちいち細かいわね。わたしはむっとする。

「収集したわよ。だからあなたにパーティ会場から連絡したんじゃないの。で、どうなの？メンバーの家が研究室からなにか見つかった？」

「リオデジャネイロが深夜ってことは、アメリカも深夜か夜なんですけど。無茶言わないでくださいよ」

「だめ、急いで」

「だめって言われても・・・わがまま言わないでくださいよ。カホ」

「だめよ。まずいのよ」記憶が酔いを急激に醒ましつつあった。

「さつき出たパーティの参加者に見知った顔がいたの」

「誰です」相手の声も低くなった。

「会いたくない顔よ。合衆国陸軍・スウィントン大佐とその一味」

「あの悪名高い『消毒部隊』の親玉が？」

「そうよ」わたしはシートに横になった。あの男の顔とその所行を思い出しただけで気分が悪くなったからだ。モーガンはなんにも言わなかった。

ジョルジュ・E・スウィントン。合衆国陸軍大佐。一見学者肌の（事実彼は細菌学の博士号を持っていた）生化学戦専門家はひどく強硬な手段をとることで関係者に知られていた。

もっとも知られているのはザイルでの「一括処理」作戦だろう。彼はその国で発生した重度のラッサ熱病患者を治療せずに「処分」したのだ。それも村ごと。村の住人はほとんどが非感染だったのに、彼の率いる部隊によって焼き尽くされたのだ。

ザイル国内での部族対立に乗じて貴重な実験材料を得た彼らは治療をまったく行わず、ひたすら実験とデータ採取に明け暮れたという。

結局彼はそのとき千人を超える人々を「処理した」と言われている。

もちろん彼の行った「作戦」はこれだけではなかった。ただほとんどの「作戦」は閣僚への秘密報告会で報告されるだけで決して公表されないため、彼の所行は噂の域を出ないのだ。驚くべきことにスウィントンは軍の正規の指揮系統からも外れており、彼はただ国家安全保障会議に対して責任を負いさえすればいいらしい。

「あの男がここにいるのよ」

「えらいことになりましたね」

「だから、急いで。たぶん彼は行方不明の調査隊とウイルスの感染源の關係に気がついたのだと思うわ」

「分かりました。明日の朝いちに調査員を派遣してもらいます」

「明日じゃだめ。今から出して。それから一人じゃ駄目よ。使えるだけの調査員を出してもらって」

電話口からため息が聞こえた。

「分かりました。えつと・・・まず、西海岸ならまだ19時か。

じゃあカリフォルニアに研究室がある人間・・・あった！人類学の研究者、ターナー・レイドローからはじめます」

「ごめんね。お願い」つぶやくようにそう言っ、わたしは電話を切った。

それから目を閉じる。

させるものですか。絶対にあの男の好きにさせるものか。

瞼を閉じて得た暗黒の中で、ナパームで一瞬のうちに燃え尽きる人と家屋の映像が浮かび上がった。

させるものか。二度とわたしの目の前であんな不埒なまねをさせるものか。

わたしは誓う。

そして、さらに誓った。

二度と、もう絶対に逃げるものか。と。

さいしょはただ呆然としていた。

それからすごく悲しくなった。

そして、腹が立ちはじめた。

なぜなら誰もターナー・レイドロウ先生の心配をしていないからだ。

学年主任はターナー先生たちが行方不明になったニュースを「それを見たことか」って話し方でみんなに伝えだし、みんなの反応も似たようなものだった。

「だってサーシャ、アマゾンなんだよ」同室のアリスはベッドにうつぶせになってメールを書きながらのんびりとした口調で言った。「危なくて当然。先生も分かって行っただからしかたないよ」いくらなんでも、これはちょっと許せない。ちよっと我慢できない。

あたしは黙ったまま部屋を出る。

「サーシャ、もうじき先生が巡回しに来るよ」扉を閉める前に彼女の声が聞こえてきたけど、あたしはそれを無視した。このまま部屋にいたら彼女とケンカしてしまいそうだった。

ケンカといっても彼女はおとなしいから、あたしが一方的に文句を言っておしまいになる。そのあとの沈黙がすごくいやだったのだ。だからあたしは外に出ることにした。このイライラを押さえるために。

だけど、それは逆効果だった。意味もなく歩き回っていたあたしはふたりの黒づくめの男が先生の部屋の中のものを持ちだそうとしている現場にぶつかってしまったのだ。

学校側は先生がいなくなったことをキティの事実としてしまつて、もう部屋を片づけてしまおうと考えているのだろうか？

いくらなんでも、これはぜったい許せない。断固許せない。

「何をしてるんですか？」あたしは詰問した。「あなたたちはだれ？許可を得ているの？」

二人はこつちを向いた。二人とも似たような背格好で、まっくろのスーツに黒のネクタイ、いまだき誰もかぶらないような黒いソフト帽にサングラス。

ぜんぜんまったく見分けがつかない。

これぞまさしくMIB。メン・イン・ブラック

これ以上怪しい人間がいれば教えてほしいほどの格好だった。

「ああ、ちよつとね」男のひとりが・・・便宜上MIB1号と呼ぶことにする・・・がくぐもつた声で言つた。

「『ちよつと』ってなに？質問に答えなさい」

「関係者の許可は・・・とつてあるよ」もうひとり・・・MIB2号・・・が妙におどした口調でしゃべりながらこつちに寄つてきた。あたしはぱつと後ろに下がる。そのまま壁の非常ベルに手をかけた。ふたりの動きが止まつた。

「こつち来ないで！関係者つて誰？」

「ああ・・・」1号と2号は顔を見合わせた。

「・・・名前は、聞かなかつたな」1号が言つた。「そうそう」拍手しかねないほど嬉しそうな2号。「ちゃんと許可は得であるから。うん」

このひとたち、バカだ。そんなことでごまかせると思つてるのかしら？

「ふうん、エルシー・マーシーさんが簡単に許可を出したの？ジョージ・ポージー主任もよく黙つてたわね」

「いや、マーシーさんも、ポージー主任さんにも言わなかつたよ」2号はすごく嬉しそつだった。「全然なんにも。まったくOKでさ。・・・なんだよ」1号が調子に乗る2号をつついておしゃべ

りをやめさせた。

「ふうん」あたしの口元が意地悪くつり上がった。「じゃあ、ハンプティ・ダンプティ課長もなにも言わなかったんだ」

「そうそう、ダンプティ課長も・・・ハンプティ？」

2号の笑みが凍りついた。ようやくあたしが挙げた名前がマザーグースから持ってきたでつち上げたと気づいたらしい。

非常ベルの隣にあるインターフォンをフックから外す。すうっとふたりの表情から感情が削り落ちた。さっきまでの間抜けな印象はどこにもなかった。急に二人が大きくなったような気さえた。

次の瞬間、彼らはあたしの目の前に迫っていた。

蛇のように4本の手がこっちへ伸びてくる。受話器が吹っ飛んで壁にぶつかった。

声も出なかった。体がすくんで動けない。それでもなんとか身をひるがえした。逃げようとするけれど膝から下がグニャグニャしていた。

ようやく二人に背を向けたとき、男の指が肩に食い込んだ。それはあたしの抵抗しようという気力をうち砕いた。まったく体が動かなかった。恐怖でなにも考えられない。涙がこみ上げ来る。

だが、ふいに肩に加わる圧力が減った。

あたしは壁へ突き飛ばされる。叫び声と靴音が乱れ、しだいに遠ざかっていく。

ものすごい音量で非常ベルが鳴っていることに気づいたのはそのあとだった。

相手の態度は俺たちが嫌になるほど卑屈だった。でもそれは尊大さの裏返しだったかもしれない。

とにかくこの男性教師は、この学園の広報担当者であり中世英文学の専門家であるサリバン「博士」はよくしゃべった。この学園が《財団》の寄付によって運営されていること。そのおかげで施設の充実度は全米屈指であること。教授陣もまた優れていること。さらに行方不明となったターナー氏がいかにみ出しものであるかを、そんな人物を助け「ねば」ならない我々を気の毒に思っていることを……。

俺は相当うんざりしていた。ここへ来たことを早くも後悔しはじめていた。ちらりと隣を見る。イスマイルは何度も首を振っていた。奴も俺と同意見のようだ。

ドアを開け、椅子に座っている少年の背中が見えたときは本当にほっとした。

「彼なら貴方のお役に立つでしょう。何なりとお言いつけください。彼はターナー氏のいわゆる……お気に入りです……」

秘密めかした声に俺は我慢できなくなった。

「やあ、こんにちは」俺はぐいと手を伸ばす。問答無用で少年の手を握りしめた。「俺、ローレンス・M・トス力。よろしく」

俺の態度にサリバン先生は意表をつかれたらしい。だがすぐに立ち直ると尊大な口調で少年に呼びかける。

「やあ、パット君。元気かい？」

あまりにとってつけたような挨拶に少年はわずかに顔をしかめた。ま、健全な少年なら彼に愛称で呼びかけられても嬉しくも何ともないにちがつてる。

「こちらは国際救助隊『トリスアギオン』の方で、ターナー先生を捜索するための手がかりを……」

「モートン・イスマイルです。こんにちわ」

サリバンの紹介を遮るように俺の相棒が手を伸ばし、彼の左手を取った。右手は俺が握ったままだからだ。少年のとまどい気味の顔に笑顔が浮かんだ。

「パ、パトリック・オケーシー……です。パトリックと呼んでください」

パトリックは俺とイスマイルを驚いた表情で交互に眺めていた。そりゃそうだろう。俺と奴はまるで絵に描いたような凸凹コンビだからな。

身長190センチオーバーのジャマイカ人の俺と縦より横が長そうなアイルランド人の奴とをコンビと呼ぶにはあまりに異質だった。もちろん経歴も、性格も対照的だ。ジャマイカ初の短距離金メダリストの息子として何不自由なく育った俺と、学資を稼ぐために軍隊生活を余儀なくされたたき上げの奴では価値観さえ違うのだ。

精神の基礎にあたるひどく強固な部分をのぞいては、俺と奴にはほとんど共通点はないといってよかった。

だが今はある一点において、俺と奴の意見は見事に一致していた。すなわち、このサリバン「先生」からできるだけ急いで遠ざかりうと思っっている点では。

「オーケイ、パトリック。さっそくで悪いけど頼みたいことがあるんだ」俺は少年へにやりと笑ってみせ、ぐいと彼の灰色がかった瞳をのぞき込む。苦笑気味のその表情には悪意はなかった。

「あ、あの」完全に部外者扱いされたサリバン。「このお二人はターナー先生を搜索するための手がかりを探しに来られたので……」

「あとは大丈夫」イスマイルがまた割り込んだ。「我々だけで調べます。ごくろうさま。サリバン先生」

「あつ、でも……」

「いいからいいから。パトリック君がいれば大丈夫。まかせてください。さ、行こうか」俺は少年の肩を叩いた。ぴよんと立ち上がる。その表情は好奇心に輝いていた。そうそう、男の子ならそうい

う顔をしなくっちゃ。

「でも、わたしも立ち会わねばなりません」教師はひどく不満そうだった。

「サリバン先生。もう、結構です。どうも、ありがとう」彼の前に立ちふさがったイスマイルは一言一言区切るように発音する。この攻撃的な態度に耐えられる人間はそうはいない。予想通り教師はぶつぶつ言いながら引き下がる。

「よっしゃ。いくぞ」奴はひどく嬉しそうに言ってドアを開けた。

「どうしてサリバン先生を無視したんですか？」

廊下を歩きながらパトリックがぼつりと尋ねる。

「俺たち、先生って人種が苦手なんだよ。な、モーティ」

うんうん、とイスマイルはうなずいた。

「僕が先生の態度に嫌な顔をしたからでしょ」

俺とイスマイルは顔を見合わせた。この子は意外と鋭いのかもしれない。イスマイルがゆっくりとした口調で答える。

「いや、ほんとに苦手なんだ」

「ああ、しよっちゅう怒られてたからな」

「そうとは思えないけど」パトリックは肩をすくめた。そのしぐさがひどく馴染んでいることに俺はなぜか腹が立った。

「確かにあれは演技だよ」俺はあっさりと認めた。「だけど生徒が嫌がる名前を平気で使って、その上『なんなりとお言いつけ』なんて言い出す教師に敬意を払う必要があるか？」

「これもおべっかの一種？」

くそ、小生意気なガキだ。

「君は考えすぎだよ。パトリック君。俺たちは本職の調査員じゃないから、心理的な駆け引きをやらないんだ」イスマイルは苦笑する。

「じゃ、何なんです？」

「実働隊員だよ」俺は大げさに肩をすくめた。「人使いの荒い上

司がいてね。自分は酒飲んでるのに部下には深夜出張を命じるんだな」

「深夜って・・・まだ10時過ぎですよ」

「俺たちはリオデジャネイロから飛んできたんだぜ。時差の関係で出発したときは深夜の12時だったの！」

その時間帯に酒を飲んでいないパイロットを捜すのはどんなに大変だったか。俺は思わず拳を握りしめて少年へ力説していた。彼はくすりと笑う。

彼は知らないのだ。あのワガママ女を怒らせるとどういうことになるのかを。

やはり大人たるものは少年に女の怖さをちゃんと教えてやる義務がある。特に怖いもの知らずで傍若無人で遠慮知らずでかつ美人のオナナの怖さを。

「そりやもう、超ワガママ女なのよ。いやホント、ちょっと美人なのを鼻にかけて、人をアゴで使うわ、怒鳴るわ、喚くわ、蹴飛ばすわ・・・」

「俺は2階から飛び降りて来た彼女に踏まれたことがある」ぼそりとイスマイル。

「あの時あんた、喜んでたじゃないか。・・・もうとにかくひどい女なんだ。それに、何よりも恐ろしいのが・・・自分の悪口を言われていることに対して、異常なまでに敏感なことだ。なぜ気づくんだろうって思うくらいに。さらに神出鬼没で・・・」そこまで言った俺は突然背後が気になった。あり得ないと分かっていても背後を振り返ってしまう。

大丈夫だった。彼女はいなかった。ほっと息をつく。

「あのう」パトリックが不安そうに俺を見上げていた。「僕を呼んだ理由は何ですか？」

「話してなかったっけ？」

「はい」

しばらく俺たちは沈黙していた。

あはは、と俺とイスマイルはむなしく笑う。少年がさらに不安そうな表情になった。

「カホは、いや、我々のボスは」俺に代わってイスマイルが説明をはじめた。「行方不明になったターナー氏たちを探すためには、調査隊の目的地を知っておく必要があると考えてる」

「目的地は遺跡にきまつてるでしょ」

「ああ、言い方が悪かった。君は調査隊が行方不明になった状況を知っているか？」

少年は首を振る。

「彼らは遺跡の調査を途中で打ち切ってどこかへ移動したんだ」

「そんなことってあり得ないですよ！」

「だからだ。なにかとてつもないことが起こったんだろう。たとえば遺跡よりももっと魅力のあるものを見つけたとか。調査隊全員が整然と消える理由はそれくらいしか思いつかないんだよ」

「犯罪に巻き込まれたってことは？たとえば麻薬カルテルなんかの」

「争った形跡が全くなかった。カルテルは荒事の痕跡をすべて消し去るほど洗練されていない」

「でも、もし理由があって移動したのなら連絡ぐらいあってもいいじゃないですか」

「彼らが行方不明になった当時、太陽フレアの影響で衛星通信が不調だったんだ」

そのため、行方不明になったこと自体がしばらく分からなかったのだ。

「そうですか・・・」パトリックは黙り込む。

「とにかく、」俺はふたりの会話に割り込んだ。「俺たちは彼らが残した資料を調べて、調査隊の興味を持ちそうなものを知りたいんだ。地元の警察や救援隊でも捜せなかった彼らを捜すにはアプローチを変えるのがいちばん。だろ？」

少年はうなずくがすぐに物思いにふけてしまった。

「元気出せ」俺は彼に笑いかけた。「大丈夫、きちんと調べたら見つかるよ」

けれども少年の不安そうな表情は変わらない。

「お前、意外と心配性だな」

「違います」きつ、と少年は見上げた。「ローレンスさんたちは先生の研究室がどんなものか知らないからそんなことが言えるんです。あそこは『カオス』なんですから」

「は？」

「ぜんぜん整理されてないから、なにがどこにあるかが分かっているのは本人だけです。ほんと、むちゃくちゃなんです」

俺たちの足は知らず知らずのうちに止まっていた。

「君でもなんとかならんのか？」とイスマイル。

「やってはみますけど・・・自信ないですよ」

知らず知らずのうちにため息が出ていた。カホのチームに配属されて以来、ため息をつく回数が圧倒的に増えたと思うのは気のせいだろうか。

「まあ、やってみましょうか」少し皮肉な表情を浮かべながら少年は角を曲がる。「なんとなく心当たりもありますから」

が、彼は突然に立ち止まった。

「おい、パトリック君。急にどうし・・・」ぶつかりそうになったイスマイルの苦情が少年の視線を追っていくうちに途切れる。

40メートルほど向こうの廊下の反対側で2人組の男が逃げる少女に迫っていた。その黒づくめの姿はあまりに異様だった。まるでこの学校にはそぐわなかった。俺とイスマイルは一瞬あつけにとられていた。

そして、男たちの手が少女の肩をがっしりと掴む。

なにかが砕ける音。

そして非常ベルのけたたましい絶叫。

それが俺たちの金縛りを解いた。パトリックが壁面の非常ベルを殴りつけて鳴らしたのだ。俺とイスマイルは同時にダッシュする。

「離れる！このボケ！」

俺は叫びながらさらに加速した。イスマイルがわずかず遅れていくが気にしない。今度は男たちが仰天する番だった。奴等は少女を突き飛ばし、俺たちと反対側の通路へ身をひるがえす。その行動にはまったく遅滞がなかった。あつという間に扉の外へ彼らの姿は消えた。

5秒ほどして扉にたどり着いた俺は毒づいた。

黒装束の男たちは西海岸の闇の中に消え失せていた。

振り返ると、壁にもたれたまましゃがんでいる少女に少年が息を切らせながらなにごとか尋ねていた。

黒い男たちが彼女の肩を掴んだ途端、僕の体は自動的に動いていた。

本当は持ち上げて外すはずのカバーへ拳を振るった。乾いた音を立ててカバーはどこかへ飛んでいく。手のひらを叩きつけるようにスイッチを押した。

一拍おいてから非常ベルが鳴り響いた。

同時にイスマイルさんとローレンスさんが地面を蹴り、男たちに向かって駆けていく。特にローレンスさんの走りはすごかった。大股のストライドが高速で繰り出されていくのだ。一步ごとに長身の彼の身体は速度に乗っていた。けれど黒づくめたちの逃げ足には勝てなかった。彼らはまったく躊躇せず裏口から走り去ったのだった。気がつくと、僕は彼女のすぐそばに立っていた。

「大丈夫？サーシャ」僕は息を切らしながら尋ねた。大丈夫なは

ずなんてないのに。彼女はのろのろと僕を見上げた。その目には涙が溜まっていた。動悸がまだ収まらない。全力疾走のためではなく恐怖が心臓にまだむち打っているのだ。僕は荒い息をなんとか押さえ込みながら彼女に言った。

「ね。もう、大丈夫だから。ね？」

ちがうちがう。こんなことを言っている場合じゃない。だけど、他になにも思い浮かばない。

彼女が僕になにごとかつぶやいた。

聞こえないので僕はサーシャのそばにしゃがむ。まともに彼女と目があつた。彼女の涙が消え失せていることに気がついたのはそのときだった。

「大丈夫？」

「あのやる！」サーシャの手が勢いよく持ち上がって僕の肩にかかった。そのまま体重をかけて一気に立ち上がる。僕は悲鳴と同時に床へ押しつけられた。彼女は僕には目もくれずにターナー先生の研究室へ飛び込んでいく。

なんなんだよ。いったい。

うなり声をあげて僕も立ち上がる。

動悸はいつのまにか収まっていた。

「なによこれ！むっちゃくちゃじゃない！」

ほぼ完全にいつもの状態に戻ったサーシャは叫び声を上げたきりドアのところで立ちつくしていた。

ほんとにむちゃくちゃだった。いくら整理の下手な先生でもこなには乱雑にはしないだろうと思うくらい研究室の中は荒れていた。すべての引き出しの中身が外に放り出され、端末は床の上に転げ落ち、本棚はひっくり返っていた。ぼろぼろのソファーまで切り裂かれていたのには驚くよりも笑いそうになってしまった。

「あいつら、ほんとに泥棒だったんだ」口元に手を当てたままつぶやくサーシャの横を僕はすり抜けて室内へはいった。本棚の残骸

を持ち上げて下敷きになっていた本を拾い上げはじめる。

「・・・あんだ。なにやってるの？」

「先生の研究資料を探してる」

「あんたがなんでそんなものがいるのよ？」

僕は先生が行方不明になったわけとその手がかりのことを手短かに説明する。

「そつか。じゃ、あの黒服はそれを探してたんだ」

「あの男たちって何者？」

「わかんないわよ」サーシャは悔しそうだった。「ただの泥棒じやなさそうだったけど」

「君たち、大丈夫か？」戸口からイスマイルさんが顔をのぞかせた。

「大丈夫です」と僕。よかった。と彼はうなずくと早口で言った。

「わたしとあいつは連中がまだこのあたりに潜んでいないか確かめる。安全が確保されるまではここにいてくれないか」

「わかりました」

「頼むぜ」

「パトリック。あの人だれ？」

イスマイルさんが姿を消すなり彼女が尋ねた。

「トリスアギオンのイスマイルさん。先生の手がかりを探すためにきたんだ」

「それをあんたが手伝ってるの？」

「そうだよ」

「なんであんたなのよ」サーシャにそう言われた僕は言葉に詰まる。確かに僕は先生と親しかったけど、資料がどこにおいてあるなんて分かるはずもないのだから。

「分かんないよ。だけど探さなくっちゃ」

「なんで・・・あんたなのよ」彼女の声は微妙に震えていた。

サーシャの口元が今にも泣き出しそうにぎゅっとゆがむ。

「手伝ってよ。サーシャ」気がつくと言っている僕がいた。

自分自身でびつくりする。

「えっ？」

彼女は驚いたように僕を見つめている。あわてて僕は説明した。

「その・・・僕だけじゃ分かんないから」ウソじゃない。少なくとも半分は本当だ。

しばらくのあいだ、サーシャは黙っていた。それから突然床に膝をついてひっくり返っていた引き出しからノートを拾いはじめる。

「スケッチブック」

「えっ？」

「スケッチブックよ。前に先生が見せてくれたわ。遺跡のスケッチとか、石器やインカ人のイラストとか。そのページには詳しいメモがあったの」

彼女は早口でまくし立てるとノートや書物の山を掘り返しはじめ、ふと手を止めて僕を見た。

「ほら、あんたもさっさとなさいよ。時間ないでしょ！」

僕はうなずいた。なぜか嬉しかった。

ひっくり返った椅子の下敷きになっていたスケッチブックを見つけたのはその数分後のことだった。

床に膝をついたままページをめくる。

「あつた！」

終わりのほうの3ページぐらいにイラストと地図、そして写真が貼り付けてあった。

「見せて」サーシャがぎゅっと割り込む。

「なんだよ」

「見せなさいってば」肩で僕を押し出してスケッチブックを奪った彼女はしばらくじっとそれを見つめていた。

ちよつと見たぐらいじゃ、分かんないと思うんだけど・・・。

「分かった」彼女は勢いよくこっちを見て笑う。「もう完璧。ぜったい確実」

まったく信じてない僕の顔に気がついて彼女の頬が膨れた。「なによ。文句あるの？」

「なにが分かったんだよ」

にこつとサーシャは笑った。こんな表情を見たのは初めてだった。

「先生たちは遺跡を探してるのよ。巨石文明の」

「ふうん。そうなの」

「もうちょつと驚いたらどうなの？」彼女はスケッチブックをぐるりと回して僕に写真を見せた。そこには大人2人分の高さのある石の柱と石造りの台が写っていた。「いわゆる巨石文明がこんな所にあるのは異常なのよ」

「そうなの？マヤとかアステカとかつて石造りのピラミッドがあったんじゃないかった？ビデオ学習で見たけど」

彼女はふかくため息をついた。首を数回振る。

「パトリック・オケーシー、あんた、先生からなにを教わってたの？マヤとかアステカがあるのはユカタン半島っていうかメキシコ。先生が調査しに行ったところとはたっぷり4千キロは離れてるのよ」
なんとなく理解できた。彼女は続ける。

「きつと先生たちはもつと大きな遺跡か、それにつながる手がかりを見つけたのよ」

「でも、どんな手がかりなんだろう」僕はつぶやいた。「少なくとも、専門家なら見てすぐに分かるようなものはずだよ。衛星が使えないってことは、コンピューターのライブラリーだって使えないってことなんだから」

そうね。サーシャは不承不承うなずいた。

「これ、なに？」スケッチブックを眺めていた僕はもう一枚の写真を指さした。

「ん？うん・・・」のぞき込んだ彼女も首を傾げた。

それはひどくピントがぼけたうえ、粒子も粗かった。どうやらデジタル写真を無理矢理プリントアウトしたものらしい。

そこに写っているのはさきほどの石柱と人の形をしたなにかだっ

た。ただし、人間との類似点は手足があつて直立しているらしいというだけで、大きさはまるで違つていた。それは石柱と同じくらいか、それよりも大きいのだ。

「なにかしら。すごく大きいわ」

「ゴリラかな？」

「南米にそんなものがあるわけないでしょ。しっかりしてよ」

その通り。だいたい、ゴリラだつてそんなに大きくないはずだ。

「とにかく、行つてみるしかないわね」彼女は宣言するとスケッチブックを閉じ、ぎゅつとそれを抱える。

彼女の言葉を理解するまでしばらくかかった。

「ちよつと待てよ。なに考えてるんだよ。それはトリスアギオンに渡さなきゃだめだろ！」

「や」

「サーシャ！」

「だめ」

「どうして？」

「だつて、トリスアギオンは信用できないもん」

「そんなことないつて」

「あるわよ。もしトリスアギオンがちゃんとしていたなら、あんたはこの学校に來なくてよかつたはずよ。ちがうかしら？」

それは真実だった。残酷な言葉だけど事実だった。

ロンドンで起きた爆破テロに叔母夫婦が巻き込まれたりしなければ、100年以上続いたキリスト教徒同士の紛争に深入りすることを恐れたトリスアギオンが出勤を見送らなければ、さらに訓練不足の医療スタッフが点滴の種類を間違えなければ……。

僕はひとりぼっちになることはなかった。この全寮制の學校に來ることはなかった。それは確実だった。

「……ちがうよ」僕はゆっくりと手を伸ばし、彼女からスケッチブックをもぎ取つた。

「なにするの！」

「叔母さんたちが死んだのは爆弾のせいで、トリスアギオンのせいじゃない」それは彼女に説明するためというよりも、僕の中のかなかをなだめるための言葉だった。「これはイスマイルさんに渡すよ。あの人たちなら絶対に先生を見つけてくれるから」

「いやよ！返して！」サーシャが僕につかみかかってきた。ただど涙でくしゃくしゃになった彼女はとても非力だった。僕は腕に食い込む爪の痛みで顔をしかめながらもスケッチブックを彼女の手が届かないように持ち上げた。

「パトリックのバカ！意地悪！」

僕は彼女を振りきって背を向ける。

「あんたなんて大嫌い。もう絶対あんたとは口を利かないからね！」

さつき引つかかれたときよりもその言葉は痛かった。

「さつき見たときにもう中身を覚えたわ。だからあたし、そんなものなくっても先生を探しに行くもん」

「じゃあ聞くけど」僕は背を向けたまま尋ねた。「遺跡の近くにあった河は東西に流れていた？それとも南北？」

うつ、とサーシャは言葉を詰まらせる。

「どっち？」

「え、えつと・・・南北」

僕はため息をつく。「はずれ。河なんてないよ」

「パトリックのバカ！意地悪！あんたなんて・・・大嫌い・・・よ」

僕はなぜか振り返ってしまう。そんなつもりは全くなかったのに。サーシャはぎゅっと唇を噛みしめ、腕を組んだまま床を見つめていた。涙を流すまいと必死になって努力しているようだった。

もう一度僕はため息をついた。

深く、ながく。

「早いわねえ。もうなにか分かったの？」

わたしは上機嫌で受話器に話しかけながらモニターに手を伸ばしつつ、無意識のうちに画面に反射する自分の顔を確認していた。

ひどい寝起きの顔だった。いや、正確には宿酔の顔というべきかも。

とにかく部下の前にさらけ出せる顔ではない。わたし、神無月代歩にだってイゲンというものがあるのだ。

わたしはモニターを消したまま椅子にへたりこむと。ブラシをかけ始める。

わたしの深慮陰謀とは関係なく、部下のひとり……彼はその事実をまるで認めていないように振る舞うが……であるモートン・イスマイルは早口でまくし立てていた。

「ええつとですねえ、カホ、調査隊がなにを探しているかは分かりました。ターナー・レイドロー氏が資料を残してたんです。彼らが探しているのは、まあ一種の巨石文明です。でもちよつと問題がありますまして……」

「なに？」嫌な予感がした。イスマイルはなにか後ろ暗いものがあるときくらいしか丁寧な口調にならない。

「その資料、なくしちゃいまして」

「は？」

「そのう、オリジナルを持ち逃げされちゃったんですわ。持ってた奴はコピーを残しておいてくれたんですが、スキャンに失敗していてまるでお手上げですな」

「……順を追って説明なさい」

イスマイルの説明はあちこちで妙に枝分かれしていく傾向があっ

て、少なくとも3回は聞き直さなければならなかった。そのうえようやく理解できた内容はわたしを啞然とさせるのには十分だった。

「つまり、こういう事ね」わたしはうんざりしながらイスマイルに確認を取った。

「ターナー氏と仲のいい生徒の助けを借りて、彼の部屋を調べようと思ったら先客がいて、そいつらを追っかけているあいだに生徒が重要な手がかりを見つけ、どういふつもりか自分で先生を助けようと思い立った……。」と

「その通りです」

わたしは電話を持ったまま部屋の扉を勢いよく開けた。寝癖のことはこの際気にしないことにした。隣の部屋は仮設の指揮所になっていて、いまは仕事のない3人のオペレーターがぼんやりとディスプレイを眺めていた。ぎよつとしてこつちを振り向く。

「アイリーン！サンディエゴ空港の発券システムに侵入できる？」

「は、はい。できます。カホ！」

「すぐにやって頂戴。今からいう名前を検索して」それだけ叫ぶと今度は電話のイスマイルに怒鳴る。

「生徒の名前を教えなさい。追跡するわ」

「了解。一人目はサーシャ・タチアナ。スペルは……」

「女の子？」思わず声を出してしまう。

「S・a・s・h・a・T……えっ、ええ、そうです。どっちかっていうとこの子が首謀者っぽいですね」

「なんてお転婆！将来どうな人間になるのかしら」

「……カホからそんな台詞を聞くとは意外ですな」

「なにが言いたいの？」

「なんでもありません。聞き流してください。で、もう一人がパトリック・オケーシー。スペルは……」

わたしはふたりの名前をアイリーンに告げ、発券システムを検索させた。答はすぐに出た。

「いたわ」モニタには2人の名前が点滅していた。クレジットカ

ードを使う関係で偽名を名乗れなかったらしい。それにしてもローティーンでプラチナカードを持っているとは、サーシャ・タチアナの家族は富豪かそれとも悪徳役人かなのかなのだろうか。

「今日の昼の便で到着。あら・・・やだ」画面をスクロールさせたわたしは顔をしかめた。「この子たち、ビジネスなんて使ってるなんて贅沢！」

「子供の旅行ならそっちのほうがかえって不審がられませんよ。それはそうとして・・・私たちどうしましょうか？」

イスマイルののきな口調を聞いた次の瞬間、ぷちつとわたしの中でなにかが音を立てて切れた。

「この馬鹿たれ！小娘にいいようにされて『どうしましょうか』はないでしょう！とつと戻ってきなさい！」電話の向こうで耳を押さえる気配がした。指揮所内のほぼ全員もそうしていた。わたしはかまわず続けた。「こつちで子供たちを押さえたらすぐに現地へ飛ぶわ。置いてけぼりを喰らいたくなければすぐ合流するのよ」

「りよ、了解。確かに急いだほうがよさそうですね」

「当然よ」

「いや、その・・・カホのワガママ、いや、都合だけじゃなくって、その・・・さっきの『先客』ですが、どうも合衆国陸軍情報局の出先の方でして」

ジョルジュ・E・スウィントン大佐。

その名が一瞬のうちに脳裏に浮かんた。まず間違いない。彼も気づいたのだ。

「ならばなおのこと。すぐに戻ってきて」

「分かりました。それまではくれぐれも自重してください」

わたしがイスマイルを怒鳴りつける前に電話は切れた。気がつく
と室内のみながこちらを見ていた。わたしはにつこりと微笑んでみせる。

「聞いたでしょ。今度は戦争よ」

その通り、今度は戦争なのだ。

いや、戦争と呼ぶのもおこがましいほど一方的な虐殺で終わるかもしれない。もちろん虐殺されるのはこっちだ。その確率は計算するまでもなく高いだろう。なんといっても敵は合衆国憲法をなかば逸脱した正規軍なのだから。

だが、わたしはまるで恐れていなかった。ただ高揚だけがあった。決して負けないという信念だけがあった。そう、わたしは恐れていなかった。

飛行機の中でパトリックはぜんぜん落ち着いていなかった。ひっきりなしにトイレに立つし、それもわざわざビジネス区画じゃなくって後部のトイレへ行くこうしてる。ひよっとしたらこの子、今まで飛行機に乗ったことがないのかしら？

まあ、分らないでもないわ。この航空会社、ちよつとサービスが過剰すぎる。ひっきりなしにスチュワーズがやってきて、あたしたちみたいな子供に「ミスター」とか「ミス」とか言ってくるんだもん。そのくせソフトドリンクしか持ってこないし。

けどそれを差し引いてもパトリックの態度はちよつと変。あたしと一緒にいくと言い出したときは生意気に保護者を気取ってたくせして、ひよっとしたらこの子、高所恐怖症？

でもそれもおしまい。ボーイングは無事到着してターミナルへタキシング中。あとはガイドを雇って奥地へ乗り込むだけ。ちよつと成り行き任せだけできつと大丈夫。パトリックはトリスアギオンの人たちを騙したことを後悔してるけど、ちゃんとコピーをおいてきたんだから、あの人たちもなんとかするでしょ。

「サーシャ」シートから身を乗り出してパトリックがささやいた。
「エコノミーの前から3列目。そつと振り向いて」

わたしはそうした。そして、見つけてしまった。

黒づくめの男が2人、サングラスをかけたまま窮屈そうに座席に座って新聞を読んでいた。すごくシニールだった。

「MIB！」

「なにそれ？」

「なんでもないのよ」あたしは小声でささやき返した。「信じられない。先生の部屋に盗みに入ったときとまったく同じカッコじゃない」

「きつと着替えをいっぱい持ってるんだよ」

そうかもしれないけど、そんなことを言ってる場合じゃない。だけれどどうしてあいつらは私たちの行き先を突き止めたのかしら。

「やっぱり、そのスケッチブックを追ってるのかな。あいつら」

「そうに決まってるでしょ」そろそろと立ち始める乗客に隠れるようにあたしたちも立ち上がった。ありがたいことにビジネスシート乗客はエコノミー乗客よりも先に出してくれるから、その間に人混みに紛れてしまえる。

目立たないように、かつ急いで、あたしたちは人混みをかき分けて通路を進みはじめた。

確か、こういう状況を表現する言葉があったはずだ。完璧な準備と真剣な努力にもかかわらず、なにもかもうまくいかないような状況を指し示すびつたりの言葉が。

わたしはピックアップトラックの助手席から双眼鏡を覗きつつ、ため息をついた。

「どこかに移動したほうがいいんじゃないやありませんか。カホ」ドライバーが控えめに発言した。わたしは首を振る。

「下手にうろついたらって無駄よ。あの子たちが目的地にたどり着くにはなんらかの移動手段が必要なんだから」

わたしが監視しているのはチャーター便の手続き事務所だった。

くだんの勝ち気で無謀な少女と無謀で付和雷同な少年は、ヘリをチャーターするにちがいないとわたしは確信していた。

本来なら、もっと早くに彼らを捕捉しているはずだった。ところが空港の入国審査官がドジを踏んで彼女たちをそのまま通してしまったのだ。聞くところによると少女の立て板に水の抗議に圧倒されたいが、いったいどこでポルトガル語なんておぼえたのやら。

さらにタッチの差でこちらの調査員の監視もすり抜けている。年端もいかない素人にしては異常なほどに運が良かった。

かくなる上は彼らが目的地へ行く前になんとかしてつかまえないければならない。さっき入ってきた情報によると彼らはクレジットカードを使ってアウトドアグッズ一式とGPSを手に入れたらしい。ただ無謀なだけではないらしい。

手が疲れてきたので双眼鏡を下ろして膝の上のファイルを開く。そこにはふたりの疫病神のプロフィールが載っていた。

「小さな爆弾」とわたしがひそかに名付けているサーシャ・タチアナの父親はトリスアギオン隊員だった。だが彼女が生まれる前に殉職。母親はいまはタチアナ姓を名乗っていない。

なんてこと。わたしは猛然と腹を立てていた。こんなかわいくて頭がいい子をほっぽりだして再婚するとはいい根性をしているではないか。

おかげでわたしがこんなに苦勞する羽目になったのに。

もうひとりのパトリック・オケーシーも似たようなものだった。

両親を事故で失い、さらに彼を養子として引き取った叔母夫婦もテ

口で死亡したのだ。名前からして混じりつけなしのアイルランド系の少年を不幸のどん底に突き落としたのがIRA（アイルランド共和国軍）だとは皮肉のかぎりだろう。

つまりふたりとも《財団》の言う「人類の愚かさによる犠牲者」であるわけだ。

なるほど。では、この子供たちに振り回されっぱなしのわたしはなにの犠牲者なのかしら。

「カホ！」くだらない考えにとらわれていたわたしに後部座席から鋭い声がよびかけた。わたしより忍耐強い隊員がなにかを見つけたいらしい。

「2時半の方向。400メートル」言われるままに双眼鏡を操作した。

・・・いた。

ヘリポート端の倉庫付近にふたりの少年少女がいた。間違いないサーシャとパトリックだ。実物を見るのは初めてなのになぜか懐かしい気さえする。

「いたいた。つかまえたらずお尻をひっぱたいてやる」不穏なつぶやきが漏れるが気にしない。部下もため息はつくが注意もしない。いつものことだからだ。しかし、お気楽な気分は倉庫の陰に隠れている人影を見た途端に消え失せた。

「緊急事態」わたしは無線機を取り上げると司令部へ送信した。

倉庫の陰にいた男たちはもはや隠しもせず銃を取り出すと子供たちに突きつけている。「スウィントン大佐の部下が子供たちと接触したわ。畜生、どうやって追尾したのかしら」後部座席の動きが激しくなった。振り返るとふたりの隊員がコンテナを開けてH&Kの拳銃を取り出し、忙しくマガジンに弾を込めていた。少し息を吸ってからチャンネルを切り替える。2秒後コンソールに秘話回線が開いたことが表示された。

「国際救助隊北米第12支部所属、カホ・カナツキです」

「声紋照合・・・確認」電子臭のある声が応えた。その冷静さが

今のわたしには頼もしかった。時刻と現在概略位置を知らせたあと、本題に移る。

「本官の職務遂行に必要な欠くべからざる人物の生命を、武装集団が奪おうとしています」わたしはひどく正式な言葉遣いで状況を報告した。衛星経由で本部に記録されるこの言葉は、トリスアギオンの超法規的な行動を制限すると同時に命綱ともなるものだった。

「わたくし、カホ・カンナヅキは国際救助隊憲章9条2章にしたがい、実力をもって武装集団を阻止します」

もしスウイントン大佐が正規の作戦として、つまり合衆国政府とブラジル政府の承認を受けた上で子供たちを確保しようとしていたのなら、話はひどく複雑になる。最悪の場合、犯罪者はわたしということになってしまうのだ。しかし国防省はトリスアギオンの問い合わせに対して今のところ「そんな事実は存在しない」で押し通している。ならばこつちもその芝居に乗るまでだ。

「できるだけ近くまで接近して」スイッチを切ったわたしは指示を出した。

音もなくピックアップは走り始める。

30メートルまで車を接近させたあと、わたしたちはドライバーを残して車を降りた。

「合図したら突入して」インカム越しに指示を出して建物に忍び寄る。薄汚れた窓から中をそっと覗く。

入り口に3人、なかに8人。そしてあの2人。

屈強な男たちの中で2人はひどく小さく、頼りなく見えた。

不意に男のひとりが少年の横顔を張った。パトリックは激しく転倒する。少女がなにごとか叫んだ。下卑た笑いを浮かべた男がサーシャの腕を掴み、パトリックから引き離すと銃を抜いた。

まずい。

連中がここまで凶暴だとは思わなかった。奇襲としては最悪のタイミングだが、やむを得ない。

わたしは覚悟を決めた。

男はにやにや笑いながら安全装置を外すとパトリックへそれを向ける。わたしは身を乗り出して発砲しようとし……。

その動きを止めた。

拳銃を振り回す男の後ろからひよいと手が伸びるとそれを簡単に奪い取ったのだ。奪った男はがっしりとした体格の白人だった。どこか疲れたような顔をしている男だった。

彼はいきり立つ男たちへ厳しい口調でなにか言っていると、あつという間に相手はしゅんとなった。どうやらこれがボスらしい。敵ながらも感謝する。

彼は床に放り投げられたパトリックのバックからスケッチブックを取り出し、テーブルへ投げ出した。

眼鏡をかけた男2人が興奮した表情でそのスケッチブックをのぞき込む。妙に小ざれいな野戦服からすると彼らはアメリカ人、それも文官だろう。

ということはのこのりの8人は現地雇いの愚連隊か犯罪者と言うところだろう。

わたしは手短に作戦を練りはじめる。ドライバーを含めてもこっちは4人、あつちは11で人質までいるのだ。ただ奇襲しても失敗するだけだろう。

まず武器の種類と数を数える。

M16を持つ男が5人、ただし構えているのは3人だけだ。2人がショットガン、残りは拳銃をシオルダーホルスターに入れたまま……いけそうだ。

メンバー構成をもういちど確認する。

どう見ても烏合の衆だった。コンビネーションは最悪だろう。

問題はボス格の男だ。彼だけただひとりだけ身のこなしが異なるのだ。さっきの銃を奪い取った動作といい、場数を踏んだものが醸し出す雰囲気、とでもいうのだろうか。それを周囲に発散させていたのだ。ホルスターに銃が収まっていても十分すぎるほど危険な男

だった。

わたしは手短かに作戦をまとめ、3人に説明した。そして秒読みを開始する。

わたし自身が数を数えた。なにかしないと恐怖にとらわれてしまいそうだったからだ。

カウン트가ゼロになった。

と同時に大音量でクラクションを鳴らしながら扉をぶち破ってピツクアップトラックが突っ込む。

男たちはほとんど反射的に彼らはトラックへ発砲した。

「ゴー」わたしは叫ぶと立ち上がった。3人それぞれに配分しておいた「標的」めがけてガラス越しに発砲する。わたしの担当はシヨットガンの男2人とM16の男2人。距離は最長で15メートル。警告などは一切しなかった。するつもりは最初からなかった。

「担当」がすべて床に倒れるまで4秒かからなかった。トラックの運転席が空っぽであることに気がつきもしなかったにちがいない。だが、すべての敵を倒したわけではなかった。少なくとも3人の男が遮蔽物へ逃げ込んでいた。

突然、ライフルの銃口がこつちを向いていることに気がつく。

地面に身を投げる。途端にわたしが隠れていた壁が穴だらけになった。死にもものぐるいの匍匐前進でそこから逃げだす。このスピードならきつと100メートル15秒台は出ていたろう。同世代の女性に2本の脚で走るよりは速かったはずだ。

まさしく戦争だった。30秒あまりのあいだに少なくとも200発の弾丸が飛び交った。

気がつくといつのまにか弾丸が尽きていた。常に弾丸の使用量は把握すべきなのに頭に血が上ったようだ。

ほそを噛みつつマガジンのリリースボタンを押す。グリップから稲妻の刻印の入ったマガジンが滑り落ちた。それが地面に落下するのを待たずに予備を叩き込む。スライドが自動的に前進して弾丸を装填した。

さらに数発撃つ。狙いもなにもあつたものではなかった。ただ相手の頭を下げさせる必要があつた。

「援護して！」声をかけると同時に倉庫内に飛び込む。そのままジグザグに突っ走ってコンテナに身を隠す。そつと顔を出して様子をうかがう。

ほつとした。2人は無事だった。サーシャとパトリックはじつと身を床に伏せ、銃弾の嵐をかわしていた。

敵の数は2人に減っていた。だが手練れだった。巧みに身を隠して応戦しているため、むやみに近づけない。わたしはベルトから直径5センチ、長さ15センチほどの筒を取り出してピンを抜くと彼らの方へ転がした。

「耳をふさいで！」サーシャたちに叫ぶとわたしも耳を押さえた。衝撃波が倉庫内に充満し、無事だったガラス窓を粉碎する。

聴力がゆっくりと戻ってきた。それにしたがってひどく苦しそうに咳き込む声が聞こえてきた。わたしは用心しながら立ち上がると敵の方へ近づく。

彼らは完全に戦闘能力を失っていた。なんとか立ち上がるうともかくのだが、まったく脚が立たなかった。暴動鎮圧用のインパルス・グレネードの威力つてなんて素晴らしいのかしら。わたしは彼らの手からこぼれ落ちた銃を遠くへ蹴り飛ばす。

「これはもらっていくわ。それから、子供たちも返してもらおうから」たぶん聞こえていないだろうな。そう思いながらわたしは机の上のスケッチブックを取り上げた。

「ああ、それから」できるだけ優越感が出ないように注意しつつわたしは言った。「お仲間は電撃で痺れてるだけだから、心臓の弱い人がいたら医者へつれてつてあげたほうがいいわ。もつとも、このツラ見てるとそんなのはいさそうにないけど」

そうなのだ。私が使ったのは弾頭に大容量コンデンサーが仕込んである電撃弾だったのだ。ちなみに一発あたりの単価は鉛の弾丸の

5倍以上する。規則とはいえ考えようによつてはひどい無駄遣いかもしれない。あの世に送った方がいい人間だって確かにこの世には存在するのだから。

「しくじったな」ボスらしい男が苦笑しながら言った。耳が遠くなっているためか、とんでもない大声だった。

「警告しておく、次は電撃じゃないかもしれないよ。いつまでも慈悲深いと思わないでね」

「分かっている。君こそ次もうまくいくと思わないほうがいい。我々は・・・」そこで彼はにやりと笑った。ひどく不敵な笑みだった。「同じ間違いを2度はしない」

わたしはうなずくと2人に背を向けた。

パトリックに肩を貸してサーシャが立っていた。「大丈夫？」と尋ねるとパトリックは青ざめたままうなずいた。まだ口をきけるような状態ではないらしい。

「はい。これ。返しておくわ」わたしはスケッチブックをサーシャに渡す。彼女は一瞬目を見張ってからそれをもぎとった。

サイレンの音が次第に近づいていた。

「行きましょ」わたしはふたりの背中を押した。厄介ことから早く遠ざかるに限る。

「おい」男が呼びかけてきた。

「君の名前は？」

「カホ、カホ・カンナツキ」

「わたしはディックマン。クラウド・ディックマン大尉だ。覚えておきたまえ。また会うことになる」

ああやだやだ。負け犬のくせにキザだなんて。

「考えとくわ・・・ああそれから」わたしは振り向いた。大事なことを言い忘れていた。

「さつきはこの子たちを助けてくれてありがとう」

ディックマンは苦笑した。なにか言おうとしたが口を閉じる。

わたしたちは再び彼らに背を向け、歩き始めた。

合流した隊員やあたしたちを引き連れて意気揚々と歩いてきたカホさんが不意に立ち止まったのは、仮設捜査本部の扉を開けた直後だった。

武装グループから助けられてからずっと、コバンザメみたいにカホさんにくっついていたあたしは彼女にぶつかりそうになる。「どうしたんだよ」ささやきながらパトリックはあたしの肩越しに室内を覗く。室内の異様な雰囲気気がついたのだ。

「カホ！カホ！非常事態です！」

コンピューターの陰からささやき声が聞こえる。振り向くとオペレーターらしい女性が必死の表情でこっちに手を振っていた。

「なにやってるのかしら」カホさんがつぶやいた。

「なんとなく想像はつきますよ。私には」真っ白の顎髭がなければとても60代とは信じられないジム・モーガンさんは低い声でそう言っただけをすくめた。すぐくさまになっている。

「しーっ」オペレーターが唇に指を立て、そのまま奥の部屋を指した。

「北米本部から・・・」ささやき声のつもりだろうけど、部屋の隅々まで聞こえるような声だった。

「・・・そういう事」カホさんがため息をついた。「なんて手際がいいのかしら。まあいいわ。パトリック、サーシャ。あなたたちもいらっしやい」

あたしとパトリックは顔を見合わせ、それから彼女に続いて奥の部屋へ向かった。オペレーターのボリュウムがさらに上がった。

ぶんぶん手を振り回している。

「カホ、カホ、だめです！作戦を練ってからにしないと！」

「バカねえ」カホさんはにこりと、ではなく、ニヤリと笑う。「こんなの慣れてるわよ。いつものこ・と」

「・・・カホさんって、やっぱりそういう人だったんだ。あの荒っぽすぎる「救出作戦」からして、そうじゃないかと思っていただけ。でも、でも」

「いいから。平気」そう言うが早いか、カホさんは奥の部屋のドアを勢いよく開けた。

「ずいぶんとお早いお越しですこと。ですけどあたくし、なにも問題になるよう・・・うつ」

カホさんは扉を開けたまま凍りついていた。ドアとカホさんの隙間から覗くと室内には2人の男がいて、ひとり腕組みをしてこちらをにらみつけ、もうひとりは机に腰掛けてファイルを眺めていた。「まずったわね」ちつ、とカホさんは舌打ちをする。「こともあらうに『氷』が来るなんて」

「カホ」机に腰掛けていた人がファイルから顔も上げずに言う。

「もう少しましな記録をつけておくんだな。これはなんだ？小学生の学級日誌か？これ以外に法廷で君の身を守るものはないのだぞ」その言葉にはなんの感情もこもっていなかった。

このときはじめて、カホさんがひどく危険な橋を渡ってパトリックとあたしを助けたことを知ったのだった。

「もう少しましな記録をつけておくんだな。これはなんだ？小学

生の学級日誌か？これ以外に法廷で君の身を守るものはないぞ」

オペレーション・マネージャー

トリスアギオン北米本部からやってきた任務管理官、通称OMはひどく嫌みつたらしくそう言つと、ファイルを机の上に投げ出した。ほとんど表紙の重さしかないそれは軽い音を立てて広くもない机の上を滑り、積み上げられた資料の山にぶつかつて止まる。

そのころにはわたしは不意打ちのショックから立ち直つていた。

「あらOM。どうしてわたしが裁かれなくつちやいけないんですか？」

「はああ」深いため息が二つ後ろから聞こえる。イスマイルとトス力だろ。覚えていらつしやい。

「なにも悪いことなんかしてませんわ。わたしたち」

「建造物侵入、損壊、さらに傷害。覚えがないとは言わせないぞ。カンナヅキ隊長」

もうひとりの男が甲高い声で言つた。こつちの顔は見たことがない。態度からして上級職員だろうけど全く私の印象に残つていなかった。要するにその程度ということだ。私は上品に口をOの字に開けて驚いた表情を試みせた。OMは鼻で笑うと別のファイルを取り上げ、それに目を通しはじめた。このやりとりに参加するつもりはないらしい。

「しらばつくれるのもいい加減にしまえ。君の身柄が拘束されていないのはこちらが特使を派遣して政府と交渉したからだ。だいたい、君はどうやってこの国に武器を持ち込んだのだ。我々は許可など出していないぞ」

きんきん声が耳に痛い。これは確かに難敵ね。両耳に手を当てたくなるのを必死で我慢する。わたしは黙つてこの嵐が過ぎ去るのを待つことにした。

が、それには多大な努力を必要とした。この嫌みな上級職員はありとあらゆる婉曲表現を使って過去から現在におよぶ私の行為を非難したのだ。その間実に15分。途中で思考を日本語モードに切り替えておかなければきつとわたしはコヤツを殴り倒していたにちが

いない。

「で、どうしろと？」

男が呼吸のために黙った瞬間にわたしは冷ややかに質問した。案の定男は沈黙し、慌てた調子でもうひとりの男を、OMをすぎるような表情で見た。

やっぱりそうか。こいつはうるさいだけのただのお目付役って事ね。

「カホはどうするつもりだ」沈黙を破ったのはOMだった。その声にはなんの感情もこもっていない。《氷》の異名をとるだけのことはある。

「続行します。調査隊の発見が感染元の特定への近道であることは間違いありません。手がかりはあるし、研究者の心理を予想できるスタッフもおりますし」サーシャとパトリックをちらりと見た。2人の表情がぱつと輝く。

「もしスウィントン大佐が調査隊を保菌者と判断したらどうするつもりだ！」

「彼の行為を阻止します」

「合衆国と事を構えるつもりか！」さっきの男が怒鳴った。

「本意ではありませんが。状況によつてはそうなるでしょう」わたしはOMを見た。口元がかすかに歪んでいる。笑っているらしい。

「君は部下を殺すつもりか！」

「皆、志願者です」イスマイルとトス力がため息をついている。

横暴な上司を持つと苦労するの。分かった？

「ならば」男の声はほとんど絶叫に近い。ここまで強硬に突っぱねられるとは思っていなかったのだらう。「バッジを返したまえ。カホ・カンナツキ。私は北米支部の監査委員として君を隊長職から罷免し、さらにトリスアギオン隊員としてのすべての権利を剥奪する」

わたしの背後から小さく悲鳴が上がった。しかし、わたしはひるまなかった。むしろ冷笑を浮かべていた。

「好きにすれば？そんな肩書きなくっても、わたしは全然困りませんのよ」

「なんの権限もない君に部下が手を貸すと思うか？」

「かもね。ただお金があれば雇うことができるわ。装備もそう」

「そんなこと、できるわけが・・・」男は口をつぐんだ。それが可能なことによろしく気がついたのだ。

「た、確かに君のコネクションと財力があれば可能かもしれない」「可能なのよ」わたしは静かに訂正する。

「だが、そのような行為は決して許されるはずがない。個人の偏狭な視野で行動を起こすのは決して・・・」

「お黙り」わたしはぴしゃりと言った。これ以上はない冷たい声だった。「ふざけないで。そもそもわたしたちは感染元を特定するために派遣されたんじゃない？それに強者に遠慮してたらトリスアギオンなんてやってられないのよ。偏狭な視野？笑わせないでいま、目の前で起こりつつある暴挙を見逃すような人間が言う『正義』なんて無意味な上に無価値だわ」

いつきにまくしたてるとバツジを外し、それをOMへ差し出した。「返すわ。道化につきあうのはもうたくさん」

OMは手を伸ばさなかった。代わりにとった行為はわたしにも意外なものだった。

「装備品はなにが必要だ」と尋ねたのだ。

「OM！」男があえぎ声を上げた。そりやそうだろう。身内が裏切ったのだから。いやひょっとしたらシナリオライターが裏切ったのかも。

「かまわん。わたしは《財団》から全権を委託されている」

モーガンが驚きの声を上げた。そうだろう。ここにいる中でOMの言葉の重みが分かるのはわたしと彼くらいだ。

とにかく。道は開けた。わたしはにっこりと微笑むとOMへリクエストした。この男が何を考えていようが別にどうでもよかった。

「《アームブラスト》10基と《M82A1-AMR》2丁。あとは暴動鎮圧用の弾が使えるライフルを人数分。ロボットはいらないわ」

不満の音がスタッフから上がった。対戦車ロケット砲と対装甲ライフルだけでは役不足といたいようだ。

「言つとくけど、わたしは最初からそのつもりだったわ。戦争しにいくんじゃないのよ。わたしたち。そもそもジャングルにロボットを持ち込めるとは思っていない。密林をくぐり抜けるのに苦労するし、だいたいあんなもの3日もたないうちに故障でうごかなくなるのよ。分かってるでしょ」

皆がロボットについて抱えている最大の誤解があるとすれば、それは稼働時間についてだった。電池が・・・簡単に言ってしまうとエネルギーが・・・フル稼働で3時間弱しかもたないことは誰もが知っている。だが、ロボットの機構そのものが稼働70時間程度で故障しはじめることを知っている人間はかなり、いや、ひどく少ないのだ。

常にロボットを使っている隊員でさえもそれを本当に理解している者はあまりいない。

理由は簡単で、ロボットの活動時間がぶっ続けで70時間におよぶことが通常ありえないからだ。ロボットが壊れる前にエネルギーが切れるので、それを補充しているあいだに部品の交換・各部の点検も行ってしまうし、孤立した被災地に救援を行うときなどオペレーターよりも多くのロボットを現地に送り込むためになにかあれば隊員たちは機体を乗り換えてしまう。だから故障を意識することは普通、ない。

軍用タイプにいたってはもっとひどいそうで、10時間以上稼働することを想定してないらしい。（薄くて役に立たないと酷評されてはいるが）かなりの重量の装甲が追加されたうえ、猛烈なダッシュを頻繁に行う機体が、特にその脚周りが故障するのは当然だろ

う。もっともそれが問題になることはあまりない。軍用ロボットは戦場まではトランスポーターによって運ばれるし、聞くところによると戦闘そのものが30分以上続くことはまずないらしいのだから確かにあれだけの精密機械の集合体がそうそう長持ちすると考えるほうがどうかしているのだ。だからわたしは今回の探索行にロボットを持って行くつもりは全くなかった。予備部品を山ほど抱えていればなんとかなるだろうけど、そんなことができるわけがない。わたしたちはロボットの耐久試験をしにきたわけではないのだから。

「・・・ってことで、ロボットはやめ。いいわね」わたしはにつきり微笑んだ。室内のため息が増えたような気がしなくてもないけれど、全然気にしないことにする。

「それだけでいいのか？」

「特殊な装備はね。ウィルス採取キットはもうもってるし、ジャングル踏破用の装備についてはいまリストをプリントアウトしてるからあとで提出するわ」

そう答えつつ、わたしはOMの言葉に不安を覚えはじめていた。いくら何でも大盤振る舞い過ぎる。だいたいこれでは全然《氷》らしくないではないか。

「君の要求した装備にガルガリン《座天使》での常時監視体制を追加させよう」OMがあっさり言った言葉にわたしは心底驚いた。トリアギオンが所有している4つの監視・通信衛星をたった一つのチームへ優先的に割り振るというのだから驚かない方がおかしいのだが。

「ちょっと。どういうつもり？」ひどく不安になっていた。ひよつとしたらこの「貸し」はひどく大きなものにつくかもしれない。

「スウィントン対策だ」

「それは分かってます。けど、いくらなんでも」

「我々は、彼に深刻な疑惑を抱いている」穏やかな口調でOMは

言った。

「具体的に話をしてください」

「5年まえのことだ。合衆国中西部のある町で奇病が発生した。症状は運動障害、痙攣、呼吸困難、高熱、意識障害。一種の脳炎だが、治療法が見つからなかった」

あの病気だ。間違いなく。

誰かが深く息を吸い込んだ。

「町民は隔離され、治療を受けた。隔離の指揮を執ったのは・・・

」

「スウィントン」誰かともなく言った。

「ビンゴ」だれも笑わなかった。「町民の何割かは細菌戦の専門家であるスウィントンがすぐさま飛んできたことに不吉な符合を覚えたが、すぐにそれどころではなくなった。患者がばたばたと死に始めたんだ」

「・・・で、どうなったの？」

「3週間後、伝染病は終結が宣言された」

「終結って・・・」

「終結だ。分かっていると思うが、治癒ではない」

「つまり、感染者はだれも助からなかったのね。・・・公式発表は？」

「マスコミへの公表はなかったが、議会へは報告があった。どうやら住民のひとりが飼いはじめた南米産のサルが未知のウイルスに感染しており、それがどうやら今回の惨事の原因らしい。と。なお、ウイルスの抽出は失敗したとも説明された。議会はその説明を受け入れ、その件は封印された」

「全くマスコミへ公開されなかったの？」

「ああ」

「アメリカ国内なのよ！」

「当時のタブロイド紙を読んでみたまえ。町がひとつ雪崩で消失したとか何とかの記事が見つかるはずだ。とにかく、彼はその奇病

に対応できなかった責任をとらされて研究所の所長を解任されたことになっている」

「それだけが理由？」

「ちがう」

「じゃあ、なに？」

「我々は、彼とその部下が感染者とのおそれのある町民を処分したと考えている。正確な資料はないが、100人を越えていたのは確実だ」

「畜生。それがあいつの輝かしい経歴の第一歩ってわけか」誰かが吐き捨てた。私も同感だった。

「・・・クビになるのも当然よね」

「これだけは言える。あの男は狂人が脅迫観念の虜だ。だから、我々はそれなりの対応をする必要がある」

「我々、じゃないわ。わたしたち。まあとにかくありがと」わたしは立ち上がった。「助力は感謝するわ。これだけの装備があれば仕事は楽になるのは確実。行方不明の調査隊をきっちり見つけて帰ってくるわ」

身を伸ばしてプリンタからリストを取り上げ、OMへ渡す。

「はいこれ。さっき言ったりリスト」

そして、とびっきりのオリエンタルスマイルを浮かべ、ついでにウインクしてみせる。

「あのクソつたれの大佐については心配しないで。可能な限り流血は避けるつもり。だからあとは貴方しだいね。立派な餌になってあげるからちゃんと奴の首根っこを押さえられるだけの材料を集めてよ」

そう、わたしはOMの申し出を聞いた途端にその意図を理解していた。

「持ちつ持たれつ。と言ってほしいね。あの男はもはや《財団》からも危険人物だと見なされている」OMの表情は平坦なままだったが、私の表情はこわばった。

その言葉がある種の死刑宣告であることに気づいた人間は室内に5人といなかったろう。

「いずれにせよ、誰かがくい止めなくっちゃいけないのよ」

わたしは無理矢理ほえんでみせる。突然脳裏に呼び起こされたあのイメージに対抗するために。

ナパームで一瞬のうちに燃え尽きる人と家屋のイメージに、瞬間的な炎に吸引されて起こる微風感覚に対抗するために。

そして、そして、動けない患者とともに残ることを選択したあの人の笑顔を思い出さないために。

「行くわよ」

声が震えていることに気がついた人間は、何人いただろうか。

ノックはまだ続いていた。

だが、私は気にしなかった。

「大佐、スウイントン大佐！」呼びかける声には緊迫した響きさえあった。

私は視線を落とす。細い水流のなかで骨張った手が濡れて白く光っていた。

それは軍人の手ではなかった。弱々しい学者の手だった。私はそれに嫌悪を抱いた。

「どうした」ドアの取っ手をペーパータオルでつかんで開け、大股で歩きながらオフィスへ向かう。

「い、いえ。洗面所で15分も過ごされているので、どうされているかと・・・」巨漢の少佐が背中を丸めおどおどと言いつく。

ひどく不快だった。

「だからどうした」

「い、いえ」

「ならば黙ってる」そのままオフィスのドアを勢いよく開けた。兵士たちが飛び上がった敬礼する。

「進展があつたか」

立ったままの私に電文が差し出された。手袋をはめてそれを読む。国際救助隊・トリスアギオンの一隊が「汚染地域」へ侵入したとの報告だった。

「彼らは衛星および、偵察小隊によつて完全に捕捉・追尾されています。決して見失うことはありません」

「そう願いたいものだ。4個小隊、150人近いレンジャーで包囲しながら調査隊を取り逃がし、あまつさえ損害を出した君の前任者のような真似はごめんこうむる。君も彼のようにアラスカへ移住するつもりはないのだろうか？」

「もちろんです！分かつております」少佐は緊張し、恐怖に支配されていた。いい兆候だ。

「悲しいかなかれらはあまりにも無知だ。彼らは感染者を救おうと無為な努力を重ねたあげく、危険きわまりないウイルスを無垢な世界へまき散らしてしまうのだ」

「ならば今のうちに彼らを拘束すべきです。あるいは阻止すべきです」

「それはできない。トリスアギオンは《財団》の傀儡にすぎない。もし、我々がトリスアギオンを阻止すれば《財団》はここぞとばかりに我々を非難し、我々の両手両足を縛るだろう。《財団》にはモラルはない。トリスアギオンの名前で人道を語りつつ着々と影響力を大きくしている。得体のしれん方程式をひねくりまわすAIが市場から搾り取った実体のない莫大な金と、マスメディアを牛耳ることとでな。明々白々な証拠を手に入れなければ、我々は畏にはめられてしまう」

ふと視線を感じ、壁際を見た。クラウド・ディックマンが、あの生意気な大尉が壁にもたれたままこちらを眺めていた。

「何か言いたいことでも？大尉？」

ディックマンは肩をすくめた。なんとも無礼な男だ。この男は階級差を全く気にもしていない。もしこの男が国防総省から直接派遣された男でなければとづくに送り返しているところだ。しかしそれにしても、この男が入隊前に生物学を専攻していたという経歴だけで私のお目付役に据えるとは国防総省の文官どもの知性を疑わざるを得ない。

「なにも。ただ、今のお話の-contentはずいぶん時代錯誤だと思っただけで」

「トリスアギオンがやろうとしていることが災厄を呼び起こしかねないことにかわりはない」

ディックマンは再び肩をすくめた。

「なぜ封じることのみに全力を傾けるのです？」

「封じるのではない。我々でないとあのウイルスを扱えるものはいないというだけだ。5年前の事件については君も知っているだろう？専門家である我々ですらなすべがなかった」

「質問を変えましょう。なぜウイルスの分離に成功していることを公表していないのです？」

この男が、いや、国防総省がそこまで知っているのは驚きだった。「それは正確な情報ではない」私は細心の注意を払いながら言った。「我々が分離に成功したのは変異体だ。このウイルスは感染者ごとに形態を変えるほど変異の速度が速い」

「だから封じる？ブラジル政府と裏取引までして？」

「そうだ。あれは厄介すぎる。抗ウイルス剤を作ること弱性化してワクチンにすることもできなかった」

「そんな厄介なものがよくいままで人目に触れませんでしたな」

「感染率が低いことと感染源が奥地だからだろう。だが、トリスアギオンはパンドラの箱を開けようとしている」

「なぜそう言って彼らを説得しないのです？」

「言っただろう。トリスアギオンの背後には《財団》がいることを。彼らはトリスアギオンを使ってウィルスの特種を手に入れ、よからぬ事をたくらんでいるのだ」

「それは貴官の個人的な意見なのでは？」

「それ以上の発言は私に対する侮辱と見なすぞ」

彼はまるで分かっているようだった。あのウィルスがいかに危険であるかも、トリスアギオンをやつるものたちがいかに邪悪な存在であるかを。

「失礼します」沈黙を破つたのは通信兵だった。「動きがありました。トリスアギオンが何かを見つけたようです」

私はうなずいた。「現場へ急行する。状況次第では制圧もありうる。急げ！」

室内の動きが急激に慌ただしくなった。私も副官に促されてヘリポートへ向かった。

ディックマンはまだ、こちらをにらみつけていた。

「カホさんてば・・・ホントかっこいいよね。ね？パトリックもそう思うよね？」

サーシャからその質問をされたのは、ターナー先生たちが行方不明になったキャンプサイトにヘリで降りてからも何回目だろうか。僕はため息をつかないように努力しながらゆっくりとうなずいた。

「そう思うでしょ！やっぱり女はああでなくっちゃ！」

「はあああ」

ため息をついたのは僕じゃない。イスマイルさんとトスカさんだ。思わず振り返る。二人は完璧にそろった動作で顔を見合わせ、それから天を仰いでいた。

「その態度はなんですか？あなたたち二人とも、カホさんの部下なんですよ」

ジャングルの獣道・・・実はインディオの「生活道路」なのだそうだ・・・を歩きながら器用にくりと後ろを向いてサーシャは二人を非難した。またもやそろって顔を見合わせる二人。

「たしかに彼女は格好いい」とイスマイルさん。

「頭の回転も速い」これはトスカさん。

「腕っぷしも結構強い」

「さらにそのうえ美人でもある」

「だけど・・・だけど、それ以上に彼女はワガママで横暴で、向こう見ずで負けん気が強くて、自分の間違いをみとめなくて・・・さらに！人使いが荒い！」恐ろしいことに二人の声は完全にハモっていた。

でも、サーシャはぜんぜんめげない。「それがなによ？なにが問題なのかしら？」平然とそう言い放ち二人は沈黙する。腰に手を当てたその姿はカホさんそっくりなことに気がついて僕はちよつと驚く。モーガンさんがなんども首を振りながら僕たちを追い抜いていた。

「サーシャ！ちよつと来て！」先頭を歩いていたカホさんが不意に叫んだ。

「はいっ。すぐ行きますっ」ターナー先生のスケッチブックを胸に抱えたまますっ飛んでいくサーシャ。

「4時間も歩き続けなのに元気なこつた」イスマイルさんが苦笑する。

「そうですね。今まで見たことがないくらい元気です」

「そうなのか？」

「うん。以前はどつちかって言うと、みんなが一生懸命やってる

のを冷ややかに見てるって言うか・・・」どうしてもこのことになると齒切れが悪くなる。「とにかく、今のサーシャのほうがいいですよ」

「ふふーん」とトスカさん。笑い方が気持ち悪い。僕は彼をにらみつけた。

「おいおい、そんな怖い顔するなよ。しかしなあ、よりもよつてカホを手本にせんでも」

たしかにそうかも。だけど・・・。

「けど、二人ともカホさんの命令にごちゃごちゃ言いながら嬉しそうに従ってるのも事実ですよね」

「ま、まあね。たしかに彼女、言うことキツイけど、ときどきにこつと『お願い』ってやるんだよ。な？」

「そうそう。そうなんだよ。耳元でああ言われると・・・つい・・・」同意を求められたイスマイルさんも頷く。

・・・変な人たちだ。

僕はそう思う。カホさんの行動に批判的なはずの二人ともけろりとした顔でこの探査行に参加している。

違う。この二人だけじゃない。ほかの隊員たちもそうだ。

ちよつと考えるだけでこの探査がひどく危険なことは分かっているはずなのに誰一人として参加を断っていない。

・・・なぜなのだろう？

そして気がつく。

なぜ、僕もここにいるのだろうか？

分からなかった。

でも、行くのは当然だと感じていたし、引き返すのは絶対に嫌だった。カホさんに説得されても従う気にはなれなかった。

ただの意地なのだろうか？それとも別の理由なのだろうか？

ほかの隊員もみな、僕と同じ理由なのだろうか？

いつのまにか僕たちは少し開けた土地に出た。そこではカホさんたちがひとかたまりになって小休止していた。

「休憩かな」

「違います」 トスカさんにそう言いつつ、僕はサーシャに近づいた。

「この景色、見たことあるよね」彼女が開いているスケッチブックをのぞき込む。「同じ場所じゃないと思う。背景がちがうし。でも・・・同じものよ」

僕は視線を目の前の広場へ戻す。

そこには大人2人分の高さのある石の柱と石造りの台があった。それはスケッチブックに貼られた写真とまったく同じに見えた。

「準備できました。あと20秒でコンタクトします」

地面に置いたキャリングボックスを操作していた隊員が顔を上げる。わたしはうなずくとヘッドギヤのスイッチを入れる。目の前の光景にうつすらとしたオレンジ色の小円が重なった。視線と円の中心は少しずれている。

わたしは右手で握ったコントローラーを操作し、小円・・・ポイントと視点のズレを調整した。

「ようし」つぶやいて左右に視線を振る。ポイントは敏感にそれに追従した。

「あと10秒」わたしはもう一つのスイッチを入れた。ガリガリとイヤホンに入る雑音に顔をしかめる。

「3、2、1、どうぞ！」雑音が急激に小さくなった。

「こちらはヒューストン・コントロール。ミズ・カホ、聞こえていますか？」

「こちらはカホ・カンナヅキ。感度良好。映像はちゃんと送られているかしら？」

「ええ、もちろんです。後ろの部屋では考古学者さんたちが大騒ぎしていますよ」

「OK。余裕があつたら先生たちの見たがつているものを見てあげるわ。じゃ、本題に移るわね」わたしは5000キロ近く離れている同僚に呼びかけた。わたしが身につけているヘッドギヤにはカメラと通信機、さらに私の網膜に直接映像を結ぶディスプレイが取り付けられ、もうひとりの隊員が操作しているキャリングボックスを介してトリスアギオンが所有する調査／通信衛星《座天使》へ送られる。つまり、わたしが見たものをほかの人間に分析してもらうこともできるし、逆に向こうがわたしに見せたいものを見せることができるのだった。

その機能のすばらしさをわたしは2年前に実感していた。そのときわたしはこのヘッドギヤ（と多くのエンジニアたち）の力を借りて3機分の《プラエファティオ》の残骸から1機の稼働機を組み上げることができたのだ。わたしはその日までロボットの点検はおろか修理なんてやったこともなかった。そもそもわたしは車の点検もAV機器の接続も自分でやったことがないほどのモノグサだったのに。

いいことずくめの機器なのだけれど問題があるとすればむやみに高価なことで、衛星と通信できる間しかデータのやりとりができないことだろうか。今、わたしは赤道付近にいたので比較的通信時間は長くとれる。だが、見通しと衛星の数の関係もあっていいところ15分おきで連続10分程度しかやりとりはできない。

わたしはてきばきと説明を始めた。

「衛星の赤外線映像が捉えていたのはこの遺跡に間違いのないわ。位置もほぼ同じだし。さらにターナー氏の残した写真のそれとも形状は一致します。彼らがここに立ち寄った可能性は高いわね」

「了解。ゆっくり広場を見回してくれ」言われたとおりにゆっくり

りと首を動かす。こめかみのところにつけられたカメラがヒューストンから操作されてズームしている。

「ストップ！」広場の中央に差し掛かったときヒューストンの男が叫び声を上げた。「中央部の植生がちょっとおかしいそうだ。そこだけ新しい」わたしたちは広場の中央へ駆け寄った。言われてみるとその草は周囲と比べて若いような気もする。ジャングル走破の本職でない、いや、救助そのものをのぞけばあらゆる点でその道のプロに劣るわたしたちが実績を残せるのはこのバックアップ体制があつてのものだ。

モーガンがスコップで指摘された箇所を掘り返し始める。2分足らずで彼はたき火のあととタバコのフィルタを発見した。

「間違いなしね。彼らはこのあたりまで来てるわ。次にどこへ消えたかは・・・」

「彼らがここでなにを見つけたか推理するんだ。そうすれば分かる」

「言うのは簡単だけど、ちょっとそれって厄介よ」

ちよつとどころではなかった。

かなり厄介だった。わたしははるか彼方の科学者たちの指示に従つてあちこち歩き回り、掘り返し、石柱と石台のクローズアップを撮影し、その表面をレーザーであぶつてスペクトル解析まで行つたが得られたものはごくわずかだった。

「要するに、調査隊は西側の二本の小道のどちらかを通つてどこかへ行つちやつた。と」わたしはため息をついた。喉がからからだった。ここまで判別するのに4時間近くかかつていた。

「その小道だけ草が踏み分けられていた、という推理の結果にすぎん。あくまでも」相手の声も疲労していた。

「ねえ。この石柱や石の台から何か分からないの？それが分かればレイドロー氏や調査隊がどこへ向かうとしたのかも予想できるんじゃないかしら？」

「それがさっぱり分からない。とセンセイたちは言っている。後ろの部屋じゃ大激論だよ。そもそもこれがいったい何のために造られたものかって点で」

「・・・だから学者さんって・・・ねえ、せめて二本の小道がどこへ通じているかぐらいは分からないの？」

「それも難しい。ジャングルが天蓋になっていて赤外線撮影でも確実な映像を得られなかった」

この役立たず。

「コインでも投げて決めるわ。たくもう」わたしは小休止を取っているメンバーを振り返った。みな、思い思いの姿勢でくつろいでいる中でサーシャとパトリックだけが石柱を見ながら何かしゃべっていた。

「宿題かしら？」

わたしが呼びかけると二人はぱつと振り返る。

「こんなの普通見れないでしょ」爪先立ったままサーシャが言った。その後ろでパトリックがせつせとスケッチをしているのが微笑ましい。

「カホさん、これ、やっぱり飛行機に見えませんか？」

パトリックが困惑した表情でスケッチブックを見せた。

そこには飛行機と言えなくもないものと表面に複雑な文様のある箱、そして手が妙に長い人間・・・が描かれていた。わたしはそれと石柱を見比べた。

彼のスケッチは石柱に刻まれた線画・・・その線の細さは1ミリもなかった。レーザーも使わずにこんな加工ができるのだろうか？・・・とほとんど違いはない。隣に弓を持ったインディオが並んで描かれ、それらの巨大さを表現しているところも同一だった。

「そうねえ。だけど・・・多分鳥じゃないかしら？ここは民間航路からも離れているし」

「だけど隣の人間のスケールから見たら、この『鳥』は全長50メートルを越えてますよ」

それもそうだ。だが・・・

「もしこれが飛行機だとしたら、彼らは実在しない機体をスケッチしたことになるわよ。コ・デルタ翼付きの大型機なんて聞いたことないわ」

うつとパトリックが言葉に詰まった。

「これはインディオたちの想像の産物じゃないかしら。彼らがいわゆる未開の種族でも、イマジネーションが欠如しているわけじゃない。現実にあつた出来事からイメージを膨らませて・・・あっ！」
現実にあつたできごと。

飛行機、箱、大きな人間。

わたしはあることに気がついた。

「ヒューストン。まだ聞こえる？」

「なんとか」かなり音声はかすれていた。

「ちよつと調べて欲しいの。この近所でトリスアギオンがミッシヨンを行ったかどうかを。正確には物資の空中投下ミッシヨンね」

「ちよつと待て。・・・ああ、出た。5年前に一度やっているな。そこから300キロほど離れた村でジフテリアが流行したので医療品を投下したことがある。医師も降下してるな」

「ありがとう」

「どう・・・たし・・・で・・・1じ・・・に」衛星が見通し内から消えると同時に音声はとだえる。わたしはヘッドギヤをはずした。

「カーゴカルト、ですな」

「たぶんね」わたしはモーガンにうなずいてみせ、怪訝な表情を浮かべる少年少女に説明する。

「なんとなく分かったわ。ここに描かれているのはわたしたちトリスアギオンよ。この『鳥』は輸送機、『箱』はコンテナ、『巨人』は『プラエファティオ』つまり、ロボットね。ディテイルがあやふやなのは伝聞だからかしら。過去に私たちが行った救助活動が一種の物語というか、寓話として石碑に刻まれたのよ」

分かってしまうと単純な話だった。彼らは空からやってきた「神」……確かに救いの神に違いないが……をあげ、その再降臨を祈っていたのだろう。

それにかかった労力を考え、わたしは少し物悲しくなると同時に腹を立てはじめた。この石柱は少なくとも4トンを超えているし、専門家に言わせれば隕鉄に近い材質でとても加工が簡単とは言えない。

わたしは説明を続ける。

「カーゴカルトってのはもともと太平洋の、ポリネシアやミクロネシアの住民たちが始めた信仰形態なの。始まったのは比較的近代。西欧から大量の物資が流れ込んできて彼らの生活は一変したの。だけど彼らはそれが「同じ人間」である欧米人からもたらされたものと考えずに、海の彼方にいる神が彼らを代理人として物資を送ってくれたと考えたらしいわ。だから彼らは木箱や船の模型を祭壇に掲げて、神が再びやってきて自分たちを楽園へ連れていってもらえるように祈ったの。ヨーロッパ人たちがその島々に興味を失って物資がとれたあとも」

「カホさんはこれがたった5年でできたって言うんですか？」「サーシャが石柱をぴしゃぴしゃと叩きながら尋ねた。「こんな重い物を人力で立てて模様を彫ったんですよ。それにこれはこー一つだけじゃないんですよ？」

「そうね」とわたし。「この石柱の素材はスペクトル解析によると隕鉄らしいわ。だけど、これはここに落ちたんじゃない」

「落ちてたら大クレターになってますもんね。ウツノミヤ事件みたいに」こんどはパトリック。

「つまりどこからか持ってきたってことなのね。4トン近いものをジャングルかき分けて」

だんだんわたしも自説に自信がなくなってきた。あまりにこの遺跡はおかしな点多すぎる。

「とにかくこれがいったいなんなのかはヒューストンに任せまし

よう。あるいは、ターナー先生を見つけて本人に聞くしかないわね」強引に議論を打ちきるとわたしはサーシャにウィンクした。

「そうね」少女も肩をすくめて微笑した。

「じゃ、行くわよ・・・って、どっちにしようかしら」二つに別れた小道を前にわたしは一瞬途方に暮れる。確立は二分の一。それどころかもつと悪い。選択の材料が少なすぎる。

「あの・・・カホさん。僕はたぶんこっちのほう为上流に近いと・・・」

「だめ。パトリック。道が踏み分けられてるのはそっちじゃなくってこっち」サーシャがパトリックの言葉を遮り、パトリックが指さしているのとは違う道を示した。わたしは少年に視線を移動する。サーシャもそれにしたがった。

「あ・・・僕もそっちで・・・いいです」

「・・・決まりね」わたしは荷物を背負いなおして歩き始めた。ま、どっちにしても50パーセントだ。たいした違いがあるわけじゃないし。

後ろから盛大なため息が聞こえた。思わず振り返る。イスマイルとトスカと、さらにモーガンがゆっくりと首を振りながらバックパツクの紐を調整していた。

「なぜ止めないのです？軍の反応はご存じでしょう？彼女たちは間違いなく汚染地帯へ進もうとしているのですよ」

資料に見入っているOMへ私は詰問する。だが、彼は黙ったままだった。まさしく彼は《氷》だった。

「さっきの演技はうまかったな。カール。カホはずいぶん君を嫌っていたぞ。ああいう官僚めいた対応を彼女は一番嫌う」

「はぐらかさないでください。OM。どうして彼女を危地へ追いやるのです。あなたのやっていることは犯罪です」

「誰かが行方不明の探検隊を探さなければならぬ。誰かが病原菌の源を探し当てなければならぬ。だれかがあの狂った男と対決しなければならぬ。それがカンナヅキ・カホではいけないのかね？」

狂っているのはこの男だ。私は思った。

「あなたは彼女の復讐心を利用してスウィントンへ報復しようと考えているんだ。それは決してトリスアギオンがやるべき事ではない！トリスアギオンを守るのは、自らの武器ではなく『武器を向けようとするものの良心』や世論ではありませんか」

「カール。君はいまさらスウィントンの良心に期待するのかね？」

「ええ、おっしゃるとおり確かにあの男は危険です。ですが我々がやるべきことは殺人者に懲罰を与えることではなく……」

「彼女たちを死なせないことだ。そのための支援体制だ」OMは素っ気なかった。

「彼女にもしなにかあれば、親族が黙っていないでしょうな。いくらじゃじゃ馬とはいえ、なんせ日本の名だたる……」こんなことしか言えない自分を私は恥じていた。

「だろうね」

「OM……あなたとスウィントンの違いはどこにあるのです？」

私はいつのまにか激昂していた。「どちらも規則を無視し、横車を押し、そして命を軽んじる！」

「そうだ。私と彼は鏡に映った像のようなものだ。自分の無謬を信じているところもおなじだな」

私はため息をついた。何を言っても無駄なようだった。いいだろう。なにかあればそれは彼の責任だ。

私は立ち去ろうと席を立つ。

OMは引き留めようとせず、机の上に並べた資料をじっと見つめていた。一つはカホのカメラがとらえた画像のハードコピー。もう一つはひどく古い写真だった。ただどちらにも細い線で手が妙に長い人間と三角翼を持った鳥が描かれていた。

その二つは、私にはまったく同じものに見えた。

けっきょくあたしの判断は正しかった。

それが証明されたのはさっきの広場を出発して1時間ほどたったころ、小道が再び広場につながったときだった。

「ね、あたしが正しかったでしょ？ここにも石柱と石台がある」
あたしはパトリックを振り返る。

「そんな自慢たらしく言わなくってもいいじゃないか」彼は唇を尖らせた。

「だってあたしのほうが正しかったんだもん」

パトリックは黙ったまま石柱へ向かうとスケッチを始めた。肩をすこしいからせている。

・・・つまらないヤツなんだから。

あたしは彼に声をかけるのはやめにしてぶらぶらと広場の端へ歩いていった。この広場はさっきのとは違って頭上は開けておらず、熱帯の木々が暗いアーチを描いている。さらにツタや雑草が茂っていて随分荒れた感じさえしていた。何だか不吉なイメージさえあった。

気配を感じて振り返る。スケッチブックを持ったパトリックがこっちへ向かっていた。素知らぬ顔でそのままジャングルのほうへ目を凝らす。「密林」というには程遠いほど木々の間には隙間が開いている。もちろん背の低いツタや灌木は茂っているのだけれど。きつとこれは背の高い木に日光が遮られているせいだろう。

「サーシャ。こっちの石柱にも刻印があつたけどさっきのとまるで同じだったよ。だけど、石台のほうは・・・」

あたしはパトリックをちょっとだけ無視することにした。すぐ怒る男の子にはいい罰だ。

「サーシャってば、聞いているの？」あたしは返事をしてやらなかった。

「おやおや、お姫様のご機嫌を損ねたのかい？」近くで煙草を喫っていたイスマイルさんが面白そうに声をかけてきた。

「違います。もともと彼女が・・・もう、俺、怒るよ！」怒つてごらんなさい。絶交してやるもん。

「ったく・・・えっ？え？なに？」なに言ってるのよ。気を引こうとしてもダメだからね。

「サーシャ！」急にパトリックの声が変わった。優しいんだけどまったく有無を言わせない響きがある。あたしはそれにカチンときた。

「なによ？偉そうに」

「そこから動かないで。じっとしていて」

「なに？アンタあたしに命令するつもり？」

「蛇なんだ」振り返ろうとしたあたしの動きがとまった。どうしていいか分からない。だいたい、蛇がどこにいるかも分からない。

「う、嘘、どこにいるのよ」

「君の目の前。嘘じゃないよ」ささやき声が聞こえた。いつのまにかパトリックがすぐ後ろまで来ていた、右腕にそつと手が触れる。「パトリック。場所を教えてください」目だけを動かして横を見る。

モーガンさんが荷物を落としてライフルを構えていた。

「僕の目の前に木があります」

「ああ」すぐ前の木の根元に赤い光点が浮かび上がった。

「その木の下から3番目の枝」光点が静かに上昇して枝の根元で止まった。「そこから先に20センチほどで尻尾、そこから1メートルほど枝に沿ったところで・・・口を開けてます」

突然、さっきまで木の枝だと思っていたシルエットがバ力でつかい蛇のものになった。ほんとにすぐ目の前だった。

嘘じゃなかった。そいつは枝に巻きついて体を支え、あたしに向かってかっかと口を開けていた。鋭い二本の牙から粘りけのある透明な液体が垂れていた。どうして今まで見えなかったんだろう。

「OK、こつちも見つけた。じつとしてろ。3, 2, 1・・・」

乾いた音と同時にパトリックがあたしを引っ張り寄せた。悲鳴を上げて尻餅をつく。

「よし。片付いた。よく頑張ったな」モーガンさんがライフルを降ろし、額の汗を拭った。

あたしは恐る恐る枝を見上げた。その蛇は頭部を失ったまま枝に体を巻きつけ、尻尾が力なく揺れていた。

まだパトリックがあたしの右腕をつかんだままのことに気がついた。同時に彼の手が震えていることにも。彼を見る。彼は今にも泣き出しそうだった。

だけど、私は何も言えなかった。

あたしももうすこしで、泣いちゃいそうだったからだ。

「よく気がついたわね」わたしは手放して蛇を発見したパトリックを賞賛した。落ち着きを取り戻した少年は恥ずかしそうに言う。

「視野の周辺で何か動いている気がしましたから。でも、まっすぐ見ると見えなくなっちゃって・・・」

「人間の目ってそういうものらしいわ。とにかく、ほんとうにありがとう」

パトリックはぎくしゃくと微笑むとモーガンの側へ小走りに駆けていく。よほど照れ臭かったらしい。

「すごいライフルですね」少年が尋ねていた。

「《M82A1-AMR》だよ。対装甲狙撃銃。徹甲焼夷弾を使えば重戦闘ロボットも相手にできる」

「ほんとう?」

「ああ」

モーガンが穏やかな口調で答え、石柱に描かれた人型を指差しながらロボットの弱点を教授していた。肌の色の違いさえなければまるで祖父が孫に狩りの仕方を教えているような光景だった。

「カホ、ちよつときてくれ」イスマイルの叫び声がわたしを我に返した。

「なに?これ」

「煙草の吸い殻じゃないみたいだな」

1メートルほど掘り下げた穴の底には炭化したなにかが転がっていて、さらに土が一部ガラス化していた。その穴の部分だけ植物相が違うので気がついたらしい。

「完全に焼き尽くされてる。焼夷弾かテルミットでも使ったのかしら。少なくとも埋めたのは調査隊じゃないわね」わたしは首を傾げた。

「なんか、ヤバい廃棄物をまとめて焼却処分した感じなんだよなあ。サンプルとりますか?」

穴の縁にしゃがんでいたトスカが振り返る。

「お願い。でも直接手に触れないようにして。保管容器も密閉してね」

「了解」トスカはマスクをつけて腹這いになると採取ロッドを伸ばした。「大半は骨みたいですね。あとは土器片かな?鉄器もある。そっぴやインディオに火葬の風習ってあったのかな?」

「ない・・・と思うけど。それに鉄器もないはずよ。それから・

・
」

「カホ！」イスマイルの押し殺した声がした。

「あとになさい」

「そんな暇はない。お客さんだ」

わたしは顔を上げた。確かにお客さんだった。

いや、お客は私たちかもしれない。彼らの世界へ闖入したのはわたしたちなのだから。

広場の周辺には弓を構えたインディオたちが無表情のままずらりと並んでいたのだった。

「どこに連れていかれるのかなあ」

インディオたちに拉致されて2時間以上も歩きつづけで僕はくたくたになっていた。自然にぼやきが多くなる。

「直接聞いたら？機嫌がよければ教えてくれるかも」

それなのにサーシャは強気というか、僕に対しては容赦がなかった。自分の荷物をぜんぶ僕に担がせてるくせに、だ。

「あんなに無表情なんじゃ、機嫌がいいかどうかなんてぜんぜん分かんないよ」

「アジア系ってみんなそうなのかな・・・って、そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！そんなくだらないコトしてると干し首にされちゃうぞ」

「干し首って？」

「人間の頭の皮をはがして、詰めものをしてミイラにしたもの。頭蓋骨がないから人の頭がコブシくらいになっちゃうの。『パトリ

ツク・オケーシーの頭部ミニチュア』なんかが数ヶ月後に発見されたらさぞかし話題になるでしょうね」

・・・そのときはサーシャ・タチアナのミニチュアも完成されると思うんだけど。

「君たちつて見てて飽きんな」トスカさんが苦笑していた。

「この子がバカなだけです」とサーシャ。よく言うよ。

「まあ、インディオたちに敵意が見えないからな。緊迫感もなくなってくるよね」トスカさんはカホさんに担がされていたロケット発射機をみんな取り上げられ、さらに通信ユニットまでもつていかれたのでさっぱりした顔つきだった。

「調査隊も彼らが連れてったんでしょうか？」

「その可能性は高いね」

「だったら先生と会えるかも」サーシャは嬉しそうだ。状況を理解してないのは彼女のほうかもしれない。

あつ、とサーシャが声を上げた。目の前が開け、集落がその姿をあらわしたのだった。

「石柱がここにもあるわね」カホさんがつぶやいた。「数も多いわ」

どこからかどよめきが上がった。歓声さえ聞こえてくる。

「経緯はどうあれ・・・調査隊は発見できたわね」カホさんは苦笑していた。

広場の一画が区切られた柵の中に僕の知った顔があった。インディオたちの制止を振りきってサーシャがターナー先生へ駆けよっていく。

「問題は、どうやって連れ出すかね」

「それだけじゃありません」とモーガンさん「ウィルスの感染源をつきとめる仕事も残ってます。この任務、まだ前半ですよ」

「わたしはそれ、いっぺんに片付きそうな気がするけど」

「信じたいですな。この行軍、年寄りにはこたえましたから」

「とにかく、彼らとどう意志を疎通するかね。はやく彼らにスウ

イントンのことを教えてやらなきゃ。あと数時間で捕捉されるわ」

カホさんの言葉に僕は驚く。

「あれ？気付かなかった？ずっとつけられていたわよ」微笑む彼女の表情はひどく凄惨なものだった。「森の民であるインディオが気づいていないはずはないんだけどな」

「おそらく過小評価しているのでしょう。まあ、分からないでもありませんが」

モーガンさんが顎で指した方向にはボロボロになったM16小銃が十数丁無造作に積み上げられていた。

「分かってないのよ。スウイントンがどんな人間なのか」
つぶやくように彼女は言った。

完全気密の保護服を着た兵士がよたよたと歩き回るさまを、私はただ眺めていた。それはまるで悪い夢のような光景だった。

ここは数時間前にトリスアギオン隊員たちとインディオが接触した広場。そこへ2時間遅れでたどり着いた我々本隊は追跡を一時中断して調査を行っていた。

ガリガリと無線が鳴る。

「見つけました。トリスアギオンが掘った穴からさらに2メートル下でした」変調のかかった声で誰かが怒鳴っている。

「すぐに私も行く」防護マスクに接続されている通信ケーブルをぞんざいに引きぬくとスウイントンは私に向かって手を振った。付いてこいということらしい。

「ついたぞ」スウイントンは目の前のテントを指さした。

それはあまりに大げさすぎた。ふつうのテントにはあり得ないコンプレッサーがテント内の空気を濾過して吸い出し、内部の気圧を下げていた。さらに入り口にはジッパー付のエアロックであった。中のものが外へでていくことを彼らはひどく恐れているらしい。

その近くにはトリスアギオンが放棄した装備品がまとめて置かれていた。

スウィントンが黙ってエアロックをくぐる。私もそれに続いた。

「見たまえ」鷹揚に彼はテント内部を指さす。本来地面があるべき場所は3メートルほど掘り下げられ、ウインチが吊り降ろされていた。

不意にモーターがうる。ウインチが巻き上げられているのだ。数秒後、穴のそこらなにかが持ち上げられる。だがその腐敗した生物の形状を見極めることは難しかった。特に脊椎まわりがグニャグニャしてよく分からない。

だが、おそらくはナマケモノだろう。やや長めの前脚が私の記憶と一致していた。

「これがウイルスの『苗床』だ」

スウィントンが言う。その声は興奮で震えていた。

「ねえ、誰も言葉が分からないってことはないでしょ？危険が迫ってるのよ！だれか話のできる人間をよこしなさい！」

カホさんが柵をけっ飛ばして叫んでいる。英語で言っても分からないと思うけど。

「サーシャ！あなたポルトガル語できるでしょ。何か言ってみてやり

なさい！」

「えっと、その」あたしはターナー先生を見上げた。

「なによ」

「連絡役は旅に出ています。あした戻るそうです」先生があたしの替わりに答えてくれた。

「なんですって？」

「いま留守なの。言葉ができる人は」ほら、先生はただ捕まってるだけじゃなかったんだ。ちゃん跟他们とコンタクトがとれてたんだ。あたしには分かってたんだから。

「そうなの？」

「ええ、ここ数日は姿が見えませんか」先生の口調が微妙に変わっていた。あたしはちよつとむくれてしまう。

「ええつと、ターナー・レイドロー・・・先生・・・ね、そういえばちゃんと挨拶してなかったかな。私はカホ・カンナヅキ。国際スアギオン救助隊です」

「ターナーです」先生はカホさんに右手を差し出した。「連絡は取れましたか？」カホさんは首を振る。

インディオたちはあたしたちから通信機と武器のたぐいをすべて取り上げてしまっていた。とてもきばきしていて、的確だった。彼らが文明に触れたことがないなんて、本当なのかしら。

「インディオたちと接触する少し前からVHF（超短波無線）が妨害されてたわ。たぶん米軍のジャミング。本部は異常事態が起こったことは分かるでしょうけど・・・あまり期待できないわ。VR通信ユニットはさっきの広場に置き去りにしちゃったし・・・ところで、『連絡役』って？あなたたち、彼らとコミュニケーションが取れていたの？」

ええ。先生は穏やかな口調で説明した。彼らのごく一部はポルトガル語を話します。彼が言うには、我々を自由にするには月が一度満ち欠けするまで待たねばならないということです。

「月が満ち欠けするあいだ・・・およそ4週間他の人間と接触で

きないようにする。それが過ぎたら自由放免」カホさんは腕を組んだ。「貴方は分かっているとと思うけど・・・これ、一種の隔離検疫じゃないかしら」

「そうです。そして、彼らは正しい」先生は目を閉じた。「ここへ来て2週間後に、メンバーのうち4人が病気になりましたから」

「その症状は運動障害、痙攣、呼吸困難、高熱、意識障害。違う？」

「そうです」先生は少し驚いていた。「脳炎でした」

「その人たちは？」

「インディオたちが連れていきました。そして、私たちには・・・」

先生が袖をめくって二の腕を見せる。そこには治ったばかりの傷跡があった。

「インディオが矢じりのような物で傷をつけ、何かを塗りつけました。3日ほど熱が出ましたがそのあとは何もありません」

あたしは息をのんだ。

やりかたは原始的だけどこれは間違いなく予防接種だ。つまり、インディオはウイルスについての知識も、そのワクチンについての知識も持っているってこと！

「彼らに捕まったおかげでわたしの仕事、3分の2は片付いたみたい」カホさんが皮肉っぽく言った。「あとはここを脱出するだけか」

そ、それって一番大変な仕事なんじゃ・・・。

「その『連絡役』とやらが戻ってくるまでは待つしかないのかしら。まったくもう、しゃくだわね」腰に手を当ててため息をついてから、カホさんは突然柵の中に建っている小屋を指さした。

「女性用の小屋ってどれ？」

「え、ええ、一番右側ですが」

「水は使えるのかしら？」戸惑っている先生にカホさんは重ねてたずねる。

「ええ、大瓶にためてありますが」

「決めた。サーシャ、いらつしゃい」

大股に歩き始めた彼女にあたしは慌てて続いた。

「カホさん、どうするんですか？」

「くよくよしてもしかたないから、とりあえずは個人的欲求を満たすわ。サーシャも汗かいたでしょ？」

「・・・はい」

「だから水浴び。その三人！」カホさんは振り返って指をさす。そこにはトスカさんとイスマイルさん、そしてパトリックがいた。

「覗いたら・・・」カホさんはニヤリと笑う。「コロスわよ」

三人とも直立不動の姿勢でうなずいていた。

ジョルジュ・E・スウィントン大佐の失敗を目の前にしても私の気分はまったく晴れなかった。

あたりまえだ。命を失ったのは私の家族も同然の陸軍レインジャー部隊員なのだから。彼はゲリラ戦が（いや、通常戦闘が）苦手な自分の部隊を補強するために政治力を用いてレインジャーを1個中隊引きぬき、用兵のなんたるかも分からぬままそれをみすみす消耗させてしまったのだ。

それにもかかわらず、この男は私にこう言った。

「デイクマン大尉、レインジャーとはこんなものなのかね？」

「偵察部隊の編成を私が申し上げたように、軽歩兵主体にすればよかったのです」

怒りを抑えながら私は反論する。偵察任務の最も重要な点は自ら

が発見されにくいことだ。戦闘ロボットを使つての偵察など具の骨頂なのに、彼はまったくこっちのアドバイスを受け入れなかった。その結果、偵察部隊は彼らの目的地をつきとめたものの逆襲され、なし崩し的に本格戦闘に突入してしまった。

それだけではない。ゲリラ戦に関しては素人同然のスウィントンの部下どもが辺り構わず発砲したおかげで同士討ちまで起こっている。彼らは新兵訓練すら受けていないにちがいない。

2個小隊を失った我々は無為に2日を救助と再編成に費やされることになった。

だがスウィントンは鼻で笑っただけで会話を打ち切る。「彼らの集落の位置が分かった以上、後は揉みつぶすだけだ。そう言いたげだった。

スウィントンの言動は私を不安にさせた。

ウィルスを封じることと伝染病の被害を防ぐことは必ずしも同一ではない。それなのに彼はひたすらに感染者の処分を主張してはばからない。

そもそもどうしてここが「原種」のありかということを知っているのかもよくわからない。

確実に分かっているのは、スウィントンは我々の知らないなにかを知っていることと、いまはウィルスの恐怖のためにスウィントンの暴挙を黙認しているブラジル政府が態度を変えたとき、最初に切り捨てられるのは我々レインジャーだということだった。

私はため息をつき、オブザーバーの一人としてヘリに乗り込む。

自分がここまで無力だと感じたことはなかった。

攻撃は唐突に始まった。

警告もなにもなかった。いかにもスウィントンらしいやりかただった。

わずかに幸運だったのはなんとかわたしたちが《メッセンジャー》と意思を疎通することができたことだった。ただしインディオたちはひどく傲慢だった。こっちの抗議を右から左へ聞き流すし、スウィントンの脅威に対しても平然としていた。もっとも後者の方は仕方ないことかもしれない。彼らはスウィントンの手先どもにかなりの被害を与えていたのだから。

だが、突然状況が変化した。歩兵がまず包囲網を固めてインディオたちの浸透攻撃を防ぎ、戦闘が激化すると攻撃ヘリと戦闘ロボットを呼び寄せはじめたのだ。

本来なら密林内でのロボットの運用は移動力の低下という要素で制限される。ところがヘリによってピンポイント空輸されるのならそのハンディキャップは解消されてしまう。そのロボット・・・わたしたちの使う《プラエファティオ》の軍用バージョン《ベーオウルフ》の装備する重火器と火炎放射器はインディオたちのゲリラ戦法を文字通り粉碎した。集落には続々と負傷者が送られはじめ、ここで初めて彼らは自分たちの読みが甘かったことに気がついた。

それをわたしは、わたしたちトリスアギオンは柵の中から見守るしかなかった。もはや時間の問題なのは分かっていた。集落に数発のロケット弾が着弾し、建物のいくつかが燃えているのだ。黙って蹂躪されるわけにはいかない。

「イスマイル、トスカ。やるわよ」監視の目がなくなったことを確認したわたしは二人に声をかける。彼らはうなずくとベルトからワイヤー・ソーを取り出した。

「まるで出来の悪いスパイ映画みたい」トスカがつぶやいて柵にワイヤーを絡ませた。

「その必要はない」

突然声がかかった。英語だった。そこには一人のインディオの若者が立っていた。まったく気配を感じさせなかった。まるで風とともにそこへ出現したようだった。

「移動する。ついてこい」若いにしては威厳のある声だった。

「解放してくれないの？」つい語調が荒くなる。「それにあんただれ？」

「私は・・・」若者は名乗った。が、聞き取れない。「まだ君たちは危険だ。村へ連れていく。そこには・・・」彼の眉が寄る。なんとか適当な単語を見つけたそうとしているらしい。「『ファーム』がある。そこで薬をあげよう」

「薬？」

「『病気になる前の薬』だ。数がなかっただろう？」

ワクチンのことだ。確かに全員がターナー先生のいう「予防接種」を受けていなかった。インディオたちがランダムにメンバーの十数人をランダムに選び、その腕に傷を付けてなにやらどろりとしたものを塗りつけていたが、それは全員ではなかった。わたしやトスカも含まれなかったし、サーシャもそうだった。

だが、インディオたちは状況が分かっている。そんな先の心配をしている場合ではないのだ。

わたしは首を振る。

「『ファーム』とやらに行くのは奴らを振り切ってから。彼らの实力を見たでしょ？簡単に脱出なんかできないわ」

わたしとインディオの青年はにらみ合う。どこからか小屋が焼け落ちる音が聞こえてきた。

「わたしたちの持ち物を返して。協力するわ」

「いいだろう」青年はうなずいた。「だが、本当にあれを相手にできるのか？」

「一番ほしい装備が手元にはないのは痛いけどね」わたしは微笑んだ。

そう、まだチャンスはあるのだ。ひどく小さな可能性だけでも。

「どうだ、ディックマン大尉。こうやってロボットは使うのだ」
スウィントンは半ば崩壊した村落を指した。その表情はとても誇らしげだった。「君たちレンジャーは拠点制圧のためにロボットを高々度から降下させることはあるが、ヘリと組みあわせて対地制圧任務に使ったことがないだろう」

私はうなずいた。

「そうだろう。貴君らの戦術はいささか硬直しているからな。予言しておこう。レンジャーもこの戦術を必ずや取りいれると」

私は無言のままだった。スウィントンはインディオたちが対空兵器を持っていなかったことを完全に失念している。もし彼らが対空ミサイルでも持っていたれば状況が一変したであろうことをまったく理解していない。ただひたすらに彼は上機嫌だった。

だがそれもスウィントンの目の前に息せき切った中尉がやってくるまでのことだった。

報告を聞いたスウィントンは顔色を変えた。

「敵が銃を使っているだと？」

「トリスアギオンでしょう」当然のことだ。まさか彼は連中がおとなしく殺されてくれると思っていたのだろうか。

「で、被害は？」青ざめたまま黙り込んでしまったスウィントンに代わって私は中尉に尋ねた。

「ロボットが2機やられたうえに包囲を突破されました。死者はいませんが重傷者は12人。軽症が6人でています。それから、防

護服が破れて戦線離脱したものが15名」

非致死性の武器でここまでやるのだから大したものだ。私は内心感嘆する。

事実、トリスアギオンが「参戦」したことによってこちらの志気は明らかに低下していた。

向こうの女指揮官はまず、この状況をリアルタイムで衛星中継していると警告して兵士を不安にさせ、さらに自分たちは非致死性の武器しか使わないと宣言。兵士の志気を著しくそいだ。

とどめにあの女はこの周辺にはウイルスがうようよいるので防護服が破れただけで疫病に感染するだろうと脅したのだ。

この常軌を逸した脅迫はかなり効果的だった。スウィントンが事前にウイルスの脅威についてさんざん吹いていたために、防護服に裂け目ができただけでパニックに陥る兵士が続出する。

このウイルスの感染力がひどく低いという事実を兵士たちに飲み込ませるまでに貴重な時間がどれだけ費やされたことが。

「・・・どうします？ 追撃しますか？」 中尉が重ねて聞いた。

「ガ、ガスを使おう」 突然スウィントンが提案した。声が裏返っている。「ガスを使えばこちらの被害は皆無で済む。我々の装備は兵器にも対応している」

「論外ですな」 目をむいて絶句している中尉の代わりに私が答えた。

「ジャングルのどこで死んでいるか分からない伝染病患者の死体を探すのは、並大抵の苦労じゃ済まないでしょう。『取りこぼし』でもあればどうするんです？ それよりも・・・」

地図を奪い取って地形を確認した。彼らの生き残りはおよそ150人。その中には婦女子も混じっている。彼らを無事に逃がそうと思ふのなら・・・。

「小隊単位を連携させて対応しろ。決して突出させるな。彼らは非戦闘員を小グループに分けて脱出させ、時間稼ぎのために逆襲してくる。少なくともまともな指揮官ならそうする。敵はゲリラ戦の

オーソリテイだ。・・・よろしいですね」

スウィントンにお義理で承認をとった。彼は不機嫌そうな顔のまま黙っていた。

ぼつりぼつりと降り始めた雨が次第にひどくなっていく。

戦闘は不意に中断した。

降り続く雨でお互いの姿が見えなくなったこともあるし、防護服で全身が覆われた米軍特殊部隊員が暑さのあまりスタミナ切れを起こしたこともある。

ほとんどすべてが非致死性の武器ばかり、つまりゴム弾や電撃弾（ゴムで覆われた相手にも威力があることに僕は驚いていた。）で戦っている力ホさんたちにとってこれはとても幸運なことだった。

「インディオ達からワクチンを接種されたものは手を上げて」

地面に腰を下ろしたままの力ホさんが突然言った。

ばらばらと手が上がる。訳が分からないまま僕も手を上げた。手を上げているのは全体の三分の一ほどしかない。ふと視線を感じる。サーシャが僕を見つめていた。切れないナイフで傷つけられた肩がぴりつと痛む。

「よく聞いて。いまからここを離脱するけれど、あなたたちは『ファーム』へは行かずに各個に離脱し、なんとかして本部に現状を報告しなさい」

驚きと抗議の声を上げる隊員に彼女は説明する。圧倒的な兵力に追いたてられ、通信機も失ったいま、スウィントンの暴挙を明るみに出すのは誰かが外部に連絡を取らなければならない。スウィント

ンが保菌者であろうがなかろうが、とにかく人を殺して回っていることを白日のもとにさらすには、誰かが生き伸びなければならぬのだと。

「離脱するなら今のうち。数名ずつチームを組んで脱出して。それと・・・分かってると思うけど他の人間とむやみに接触しないでワクチンの効果についてはまだ未知数だから」ここでカホさんは言葉を切った。

「ごめんなさい。わたし、大ドジを踏んだわ」

みんなが静かになった。誰も何も言わなかった。

数秒後「脱出組」の隊員たちは小集団にまとまるとつぎつぎと姿を消し始める。挨拶も涙もなにもなかった。

「パトリック。行こう」モーガンさんがいつのまにか僕の側に来ていた。僕はうなずき・・・そして気がついた。

残った人間はまず助からないことに。残るメンバーの中にサーシヤがいることに。彼女が唇をかんで僕をじっと見ていることに。

「・・・そんな。そんなのいやです」僕はようやく言った。「僕だけ逃げられません！そんなことできない」

「来るんだ」モーガンさんの声は穏やかだった。だけどその響きは今まで聞いたこともないものだった。

「脱出組だからといって助かる保証はどこにもないし、残った人間が助からない理由もない。チャンスを生かす努力をするんだ」

「そうよそうよ」とサーシヤ。「こっちにはなんてったってターナー先生もいるし、カホさんだっているんだもの。簡単にやられっこないわ。あんたこそマゴマゴしてモーガンさんの足を引っ張るんじゃないわよ」

彼女は笑っていた。そしてまっすぐ僕を見ていた。この旅の始まりには見せたこともない表情だった。

僕は黙ったままうなずく。

「行きなさい。バカ」彼女が僕の背中を押した。

僕とモーガンさんは次第にまばらになっていく木々へと走り始め

る。

けつきよく、あたしたちは追っ手を振りきることができなかった。あたしたちはインディオたちの犠牲によって数時間分の余裕をもつて「ファーム」へたどり着くのがやっとだった。だけど、それだけでもこっちはかなり有利になった。とカホさんは言う。本当かどうかはあたしには分からない。

ようやくたどり着いた「ファーム」とはただのおおきな村にすぎなかった。ただしその村はちょっとした要塞になっていた。村のあちこちには柵がたてられ、塹壕が掘られていた。

「アラモの砦」トスカさんが皮肉っぽくつぶやいた。

「あるいは『モヒカン族の最後』。なんにせよ本部からの増援がいつ来るかで俺たちの運命が決まりそうだな」イスマイルさんがそれに応えた。

「あなたたち。ちょっと来て」カホさんが緊迫した声で叫ぶ。その声は疑問と興奮が混じり合っていた。

「なるほど。『農場』じゃなくって『繁殖場』だったわけだ。しかし……こりゃいったいなんだ」

イスマイルさんは腕組みをしながら首をひねる。

「『マピングリ』よ。インディオたちが伝説の獣と呼んでいるのはこれ！間違いないわ」

「名前が分かって、結局正体不明ってことに変わりないですよ」勝ち誇るカホさんにイスマイルさんがぴしゃりと言った。確かに

そのとおりかも。

あたしたちの目の前にはすり鉢状の飼育場があった。直径は15メートルほど。意外と大きく中には岩やら木が植えてある。まるで動物園みたいだった。

だけど、そこにいる動物をあたしはどの動物園でも見たことがなかった。学校の課外学習で行った自然公園でも、ママ・・・に連れていってもらったN Yの動物園でも。

そこにはサルともクマともつかない動物が5匹、のろのろと木の葉をかじっていたのだ。大きさは2メートルから50センチ程度までさままだ。

「顔つきは熊っぽいよね。でも、手足のバランスが変。だいたい、手の先が変よ。熊はあんな鉤爪なんて持っていないわ」

カホさんの言うとおり、その動物には3本のおおきな爪を持っていた。

「詳しいですね」あたしの質問にカホさんは微妙な笑みを返した。「だって、熊の手って食べたことあるもの」その言葉にイスマイルさんとトスカさんが少し後ずさる。

「日本人ってなんでも食べるんですな」

「バカ、中華料理よ。高級食なのよ。それはともかく・・・」よけいなことを口走ったイスマイルさんをにらみつけてからカホさんは周囲を見回し、あたしたちをここへ連れてきたインディオの若者へ叫んだ。

「これはなに？」

「大丈夫。これは病気にかかっていない」彼の言葉はカホさんの質問への答えにはなっていないかった。けれど、その言葉の意味していることをあたしは理解した。

「これがワクチンなの？」とカホさん。だが、相手が「ワクチン」という言葉を理解できないでいることを知って言い換える。

「これが『病気になる前の薬』？」

「そう、そうだ」インディオはうなずいて一番小さなそれを抱え

上げた。彼はほえんでからそれをあたしにぽんと手渡した。

「！」びつくりするひまもなく、その小さな生き物はあたしにぎゅっとしがみつく。するどい爪を持っているのに抱きつかれてもあんまり痛くない。

「サーシャ！大丈夫」カホさんがあわてて手を伸ばす。けど「この子」はさらにぎゅっとあたしにしがみつく。木の葉の強いにおいがした。

「う、うん。だいじょうぶ。ちょっと重いけど」

「問題ない。これは大人しい」きまじめな表情のままインディオは言った。「それにこの子たちは病氣を持っていない。母親の腹を裂いて取り出したこの子たちの血は強く、病氣をはねのける」

「母親の腹を裂く・・・帝王切開？」

「そうか！」イスマイルさんのつぶやきを耳にした調査隊付きの医師が大声を出した。続けてインディオに尋ねる。

「これの母親は『汚れて』いるのかね？」

「そうだ。母親の血に触れてはいけない。子供は酸の水で洗い流さねばならない。母親は病氣を持っているから死体は焼き捨てる」

「だが、子供は大きくなっても病氣にはならないのだろう？」

「そうだ」

その言葉を聞くなり医師は興奮した口調でしゃべりはじめた。

「あの脳炎のキャリアは間違いなくこの動物です。だがこの動物は抗体を持っているんです。だから発病しないのですよ。インディオたちはまだウイルスに感染していない胎児を取り出して育て、その血を抗ウイルス剤として使っているにちがいない。すごい。すごい知恵だ。どこで学んだんだろう！」

「素敵」ぼそつとカホさんがつぶやいた。「お仕事全部終わっちゃった」

「生きてここを出られたらね。相当難しそうですが」

「そうでもないわよ。イスマイル。この事実をなんとか表沙汰にしてやればスウィントンも手を出せないわ。それどころか世紀の大

不祥事よ」

「問題は、どうやって表沙汰にするか。ですな」イスマイルさんはため息をつき、そしてみんなは黙り込む。

あたしの腕の中で「彼」がくう、と鳴いた。

「そういえばカホが謝ったのを聞いたのは初めてだなあ」

顎髭をこすりながらモーガンさんが抑えた声で言った。

雨は唐突にやみ、代わりに鳥の声が急に大きくなっていた。僕たちは包囲をやり過ごそうと藪の中にうずくまっていた。遠くの方では兵士たちの叫び声が聞こえている。だけどモーガンさんはまるで緊迫感がない。きつとうまく脱出できると確信しているからだろう。

「あの娘はいい子だよ。パトリック」

モーガンさんは尋ねもしないのに僕に言った。

「カホさんとは長いんですか？」

「そうだな。4年くらいかな。アフリカのマラウイから一緒だった。彼女はあそこでもあだったな。威勢が良くて生意気で、そのうえ自信過剰で。だけどあれは本当に助かった」

モーガンさんは急に年をとったようだった。

「任期もなかばをすぎるとみんな擦り切れてくるんだ。物事をいっぺんに解決する方法なんてないことは分かってるし、誰かに誉めてもらおうとして始めた仕事じゃないんだが、それでもひどく気が滅入ってしまうこともある」

僕は彼の低いつぶやきを聞いているしかない。

「死にゆく子供たちを救いながら、同時に人口爆発の心配までし

なくちゃいけない。環境保護には金がいるが、その金を自力で稼ぎ出すには地力を下がることを承知して食べもしない商業作物を育てては輸出するしかない。あそこには最善の方法が存在しないんだよ。どんな手を打つても・・・最後には破綻してしまう。自分がやっていることが愚かなだけでなく間違っているのではないかとさえ思い始めてしまう。あそこにいると『人間とは滅んで当然の欠陥品ではないだろうか』と考えてしまふくらいだ」

モーガンさんは僕を見る。その表情は本当の老人みたいだった。でもその表情が不意に変わった。

「ところが、だ。あのお嬢はあきらめない。事態がしだいに悪化していくことを理解しているはずなのに。だ。私は彼女の正気を疑ったね。どうして根拠のない自信を持ち続けているのかさっぱり分からなかった」

いつのまにか微笑が戻っていた。それどころか彼はくすくすと笑ってさえている。

「彼女は言うんだ。『もつと誇りを持つのよ』って。『助けに来た人間があきらめるなんて犯罪だ。病人より先に医者があきらめるようなものよ』って。まあずいぶん物言いだったがね。確かにあきらめのいい人間がトリスアギオンなんてやっているはずはないし・・・」

不意に彼は言葉を切った。兵士たちの姿が消えていた。

「チャンスだ。行こう」

モーガンさんは身軽に走りはじめた。10キロ近い対装甲ライフルをかついでいるはずなのに、60歳を越えているはずなのに、彼の歩調はなめらかだった。僕もあわてて追いかける。

・・・カホさんがひどくもろい防風林と人手だけで担当地域の砂漠化をくい止めるという「奇跡」を起こしたこと、その村が伝染病で村人ごと焼き払われたことを知ったのは、それからずいぶん経つてからだった。

「このドリフト（小変異）の早さは何だ。畜生」

誰かがつぶやいた。私も同感だった。こんなウイルスはCDC（疾病対策センター）はじまって以来かもしれない。

我々はようやく「脳炎」ウイルスの分離には成功したものの、いまだにこのウイルスの発病メカニズムを把握できていなかった。

特定の臓器や組織に取り付き、取り付いた組織を作り替え・・・つまりガン化させるこのウイルスがHIVのようなレトロウイルスだろうと推測はつくのだが、それより先へ進めない。

理由はこのウイルスの変異速度だった。潜伏2週間で1パーセントも遺伝子構成が変化してしまうと、仮説を検証する暇さえなくなってしまう。

「隔離体制はどうなっている？」私はヤンコビッチに尋ねた。

「一次接触者には抗体検査をした。一割に反応があったので隔離した。三次接触まで範囲を広げ、今のところは感染の事実は見つかっていないけど・・・あまりあてにならないぜ。変異したウイルスには抗体反応が出ないときがある」

いまのところは感染力の低さに救われているということか。つまり、感染者を隔離し患者が死ぬのを待てば一応事態は終息する。CDCとしてのメンツは丸つぶれだが。

「今までこいつはどこにいたんだ」ヤンコビッチが吐き捨てるように言った。「こんな強力なウイルスが突然現れたとは思えん」

「HIVのときもそうだった。あれだって不意に現れたように見えただぜ。たぶん人間がこのウイルスに接触したのはつい最近なんだ

ろう。そして突然変異で人間への感染能力を獲得した・・・」

どさりとテーブルの上に地図が投げ出されたので、私は最後まで続けることができなかった。

「最近は最近だが、かなり浸透しているかもしれない」

そういつて主任はアメリカの地図を指さした。それにはいくつもの赤い印がついていた。

これはここ5年に原因不明の脳炎が発生した箇所だと彼は説明する。ただしよほど注意深く調べないと関連が見つからないし、最大の発生地域・・・中西部のとある町に至っては発病の事実そのものが機密扱いになっている。

「これらの発生に関連性は？」

「地理的なつながりは特にない。人間の流れと共通項・・・ペットのサルとか・・・はまだ調査中だ」それが私の問いに対する主任の答えだった。「ただしどの件でFBIが隠蔽工作をした形跡がある。これが今のところ分かっている関連性かもしれない。この地図も『天使の名を持つ組織』が提供したものだ」

トリスアギオン。どこからかつばやきが漏れた。

「フォート・ノックス、あるいはユーサムリッドがからんでいると？」誰かが軍研究所の名をあげた。どちらも悪名高い兵器の開発機関として知られている。

「ひよつとすると・・・な。でもどうも違うんじゃないか。彼らはこのウイルスに非常に興味を抱いているが、同時に恐怖している。感染源の根絶を本気で考えているようだからな」

「彼ら、以前に痛い目に遭っているのかもしれない」

「おそらく。つてを頼って聞いてみよう。なにか分かるかもしれない」主任は疲れた顔で腕を組む。「このウイルスの変異速度は気になる。ひよつとすると今回は無事に終息しないかもしれないぞ。ここまで強力で致命的なウイルスが高い感染力を変異によって手に入れたら・・・」

それは、私自身がずっと抱いていた懸念だった。

私はまた、震えはじめた。

僕たちはインディオたちと遭遇した広場にじりじりと近づきつつあった。そこはいまやスウィントン大佐たちのベースキャンプとなつている。

だけどそこを警備している兵士たちはまるで無警戒だった。まさかここまで敵がやってくるとは思っていないのだろう。ライフルを肩に下げたまま、何人も固まっておしゃべりなんかしてるありさまだ。僕たちは敵の盲点をついたらしい。

「パトリック。ひょっとして君、泥棒の才能があるかもしれないな」

モーガンさんがひどく感心した口調で僕に言う。ここにすれば力ホさんが使っていた衛星通信機があるだろうし、大事なものがあるわりには警戒も薄いだろうって言ったのは僕だけど、なんだかあんまりほめられている気がしない。

「だけど、どうやって通信機を探すんですか？」

「簡単だよ。聞けばいいんだ」モーガンさんはやりと僕に笑ってみせる。

スウィントンはどこまで私に尻拭いをやらせるつもりだろうか。こともあろうにトリスアギオンたちは後方のキャンプへ侵入したのだ。

どうやら彼らは無警戒な少佐を殴り倒して防護服を一式奪い、それを使って士官になりすますと難なく衛星無線機を持ち出したらしい。

ベースキャンプからの連絡を聞いた私は彼を怒鳴りつけたくなる衝動をようやく押さえ込む。

「ヘリを用意しろ。《ベーオウルフ》を2機引き抜いてキャンプへヘリボーンをかける」

スウィントンに怒鳴る代わりにレンジャーの曹長に指示を出した。「歩兵は連れていきますか？」

「狙撃兵を3チームヘリに乗せる。ただし地上には降ろさない。地上に降ろすのはロボットだけだ」スウィントンの手下たちが動くものならなんでも発砲しているようなところに生身の部下を降ろすわけにはいかない。それにしても連中の練度の低さはいったい何なのだろう。

ロボットの係留作業は瞬く間に完了した。ヘリのツインエンジンが咆哮をあげる。私は偵察ヘリのキャビンに駆け上がる。

「出発！」地上の兵がさっと敬礼した。

ひどく長く、危険な数分を僕たちは待っていた。

南西が開けた谷の入り口にセットした通信機の「視野」に衛星が

入ってくるまでのあいだ、僕たちはじつと待たねばならなかった。もちろん、僕たちは藪に隠れ、通信機は木の枝で隠したけれど、そんなものは空から見ればすぐにばれてしまうだろう。

でも、あと少しまてば衛星は通信範囲に入り、モーガンさんは吹き込んでおいた報告を圧縮データの形でアップリンクできる。今回はVRユニットを使うつもりはなかった。

「パトリック。離れたところに隠れていなさい」僕は首を振る。モーガンさんは肩をすくめた。

「アイルランド気質は子供のころから、か」
「でも僕は、あの島に行ったことなんてありません」彼は苦笑した。

「何もない島だよ。石ころと痩せた土地と海からの強風と・・・あんな土地にしがみついているのだから頑固になるのも当然だな」僕がなにか言いかけたとき、突然周囲の地面が沸騰する。モーガンさんがなにか叫びながら僕をかばって地面に伏せた。

「その二人。武器を捨てて出てきたまえ。狙撃兵が君たちを照準している。ロボットも君たちを捕捉した」

突然現れたヘリから声が聞こえてきた。同時に軽ロボットの歩行音も聞こえてくる。

「衛星の軌道が分かっていたら、どこで通信するつもりなのかも予想できるからな」モーガンさんが僕の耳元でつぶやく。

「あと1分です」僕はささやき返した。

「時間稼ぎをやれっか。君もあきらめの悪い人間だな。だがわたしもそうなんだ。年をとって頑固になると同時にあきらめも悪くなった・・・いい傾向じゃないか」よし、とつぶやくとひどくゆっくりと彼は起きあがり、肩からライフルを少しずつずらして地面に置く。

・・・あと40秒。

「もう一人も立て」ローターの音を圧して声が聞こえた。

「怪我してるんだ」モーガンさんが怒鳴った。

「とにかく通信装置から離れる」

モーガンさんはゆっくりと膝をつき、僕を抱え上げようとして落つことす。息が詰まった。あと20秒。

「畜生。重い。・・・しつかりしろ。しつかりするんだ。痛いかな。痛いだろうな。かわいそうに、おお、かわいそうに！」なかなかの名演技だけど、そんなにぴしゃぴしゃ叩かないでほしい。

「時間稼ぎをするな。ベルトをもってひきずれ。ぐずぐずすると子供の脚を撃ち抜くぞ」相手はひどく落ち着いていた。チェスをしているみたいに淡々とした口調だった。

「分かった。分かったよ」大げさに彼は手を振った。「すぐにやるから」

「あと10秒」僕がささやく。「9 / 8 / 7 / 6・・・」

そのとき、モーガンさんが突然崩れ落ちた。

僕には何が起こったのか分からない。

銃声が聞こえたのはそのあとだった。

「誰が撃った」

私はほとんど絶叫していた。手元のモニターを確認する。私が連れてきた射手のスコープと連動した画像は一瞬ぐらぐらと揺れ、それからあわてて通信装置へセンターが戻る。伏せていた少年がなにか叫んでいる。

「我々ではありません。大尉」射手のパートナーをつとめる観測手たちが口々に言った。

「《ペーオウルフ》を突っ込ませろ。通信機を押さえる」
「了解」

「大尉。周波数をB中隊に」通信士がこつちを振り返ってヘッドセットを渡した。あわてて耳に押しつける。

やった。やった。と誰かの歓声が聞こえてきた。啞然としながらこちらから呼びかける。

やはりと言うべきだろう。撃ったのはスウィントンの部下、特務戦隊の誰かだった。

「なぜ撃った」

「通信されるわけにはいきません。これは大佐の命令です」得々とした答えが返ってきた。

この大馬鹿者め。ならば通信機を撃てばいいのだ。

私ははっとした。モニターに視線をやる。少年の手が通信機へ伸び、そして戻っていた。混乱のために狙撃兵たちは完全に隙をつかれていた。

「なにしてる。通信機だ。通信機を撃て！」

一瞬のちに装置は粉々になった。だが、少年はそのまま低い姿勢で藪へ飛び込む。その手には老人が投げ捨てたライフルが握られていた。

「通信機を確認する。降下しろ」

「少年はどうします？」とパイロット。

「彼らが通信できたかどうかを確かめるのがさきだ」

へりはぐつと高度を下げる。

おそろく手遅れだったろう。

バーストモードで通信されたら1000語ほどの通信文でも1秒足らずで送信されてしまう。だが、確認しなければならない。私の任務には本作戦が全世界的なスキャンダルとなってしまうのを防ぐことも含まれているのだ。

私は自分がひどく間抜けになったような気がしていた。

人が死ぬってことはこんなものなのだろうか。

モーガンさんが地面に崩れ落ちたとき、彼はもったいの物体となっていた。

やさしくて落ち着いたあの人の存在はどこかに流れ出して消えてしまっていた。

さよならを言うひまなんて、あるわけはなかった。

気がついたときには僕は一人で密林の中をさまよっていた。銃声や人の声、そしてロボットの駆動音は密林に吸い込まれるように消えていた。とたんに脚の力が抜けた。肩に掛けたライフルがずり落ちる。

いつのまにか僕は泣いていた。悲しいわけではなく、怖いわけではなく、ただ途方に暮れてぼろぼろと涙を流し続けていた。

これからどうしていいかまったく分からなかった。カホさんの指示どおり本部とは連絡は取れた。だからあとは脱出すればいいはずだった。

ただどこへ逃げていいのかも分からなかった。

もう、僕にできることは何もなかった。

さまよう僕の視線が地面に転がっているライフルにたどり着く。それは重装甲ロボットさえもうち倒す威力があるものだった。

ストラップにはマガジンプーチがまだ3つ付いていた。

けれどもそれはいまではただ重いだけの存在だった。

どうして僕はこんなところにいるんだろう。ぼろぼろと涙をこぼしながら考える。

それはターナー先生が行方不明になったからで、それをサーシャ・タチアナが自力で探そうと思いついたから。

望みを絶たれた彼女が涙をこらえる表情を見てしまったから。

さまよう僕の視線が地面に転がっているライフルへ再びたどり着く。

それは重装甲ロボットさえもう倒す威力があるものだった。

ストラップにはマガジンポーチがまだ3つ付いていた。

ぐすぐすとまだ泣きながらゆっくりと立ち上がり、ずっしりと重いライフルを背負った。

・・・まだ、僕にはやらなくちゃならないことがあるようだった。

「蠅螂の斧」という言葉がある。

簡単に言ってしまうえば「実力差を考えずに喧嘩を挑む」って意味だ。もっと平たく言うなら「身の程知らず」って感じになる。

いまのわたしたちがまさしくそれだった。

完全武装の歩兵と攻撃ヘリ、さらにロボット相手にゲリラ戦を挑んでいるのだから。

まあそれにしては善戦していると言いきらるだろう。スウィントンたちがナパームと火炎放射器の使用を控えているために（焼き払うのは最後の最後だとわたしは知っていた。）、ひどく原始的な戦術が取れるのだった。

さっきもロープと丸太を使ってロボットが1機行動不能にされて

いた。インディオたちはジャングル戦に関しては卓越した戦士だった。

けれどもその抵抗もほぼ終焉に近づいていた。重戦闘ロボット《ガーゴイル》はインディオたちの投げやりも私たちの発射する弾丸もはじき返し、障害物を乗り越えて接近してくる。その後に続くのは完全装備の歩兵たち。蹂躪されるのは時間の問題だった。

どこから連続した銃声が聞こえてきた。

同時に耳を覆いたくなるような、長い悲鳴が聞こえてきた。インディオたちが育てていた動物の断末魔の声だった。

「《ファーム》が。貴重なワクチンなのに！」悔しかった。何もできない自分に腹が立った。

「カホ。いよいよまずいですよ。あとは落とし穴ぐらいしかない」トスカが低い声で言う。彼の肩は血でぐっしり濡れている。

「壕づたいに突破します。それから後方の支援部隊へ浸透攻撃」
自分でも実現できるとは思えなかった。たぶん数分後には全員が戦闘能力を失っているだろう。

《ガーゴイル》の機関砲が吠えた。私たちは穴の底に身を伏せる。土塊がばらばらと落ちてくる。わたしはサーシャを抱き寄せる。少女の腕の中で幼い動物が震えていた。どこかでなにかが爆発する音が聞こえた。

「畜生。ランニングは苦手なんだが」誰かが呑気につぶやく。

「俺なんてれっきとしたアメリカ市民だぜ。納税者に向かつて税金使って銃をぶっ放すなんていい根性じゃねえか」また別の誰かが陽気に叫んだ。

やはりわたしたちは、ただの馬鹿者かもしれない。

「斉射用意！弾種はゴム弾。西側へ二射、北側へ四射。その後は次の壕へ退避する」

ぐいと顔の汚れをこすってからわたしは言った。

「構え。撃て！」

叫ぶと同時に身を乗り出して発砲する。

がつんがつんと肩に衝撃が走る。突進してきた歩兵が5人、きり舞いをして地面へ倒れ伏す。

「方向転換・・・撃て！」この期に至ってもわたしたちはまだ完全に統制が取れていた。

だが、《ガーゴイル》はまったくの無傷だった。それは右腕を持ち上げこちらへ12連装の銃口を向けた。壕に身を伏せても避けられそうにない。

「伏せて！」怒鳴りながらサーシャの上に身を投げる。

だが、発射音はなかった。そのかわり地響きが聞こえてきた。覚悟を決めて壕からそつと顔を出す。

巨人は無様に転倒していた。

そればかりか四肢をまるで無意味に痙攣させていた。

その横腹には大人の拳ほどの穴があいていた。

誰かが歓声を上げていた。

それが自分の声だと気づくまでに少し時間がかかった。

二脚を立てていても反動は強烈だった。2段式の引き金をそつと絞るとバレット社製対装甲ライフル《M82A1-AMR》はぶるつと身を震わせて宙へ躍り上がるとする。

僕はグリップを力一杯握りしめてそれを押さえなければならなかった。

一瞬ばやけた視野が安定すると、スコープの中の《ガーゴイル》は四肢の制御を失ってひっくり返っていた。

そのまま視野を巡らせる。棒立ちになっている《ガーゴイル》が

もう1機いた。石碑の絵を使ってモーガンさんにレクチャーしてもらったとおりにロボットの腰の少し上、右脇腹に照準を合わせる。

コクピットは狙っちゃだめだ。モーガンさんはそう教えてくれた。目標としては大きいのだがしっかり防弾対策してあるし、もし命中してもパイロットや重要機構も傷つけずにあっさり貫通するだけで終わってしまう。

それよりもここを狙った方がいい。右腰部ジョイントの少し上。ここに当てるとジャイロからの信号線と、脚部フィードバックコントローラーの両方にダメージを与えられる。

けれどもそれは簡単なことじゃなかった。高倍率のスコープの中ではちよつと相手が動くだけで照準はひどくぶれてしまう。

だけど僕は躊躇しなかった。おおよその狙いを定めると引き金を引き続ける。引き金を引くたびに強烈な反動が僕を襲う。4回目の衝撃に耐えたとき《ガーゴイル》の膝がぐんにやりと曲がってそのまま前のめりに倒れた。

僕はライフルを担いで立ち上がる。敵と自分との距離は500メートル。ひとところにじっとしていると発見されてしまう。

いや、もう遅かったかも。

頭上からかすかにヘリコプターの爆音が聞こえ始めていた。

30メートルの高みから地上に降り立つまで7秒ほどかかった。ブレーキが作動する。機体をつり下げていた5本のワイヤーが泣き叫んだ。

着地のショックが機体を突き上げた。脚部のダンパーがきしみ、

腰と首に衝撃が走る。私はかろうじて悲鳴を飲み込んだ。と同時に爆破ボルトがワイヤーを切り離す。ディスプレイが瞬いてまた灯った。

「ディックマン大尉機、着地を確認。各部に損傷なし。ダンパー液漏れなし。状況グリーン」

「了解。モニターを頼む」

私は偵察・軽攻撃ロボット《ベーオウルフ》のcockpitにいた。若干の懐かしさを感じながら左のスティックのボタンを押し、センサー群を短距離・多目標追尾モードに切り替える。網膜投影式のディスプレイに緑色の軌跡が投影された。サーモグラフィによるとついさっきまで人間大の目標がここにいたらしい。

狙撃手だ。私は直感した。《ガーゴイル》2機を屠った人間がここにいたのだ。

私が微笑を浮かべたとき、足下の倒木がいきなり爆発した。

私は機体をオーバーブーストさせてとっさに回避運動を行った。

「狙点を識別。最優先追尾目標としてロック」舌をかまぬように努力しながら私は戦術AIに指示を出した。

MTI（移動目標インジケーター）を見る。地形情報の上にクエスチョンマーク付の三角形が点滅した。なんとかみつけたらしい。

再び発砲炎。

殴られたように機体が揺れ、それから涼やかな金属音が聞こえた。どこかに被弾。再び回避運動する。

警告灯がついた。被害はセンサーの一部が破損した程度。作戦行動には問題ない。だが、MTI上のマークは消えていた。射手はこっちが考えている以上に手練れだった。いったいどんな男だろう。軍を除隊した元狙撃兵だろうか。ここまで追いつめられた状況でも、まだあきらめていない。

それにしても降下中にへりごと狙撃しなかったのは奇妙だった。射手が移動中だったからか、それとも単に奴が甘ちゃんだったためか。

私はスモークチャージャーを発射すると迂回しつつ狙撃手へ迫る。機関砲をなぎ払うように連射する。狙いなどまったくつけなかった。ジャングル内で長距離射撃ができるわけがない。射手はごく近くに
いるはずだった。

スピードこそがすべてを決定する要素だった。

「『脳炎』 ウイルスのガン化のメカニズムだが、仮説レベルだがめどが立った」内線電話から聞こえるヤンコビツチの声は安堵が混じっていた。「恐ろしく巧妙な逆転写酵素をこいつは持っている。まるで設計図かなにかをもっているみたいに、体内の器官をガン化させて酵素工場に変えてしまうんだ。人間に感染しないんだったら、研究材料に使いたいくらいだ。そう、うまくいけばこれは遺伝子工学のパラダイムシフトを起こし・・・」

クリーンルームのガラスが乱打されていた。

はっと顔を上げる。所長が受話器を持ったまま血相を変えて電話を切るように促していた。言われたとおりにするとすぐさまべルが鳴った。

「いったい誰と無駄話をしていたんだ」CDC（疾病対策センター）所長は電話越しに私を詰問した。

「ヤンコビツチです。ウイルスのメカニズムについてなにか掴めたとか・・・」

「ワクチンはいつできる。いや、いつ量産できる」彼は私の話を聞いていない。

「なんですって？まだそんなレベルには達していませんが」

「必要なんだ。いますぐに。それも大量に」所長は恐慌状態だった。

「・・・どういふことでしょうか」

「ミシシッピ川の流域で『脳炎』患者が発生した」

「まさか」

「症状はこのそれと一致している。感染者数は現時点で1000名を越えた」背筋を凍らせる私に彼は続ける。

「こんどの『脳炎』は空気感染しているらしい。州知事は州兵を動員して汚染地域を封鎖している。ワシントンでは国家保安会議が召集された」

ついにきた。私は震えはじめる。

シフト（大変異）が起きたのだ。

ついに恐れていたことが起こったのだ。いつ起こってもおかしくない最悪の事態が。

いくら軽量小型とはいえ全高3メートル近い《ベーオウルフ》にジャングル戦を行わせるのにはかなりの無理があることは分かっていた。

随伴歩兵なしでこんなに見通しの悪い地形を進むのは自殺行為だ。私はそう確信していた。

狙撃手はいまだに発見できなかった。センサーはまともに情報を拾い出せず、使い物になるのはサーモグラフィと動体感知器くらいしかなかった。せめて相手がロボットならば、金属反応や歩行音を

捉えることができるだろうが人間を捜し出すのにはロボットはまるで役に立たない。ここから降りて人間の歩いた痕跡・・・不自然に踏み折られた枝やすり抜けたときにこすれる幹の傷・・・を探した方がどれだけ効率的か。

倒木を踏み越え、さらに進路をじゃまする木を押し分けるたびに私の動悸は早くなった。これでは撃つてくれと言っているようなものだ。

彼らがちゃんとした装備を持った軍隊ならば私はとくに死んでいるだろう。

私はへり呼び出し、上空から撮影した赤外線パターンを転送してもらう。

無理だった。背景ノイズが多く、それらしい映像を取り出すこともできなかった。

「デイクマン大尉、まだ見つからないのか」スウィントン大佐の甲高い声がレシーバーから聞こえてきた。いま一番話したくない人間からの通信だった。

「まだです」ジャングルに隠れた狙撃手を見つけるのは至難の業だ。とは言わなかった。言ってもこの男が理解できないだろう。

「早くしろ！こっちは逆襲されているんだ。歩兵が押されている」せいぜいゴム弾と投げ槍程度の武装しかしていない相手にあんたは大苦戦というわけだ。

「狙撃手はこっちで牽制します。そちらはそちらで対処してください」

「もし、撃ってきたらどうするんだ！」デイクマンは悲鳴混じりの声を上げた。ひよつとするとこの男、初めて敵が自分よりも強力な状況にぶつかったのかもしれない。

「当たらないことを祈るんですな」

私は通信を切った。深いため息をつく。

発砲炎が1度でもあれば、狙撃手の位置を知ることができるのだが。

結局、自分自身を囷にするしかないようだった。
私は《ベーオウルフ》をジャングルの奥へと進めた。

「サーシャ、大丈夫よ。怖がらないでね」

そのトリスアギオン隊員はあたしの肩を抱いて言った。クウアンというショートカットの似合う女性だった。カホさんとはずいぶん印象がちがう。

ま、トリスアギオンの女性隊員がみんな彼女みたいだったら、それもうすごいんだけど。

あたしたちがいるのは一種の避難所だった。たぶん「最後の」って形容詞がつくんだろう。

掘り下げた穴に木の枝をかぶせただけのシェルターの中はインデイオの子供や女の人たちでいっぱいだった。あたしたちは重装甲のロボットが誰かに狙撃された隙を狙ってここへ逃げてきたのだった。カホさんたちとはそこで別れた。彼女たちはまだ、逆転のチャンスを狙っているらしい。

じめじめした穴の底でだれもが黙りこくっていた。私が抱えている幼い動物だけが鼻を鳴らしていた。そつとその毛をなでてやる。気持ちよさそうにそれは目を閉じた。

「たぶんそれ、ナマケモノの仲間よ」クウアンが低い声で言った。「だけど、体長が2メートルを超える種類は聞いたことがない」

「そうかも。戻ったら調べてもらおうね」あたしは眠っている動物に呼びかけた。うん、確かにナマケモノかも。だってこの子、ほんとによく眠るんだもの。

そのとき突然、穴のなかで光で満ちた。

悲鳴と爆音が同時に聞こえた。クワンがあたしを押し倒す。

身体をひねって上を見る。あたしたちを隠していた天蓋はごっそり消えていた。

代わりに見えるのはフードをかぶった頭、そして醜悪なロボット。

「無駄な抵抗はやめて出てこい。さもなければそのまま焼き払う」
拡声器の声はそう言っていた。

「ひとりずつ出たおいで。ひとりずつ」歌うようなその声にあたしは吐き気を感じていた。

荒い呼吸をなんとか押さえようと僕は必死だった。
ロボットが機関銃を掃射するあいだ、僕はずっと泣き叫んでいたから

ヘリから降りてきたロボットが僕を見つける前になんとかしなくちゃいけない。

残弾はマガジン2つ分、あと20発。

ロボットの機関銃でまっぶたつになった倒木の隙間に身体を押し込み、僕は耳を澄ませていた。ひたすら待っていた。

短気をおこした方が負けなのは分かり切っていた。

でも、それはひどくつらい作業だった。背中や首筋を虫が這っていることもそうだったけれど、何よりもじっとしていると悪い想像ばかりしてしまうことだった。

・・・僕がじっとしている間にロボットはそっと後ろに回り込んでいるんじゃないだろうか。

・・・それとも一気にカホさんたちの方へ向かっているんじゃないだろうか。

・・・トリスアギオンの隊員たちはみんなやられてしまったんじゃないだろうか。

・・・サーシャ・タチアナが殺されてしまったんじゃないだろうか。

少し身を乗り出してスコープを使えば、インディオの集落がどうなったかを知ることができる。それはここから見通せる位置にあるけど、敵がどこにいるか分からないときに不用意には動けない。さきに見つかれば負けだ。

僕はぎゅっと目をつぶる。

歯を食いしばって、待つ。

めきめきと木が倒れる音がごく近く・・・30メートルも離れていないところから聞こえてきたのは数分後のことだった。

・・・きた。

僕はそつと顔を出す。

インディオの集落を背中にして、そのロボットは立っていた。近すぎる。

最初に思ったのはそのことだった。

そつと銃を構える。やはり近かった。スコープの像は何を捉えているか分からないほど大写しになった。ズームリングを回して倍率を下げる。ようやく狙いをつけられるまでになった。

けど、それでもうまく狙えない。

ロボットの向きが悪すぎた。

そしてここはジャングルだった。ロボットの下半身は木々や葉に隠れ、弱点のはずの右脇腹なんてとても狙えない。

突然ロボットがこつちを向く。

気づかれた？

僕は凍り付く。そのまま永遠に近い数秒が流れる。

発砲はなかった。まだ気づいていない。だけど、それはじつとこ
つちを見たままだった。角張ったコクピットガラスが鈍く光ってい
た。

もう一度、そろりそろりと銃を構える。震えながら二脚を立てた。
かさこという落ち葉の音がするたびに心臓が止まりそうだった。

もう一度スコープをのぞいた。

だめだった。とても狙える角度じゃない。

待つしかないみたいだった。あれがちょうどいい位置に来るまで。
一発で倒さないとだめみたいだった。もし撃ち損なえば、ロボッ
トはすぐにこつちを見つけて……。

待つしかない。いまは。

金属をなめているように口の中が苦い。緊張している証拠だ。
《ベーオウルフ》のコクピットの中で私はなんとも唾を飲み込ん
でいた。

狙撃手は確実にこの近くにいる。それは間違いない。

サーモグラフィが捉えた残留熱はそう告げていた。

敵は近い。

そしてそれゆえに私は動けなかった。

「デイクマン大尉。どうだ。見つかったか」

甲高い声がレシーバーに響く。

くそ。スウィントンめ。こいつは本当に疫病神だ。

「まだです。近くにいることは確かです」私はMTI（移動目標
インジケーター）から目を離さずにうなり返す。

「こっちは大漁だぞ。残りの女子供をまとめてとっつかまえてやった。多すぎて手に負えないくらいだ」

・・・あんたにはそれがお似合いだ。無害で無力な人々を相手にするのが。

しかしスウィントンはおおはしやぎだった。ただでさえ饒舌な口調に歯止めがなくなっていた。

「おつ、こいつら生意気にも逃げようとしているぞ。やはりきちんと教えてやるべきか・・・」

「捕虜の拘束は歩兵に任せてください。ロボットでは無理です」
私はあわてた。この男なら何をしでかしてもおかしくない。

だが、機関砲の発射音がその返事だった。悲鳴がコクピット越しに聞こえてきた。

「あんた、いったい何をやってるんだ！」ついに私は怒鳴った。
後部カメラからの画像には、500メートル離れても死体と分かるものがスウィントンの乗る《ガーゴイル》周辺に散らばっているのがはつきりと映っていた。

「警告を与えただけだ」スウィントンは尊大そのものだった。「どうせ処分するのだ。問題はない」

こいつは科学者でも何でもなし。ましてや軍人であるはずもない。ただの殺人鬼だ。

私は結論づける。まったくワシントンもいい人材を見つけたものだ。

「いい加減にしてくれ。あんたは任務をただ複雑にしているだけじゃないか」感染のおそれのある人間をただ皆殺しにするだけなら、気化爆弾を装備したF-23《ラプター》が1機あればことは足りる。「いいか、我々の任務は感染のあるおそれのある人間を拘束し、感染者とそうでないものを見極めた上でどうしようもなければ処分するというものだ。それをあんたは・・・」

「その少女、おい、お前だ。抱いている動物をこっちへ持ってこい。すぐにだ」

スウィントンは私の非難を聞いてもいなかった。捕虜にした誰かに向かつて吠え立てている。だが、その相手は彼の要求を拒んでいた。

「大佐。確保が先です。反撃はまだ封じていません。狙撃手もまだです」

「くそ、なんて反抗的なやつだ」

スウィントンが吐き捨てる。だが、それは私の非難に対してではなかった。ちらりとディスプレイを見る。《ガーゴイル》が機関砲を少女に突きつけていた。

ズームする。

以前に私が確保しようとした少女・・・サーシャ・・・は抱いている何かをかばいつつ後ろへ下がる。

馬鹿、早く渡せ。私は歯がみする。スウィントンは甘やかされて育った子供と同じなのだ。要求に意味があるうとなかるうと、それがかねえられないと精神のバランスが崩れてしまう。

渡すんだ。そうすれば少しは時間稼ぎになる。

私はひどく矛盾した感情にとらわれていた。

「早くしろ。そいつをよこせ」スピーカーから聞こえてくる声は有無を言わせない雰囲気があった。だけど、あたしは首を振る。

「それはウィルスのキャリアだ。危険だからよこさない」うってかわって甘い声。だけどこれ、本気で言ってるとしたらこいつは精神がおかしいのよ。

「無防備な人たちを虐殺してるあんたの方が数百倍も危険よ」

「うるさい。オリジナルの抗体を持った生物が手に入れば、私は汚名をそぐことができる。そうすればこんな薄汚いジャングルへ出向く必要もなくなる……」

何を言っているんだろう。この男。

「いやよ。あんたの得になるようなことなんて絶対するもんか」
ぐい、と機関砲がこつちを向いた。まわりから悲鳴があがる。

ああ、だめなんだ。ごめんね。

誰に謝ろうとしているかも分からない。

力がぜんぜんはいらぬ。ただ、悲しかった。

あたしはぎゅっと目をつぶった。

耳をつんざくような音が聞こえた。まわりの悲鳴が絶叫に変わる。それから地響き。兵士たちの叫び声。

だけど、痛みはない。

数秒後、あたしは目を開いた。

あたしを殺すはずのロボットはまっすぐ腕を伸ばしたまま膝をついていた。

その腰には大穴があいている。

「《警告》発砲炎！」唐突に機載のAIが金切り声を上げ、自動的に回避モードに突入した機体がつんのめるように動いた。連続した重い銃声が聞こえてくる。

悲鳴が上がった。私の声ではない。スウィントンだ。

後部カメラはびくとも動かなくなった《ガーゴイル》を捉えていた。

さらにまずいことに、それを合図にして捕虜たちが兵士たちへ一斉に襲いかかっていた。捕虜たちとほとんど距離を置いていなかった兵士たちは発砲する暇もなく暴徒と化したインディオたちの渦に巻き込まれる。

しかし、私はそちらへお義理の注意しか向けなかった。

MTI上に浮かび上がった三角形へ、ようやく捕捉した射手へと機体を肉薄させる。

二度、三度、と銃弾で機体が揺らぐ。警告灯が一斉に点灯しつぎつぎと《ベーオウルフ》はその機能を失っていく。

さらに衝撃。

キャノピーが砕け散った。コクピット内に破片が飛び回る。額と首筋に熱い痛みが走った。

だが私は雄叫びをあげて機体を前進させる。

たてつづけに銃撃された。が、こっちの動きが早すぎて当たらない。

ついに肉眼で射手を捉えることに成功する。やつは倒木の下に潜んでいた。

ぐわん、と機体がよろめき、MTIをはじめとするセンサー群が一斉に死んだ。頭上のセンサーポッドが消し飛んだらしい。

それでもまだロボットは私の意志に従って前へ出ようとしていた。《ベーオウルフ》という獣はまだ力尽きていなかった。

そして対装甲ライフルを持つ狩人もまたそうだった。

これは戦術レベルにおいてもまったく意味のない戦いだった。

ついに《ベーオウルフ》よろめきながらも狙撃手が盾にしていた倒木を踏み越えた。マニピュレーターを伸ばす。それはまだ、奇跡的にも私の意志に込めて機銃を狙撃者へ突きつける。

「終わりだ。降伏しろ」

私は叫んだ。そして絶句する。

対装甲ライフルの巨大な銃口がこちらをまっすぐ向いていたためではない。

それを私に突きつけていたのはごく普通の少年だった。それはごく普通のアメリカ人の少年に見えた。彼はおびえもせず私を見上げていた。

その事実が私を絶句させ、同時に動きを止めさせた。

・・・やれやれ。ベテランだと思っていたのだが。予想はずれもいいところだ。

・・・いや、それは違うな。

私は完全に理解していた。

・・・そう推測したのではなく、そうであってほしかったからだ。私の部下を打ちのめし、私自身を苦戦させる人物は歴戦の兵士であってほしいという願望にすぎなかったのだ。

「さ、これでおしまいにしましょ」

通信機から女性の声が聞こえてきたのはそのときだった。

その声には聞き覚えがあった。

「わたくしはカホ・カンナヅキ。トリスアギオンです。スウィントン大佐に直ちに戦闘行為を中止するよう勧告いたします。こっちはそちらのベースキャンプを押さえたわ」

ここまで醜態をさらすとは。

私は大声で笑い出しそうになっていた。

だが、その笑みは途中で凍り付いた。

スウィントンがそれを断固拒否したからだった。

「女。お前は自分が優位に立っていると思っっているようだが、それは大間違いだよ」

破れたガラスの向こうで、さっきまであたしを怒鳴りつけていた男は不気味に穏やかな口調でしゃべっていた。相手はきっと力ホさんだろう。彼女はやったのだ。

「なぜならば、私の意志は固いからだ。私は任務のためなら、あらゆる犠牲をも容認できる。現に今、お前たちがキャンプの人間を皆殺しにしても、私は眉一つ動かさない」

スウィントンは本気だった。っていうか、完全に自分の言葉に支配されていた。前の学校にもこんな男の子がいた。臆病なくせしてしゃべっているうちにだんだん引込みがなくなってくるヤツが。

「・・・だが、お前たちはちがう。お前たちはかりそめの人道主義を振りかざす恥知らずで、敵を殺すことさえできない臆病者だ。根性というものが全くないカスどもだ。お前たちでは私を殺すことはできない。降伏するのはお前たちだ！」

唾を飛ばしながら叫んでいた彼の顔色が変わった。きっと力ホさんが辛辣な一撃をくらわしたんだろう。スウィントンの顔色が青からさらに青黒く変化する。

「いいだろう」スウィントンが穏やかに言った。「では証明して見せよう。ディックマン大尉。我々を狙撃した人間を・・・テロリストを処刑したまえ」

・・・モーガンさんが殺されちゃう。

あのおじいさんがライフルを持っていたことを思い出したあたしは息をのむ。

けど、銃声は聞こえてこなかった。代わりに聞こえてきたのはスウィントンの罵声だった。

「大尉！何を寝言を言っている！相手が子供だろうが何だろうが関係ない。そいつはテロリストだ」

・・・コドモ、子供って・・・誰なんだろう。

あたしは混乱する。だけどすぐに分かった。でも、すごく現実感がない。ぜんぜんない。

あたしがちよつと強く言うだけで言い負かされちゃうあいつが、パトリック・オケーシーが銃を手にしたことも。それでスウィントんたちを打ちのめしたことも。

そして、あいつが殺されかかっていることも。

あたしの目の前にいるクソツタレの命令で死ぬかもしれないってことにも。

どうして、どうして逃げなかったのよ！

「うるさい！このクサレアンポンタン」あたしは怒鳴ると同時にロボットのコクピットへめがけていつのまにか握りしめていた石を投げつける。

がん、とフレームに命中して、石はどこかへはじけ飛ぶ。

けど、そのときにはあたしは次の石を手になっていた。

「えらそうに命令することしかできないクセして意志が固いですって！」今度はガラスにあたる。だけどヒビは拡がりもしない。

「笑わせるんじゃないわよ。人を殺せることを意志が固いつてのなら、殺人犯はみな聖人じゃないの！」

再び石が飛ぶ。今度は1個じゃなかった。もつとたくさんだった。ほかの人たちも口々に何か叫びながらロボット相手に投石しはじめたのだ。ものすごい勢いだった。ロボットのアンテナが折れ、カメラがあさつての方向を向き、防弾のはずのガラスがさらに砕けはじめる。

そのとき突然ロボットの腕が動いた。機関砲がこつちを向く。悲鳴があがった。

「お前に何が分かる」スウィントンは幽霊のような声で言った。「このウイルスは危険で、予防法も治療法もない。だから封じ込むしかない。責任と義務を自覚している人間ならば、文明社会に脅威を与える存在を看過し得るだろうか」

「難しいコトバ使ってごまかさないでよね」なぜかあたしはぜんぜん怖くなかった。さっきのあたしとは別人みたいだった。「医者クセして患者を殺そうとしてるんでしょ。自分じゃ治療法が分か

らないから、『危険』って言うてるだけじゃないの。本当の医者なら治すことをまず考えるはず。ってことはアンタはただの偽物よ」スウィントンは無言のままだった。代わりにロボットの腕がきしみながら動く。あたしは銃口をまっすぐのぞき込むことになった。

「やりなさいよ。やったら？」

どうしてこんなに戦闘的なのか自分でも分からなかった。きっとカホさんの影響だろう。

馬鹿な考えがちりりとかすめるあいだも、あたしの口は動き続けていた。

「この村の人間をみんな殺したら、とりあえず病気はおさまるかもね。けどウイルスはどこかで生き残ってる。だから必ずどこかでまた発病するわ。そうしたらどうするの？今度は村じゃなくて町で発生したら？やっぱり殺すの？もしこの国の首都のブラジリアで起きたら？爆撃するのかしら。アメリカ国内で発生するかもね。シカゴや、サンフランシスコや、ワシントンで患者が出たら街ごと皆殺し？何人殺せば気が済むの？だいたい、アンタのやり方に終わりはあるの？」

あたしは深呼吸する。

「スウィントン大佐、アンタはただの殺人鬼よ。医者でも科学者でもないわ」

あたしは彼をまっすぐ見た。ロボットのコクピットにいるそれは、間近で見るとどこにでもいそうな男だった。軍人というよりも生徒に威張り散らすしか能のない教師みたいに見えた。

彼はただ愕然としていた。あまりにも驚いていて怒りも静まってしまったみたいだった。

ひよつとすると、今まで彼にこんな事を言った人間は誰もいなかったのかもしれない。もしそうなら誰かがもつと早く言っておくべきだったのだ。

ずいぶん長い間沈黙が続き、やがてスウィントンはぶるぶると震えはじめた。

そして何事かさげふと操縦桿を握りしめた。機関砲の銃身が回転しはじめ、次にはばやけて見えなくなった。

にやりと笑うスウィントン。指先の力を強める。

だけど彼は気づいていなかった。

わたしたちはもう、そんなものに恐怖をいだいていなかったことに。

まったく別のものに氣を取られて、彼の事なんてどうでもよくなくなっていたことに。

スウィントンがそれに氣がついたのは、3トン以上ある自分のロボットが軽々と宙に浮いてからだった。

だけど彼はたぶん、何が起こったか分からなかったろう。

彼をぶっ飛ばした存在の雄叫びも、インディオたちの「マピンガリ！」という叫び声も、耳に入らなかったに違いない。

地面にめり込んだロボットから彼を救い出すには重量物搬送用のヘリと、4時間もの時間を必要としたほどの衝撃をくらったのだから。

「あれが……『マピンガリ』」

いつのまにか僕の手からライフルは滑り落ちていた。

でもそれはお互い様だった。《ベーオウルフ》……《プラエフアティオ》の軍用バージョンに乗っていた兵士もコクピットの中で腰を抜かしていたのだから。

「そうか。あの写真。あの石版に描かれていた巨人……これが

そうか」

そう、それは巨大な生物だった。

体長は4、いやひよっとしたら5メートルを超えていたかもしれない。300メートルは離れていてもその巨大さは実感できた。

長い爪をもったそれは森の中からのつそりと現れると《ガーゴイル》を投げ飛ばしてしまったのだ。それはサルでもなければ熊とも違っていた。

「メガテリウム・・・いや、ミロドン。いや、どっちでもいい。絶滅したはずのオオナマケモノがまだ生きていたとは。くそ、幼体を成獣と見間違えなければ、死体の脊椎をよく調べればあの時点で気がついていたはずだ」

「ナマケモノ？あれが？」

「そうだ。正確には遠縁だが」さっきまでは敵だった兵士が言った。「1万年ほどまえに滅んだはずの生き物だよ。なるほどあれなら未知のウイルスの宿主であつてもおかしくはない」

「うん。そして抗体を持っけていてもおかしくない」

僕は彼を見上げる。彼は肩をすくめただけだった。

「・・・でもなぜ、姿を現したんだろう」

「『子供』の悲鳴を聞いたのだ。考えてみれば・・・当然の報いかもしれん」

彼は愉快そうだった。

オオナマケモノはさっきと同じようにのつそりと森の中へ消えていく。

僕は、僕たちはただそれを見送るしかなかった。

「元気を出しなさいよ」

サングラスを外しながら声をかけると、壁にもたれていた力ホ・カンナヅキはぱっとこちらを向いた。

「誰が元気ないですって？」

「あなた」

ふうつとため息をついたあと、力ホは片頬だけで笑ってみせた。

「いま、道化をやったりバウンドが来てるところ。『正義の味方』を気取ってまともな装備もなしに部下を軍隊と戦わせて9人も死なせたし、インディオの死者はその20倍でも足りないわ。それもこれも、私が馬鹿だったから。これは私の責任よ」

「責任を負うべきなのはスウィントン、そして彼に全権を与えた一部の閣僚たち。やつらはその報いを受けたわ」

スウィントンは文字通り軍を叩き出されたし、彼の後ろ盾となっていた国家安全保障会議のメンバーはその職を退くことになった。表向きの理由は健康上の理由や家庭の事情、さらに降って沸いたセックススキャンダルだったりするけれど。

「割に合わないわ。ぜんぜん、ちつとも。私の部下は『氷』が政界と取引をするための材料として死んだんじゃない」

私も分かっていたし、彼女も分かっていた。もし、トリスアギオンが自衛する以上の強力な武器を持って反撃を加えていたら、スウィントンと閣僚たちはいまだにその職に就いていたであろうことを。だけどそれは力ホにとって何の慰めにはならない。それもお互いに分かっていた。

「なにしに来たの。あなたがここへ来る必要なんてあるの？ エマ」
不意に力ホが尋ねる。

「・・・あるのよ。後始末っていうか、事後処理の監督」私は格納庫へ顎をしゃくってみせた。

そこには完全武装の米軍兵士に守られた輸送機がエンジンをかけたまま止まっている。

「抗体を持ったナマケモノならさつき搬出したんじゃないの？」
私はうなずいた。

「じゃあ、なに。この異常な警備は」

「この基地にこんな《ユニット》が持ち込まれたのははじめてですもの。警備が厳重なのも当然よ」

「《ユニット》・・・まさか！」カホは絶句する。

「そう、そのまさかよ。スウィントン大佐の努力が水泡に帰したときの最後の手段」

「・・・核なんて、正気なの？」

「正確には中性子爆弾。放射性降下物はあまりないのよ。知ってた？」私は意地悪く彼女のコトバを訂正する。「それぐらい事態はせっぱ詰まっていたわ。スウィントンのやっていたことなんて子供の遊びぐらいに感じるほどにね」

だから例の閣僚たちは全員罷免にされたのだ。事態がここまで悪化していたのに、事実の隠蔽だけしか考えていなかったことに。

「どうするの？」嫌悪の表情を隠さないままカホは尋ねる。

「トリスアギオンの管理下から米軍管理下へ戻すの。そこから先は知らないわ」

「管理？トリスアギオンの？」

「そう。さつきまであの《ユニット》は私たちが管理していたのにやにや笑いを抑えるのにちよつとした努力が必要だった。「正確には『強制的に管理させていただいた』と言うべきかな」私は露骨に敵意を込めた視線を送ってくる兵士たちへ軽く手を振る。

カホは事態をまだ飲み込んでいなかった。

「つまり、米軍に銃を突きつけていたのはあなただけじゃなかったってこと」

自国の核兵器がトリスアギオンにジャックされるなどまったく考えてもいなかったアメリカの狼狽ぶりは見物だった。国家安全保障会議の暴走でたださえ手に負えない状況になっていたところへ、最後の手段を横からかつさらわれたのだ。大統領が逆上するのも無

理はない。

最悪の事態を避けられたのは、核の使用もその決断に至った動機も公表できない米政府と、自国で未知の疫病が発生していることも他国の軍隊が作戦行動をとっていることも公表できないブラジル政府とがお互いに責任のなすり合いをしていたからだった。

「あきれた」カホはようやく言った。「それって、わたしなんかよりよっぽど無謀じゃない！ いったい誰がこんな事を思いついたの？」

私の笑みがさらに大きくなった。

「・・・まさか、《氷》？あの任務管理官？」

「そうよ。他に誰がいるの？」

「本当にバカね。《氷》も・・・その娘のアンタも」

「そうね。あなたに負けず劣らずね」

きつと私はチェシヤ猫のような笑みを浮かべているにちがいない。

「サーシャ、あなたにいいこと教えてあげる」ブラジリア付近の空軍基地に收容されていたあたしたちの前にひょっこり現れたカホさんは言った。「この世界はバカな人間が動かしてるの。スウィントンのような馬鹿が事態を悪化させ、それをトリスアギオンみたいな別な馬鹿が頭から突っ込んでくい止めるの。分別のある人間はそんなことをしないから・・・結局世界は馬鹿が動かしてるって言えるわね」

カホさんは躁状態に突入していた。ちょっと怖い。あわてたあたしは話題を変える。

「けつきよく、スウィントンって何だったんですか」

「プライドだけが肥大したただの愚か者よ」カホさんの答えは明確だった。

つまり、彼らは以前からあのウイルスの存在を知っていたのだ。それどころか研究の対象にさえしてたらしい。もつとも研究の成果はさんざんで、発病のメカニズムも対処方法も分らない上に、ウイルスを漏洩させて大量の死者まで出したらしい。

責任を厳しく追及されたスウィントンたちはこう言わざるを得なくなった。

現代の科学ではこのウイルスによる疫病を防ぐことはできない。隔離と発生源の殲滅以外に対応する方法はない。と。

そして、彼らは自分自身の言葉に拘束されてしまう。もちろんウイルスの研究そのものは続けたらしいけど、あまりにも簡単に結果が出るのは都合が悪いのでそつちは適当にやっているうちに……。事態はスウィントンたちの手に負えなくなってしまったのだ。

「呆れてる？」カホさんの言葉にあたしはようやくうなずいた。

いくらスウィントンが悪いヤツでももう少しまともだと思っていた。「巨大で強力な組織のチェック機構が働かなくなるとこうなるの。プライドと面子と建前で身動きがとれなくなつて、途方もないことをやらかすものよ」

あたしは納得できなかった。「そんなもの」で済ませておけるものじゃないと思うもの。

「とにかく、悪党は裁きを受け、ワクチンは見つかった。手強いウイルスだけど大流行はもうありえないわ。さ、もうあのクソツタレのことは忘れましょ。そしてわたしは人助けに戻り……」

カホさんはあたしの顔をのぞき込む。

「……あなたは学校に戻る。オーケイ？」

少し考えてからあたしはうなずいた。

「そうね。あそこはちよつと退屈で窮屈なところだけど、ひよつとするとそんなに悪いところじゃないかもしれない」

あたしの心の中で、冷たい固まりが少しだけ解けていた。

「よろしい」カホさんは腕組みをしながら微笑んだ。「では、ご褒美に二つアドバイスをあげるわ。まずひとつは……」彼女の声が1オクターブ下がった。

「このウイルスの正体について、いろんな人に聞かれるかもしれない。だけど一つだけ言っではいけない推理があるわ。分かてるわね」

あたしはうなずいた。

「石柱のことね」

「そうよ。石柱に刻まれてた『飛行機』と『箱』と『巨人』とあのウイルスを結びつけないほうがいいわ」

どうやって持ち込んだのか分からない隕石に、レーザーで刻まれたとは思えない線画。

それに描かれた、当時存在しなかった航空機やコンテナ。

異星からの来訪者。

インディオたちが1万年前から血清の作り方を知っている理由を一番合理的に説明できるのはそれしかないのだった。

このウイルスが、いや、遺伝子をプログラミングしてクローニングさせる「核酸」が意図的に……人類に対する「仕掛け罠」としてなのか、それとも一種のプレゼントとしてなのかは分からないけど……ばらまかれたのか、あるいは過失でばらまいてしまったのか分からないけれど、とにかくインディオにそれへの対処法を教えた存在がいたことは間違いない。

それだけじゃない。彼らはインディオの一部族に「ワクチンとなる生物を維持させる」という生き方を一万年近く貫かせたのだ。

これはもう、神様みたいなものかもしれない。

あるいは悪魔みたいなものかも。

「でも、必ず結びつける人がいるはずよ」

「かもね。だけど、きつとその意見は受け入れられない。それどころか・・・」

「『フォックス・モルダー』ね」あたしは二〇世紀からまだ続いている有名なドラマの登場人物の名を口にした。

「そういうこと。ひよつとしたらもつと悪いかもしれない」

「分かってる。あたしたちは偶然抗体を持っている生物を発見したのよ。で、その生き物は偶然生き延びていた一万年前に滅んだはずの生きた化石で、インディオたちが血清の作り方を知っていたのも・・・」

「偶然なのよ。ほんと、世の中って不思議ね」カホさんがあたしの言葉を引き継いだ。顔を見合わせてくすくす笑う。

「・・・いいのかな？」

「いいのよ。昔に来たかもしれないお客のことは考古学者に任せとおきなさい。彼らは訓練を受けているわ。数ある証拠のうちから真実を見つけた方法よ」

「そうする。だけど、いつかあたしもそんな仕事をしてみたいな」

「できるわよ。ターナー先生がいるじゃない。彼はいい教師よ。」

「よろしい。じゃ二つ目のアドバイス。これはもつとまじめな話」

彼女はちらりと部屋の隅でターナー先生と話しているパトリックを見て、そつとあたしに耳打ちする。

「劇的なタイミングや状況で現れた男の子に、いきなり恋しちゃだめよ。一目惚れって長続きしないから。ちよつと落ち着いてからにしないと後悔するわよ」

耳がかつと熱くなった。顔を上げられない。だけどカホさんがにやにや笑いを浮かべていることはよく分かった。

「う、うるさいわね」あたしの声はうわずっていた。

「だけど、あたしの口はするすると言葉を紡ぎ出す。」

「一目惚れを馬鹿にする人は、恋したことがない寂しい人間なのよ。知ってた？」

だって、あたしもそうだったから。そんなの馬鹿みたいだと思っ

てから。

カホさんがぐつと黙った。

・・・ひよつとしたらあたし、勝ったのかも。

彼女はながいため息をつき、それからぎゅつとあたしを抱きしめた。

「言うじゃないの。ま、それも経験ね」でも、カホさんの声はとても楽しそうだった。

そんなあたしたちを、パトリックがびっくりしたように見ている。あたしはあいつにほえんでみせた。後悔なんて、しないもの。

【END】

Mission 05:「幻獣」(後書き)

最終エピソードということで、いろいろ遊ばせてもらっています。
章ごとの視点の変更とか、宝探しとか、そしてバイオハザードとか
……。

「逃れられない運命でも、人はそれを帰ることができる」というい
ささか子供じみた感情が作者にはあります。

だからこのシリーズがひどく甘い願望充足小説であることも否定し
ません。

だけど、けどね。

こどもじみた何かが、奇跡を信じる何かが必要なときがあるのだ。
と作者は信じます。

では、またどこかで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7562r/>

トリスアギオン とある勇気のストーリィ

2011年4月11日09時56分発行